

Oracle Enterprise Manager

構成ガイド

リリース 2.0.4

1999 年 4 月

部品番号: A62836-1

ORACLE™

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド、リリース 2.0.4

部品番号： A62836-1

第 1 版： 1999 年 4 月

原本名： Oracle Enterprise Manager Configuration Guide, Release 2.0

原本部品番号： A67823-01

原本協力者： Sheri Craig, Werner De Gruyter, Erik DeMember, Mervyn Dennehy, Nestor Dutko, Arsalan Farooq, Jorge Fox, Todd Guay, Bryan Higgs, Marilyn Hollinger, Sonali Inamdar, Jacinda Johnson, John J. Kennedy, Dennis Lee, Priscilla Lee, Robert McCormick, Patricia McGonigle, Dimitris Nakos, Ted Pimentel, Bert Rich, Jonathan Riel, Malini Saxena, Peter Shih, Jennifer Hodge Smith, Preeti Somal, Jonathan Soule, and Dave Stowell.

Copyright © 1996, 1999, Oracle Corporation.

All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラムの使用、複製、または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。

危険な用途への使用について

当社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、または医療の分野など、本質的に危険が伴うアプリケーションを用途として特に開発されておりません。当社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は顧客各位の責任と費用により行っていただきたく、万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、当社および開発元である米国 Oracle Corporation（その関連会社も含みます）は一切責任を負いかねます。

本書の情報は、予告なしに変更されることがあります。本書に問題を見つけたら、当社にコメントをお送りください。オラクル社は、本書の無謬性を保証しません。

ORACLE は、Oracle Corporation の登録商標です。

本文中の他社の商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
------------	----

1 構成の概要

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ	1-1
基本用語	1-2
リポジトリとは	1-2
管理ユーザーとは	1-2
コンソールとは	1-3
Oracle Management Server とは	1-3
インテリジェント・エージェントとは	1-3
Data Gatherer サービスとは	1-3
サービス検出とは	1-4
優先接続情報リストとは	1-4
Oracle Enterprise Manager 構成の概要	1-4

2 リリース 2 リポジトリの作成

新規リリース 2 リポジトリの作成	2-3
ステップ 1 「構成操作」	2-4
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	2-5
ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」	2-6
ステップ 4 「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」	2-7
ステップ 5 「リポジトリ作成のサマリー」	2-8
ステップ 6 「構成アクションの進行」 ウィンドウ	2-9

3 管理サーバーの起動

管理サーバーの起動.....	3-1
管理サーバーの状態のチェック.....	3-2
管理サーバーの停止.....	3-2

4 管理サーバーの追加

追加管理サーバーのインストール.....	4-1
その他の管理サーバーの設定.....	4-2
ステップ 1「構成操作」.....	4-2
ステップ 2「構成パラメータ」.....	4-2
ステップ 3「構成パラメータを変更」.....	4-3

5 エージェントの起動

Windows NT での Oracle Intelligent Agent の起動および停止.....	5-1
Windows NT でのインテリジェント・エージェントの起動.....	5-2
Windows NT でのインテリジェント・エージェントの停止.....	5-2
エージェント移動の確認.....	5-3
コマンド・プロンプトからの起動、停止および状態の確認.....	5-3
UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止.....	5-3

6 コンソールの設定

Enterprise Manager コンソールの起動.....	6-1
Enterprise Manager の起動.....	6-2
Web ブラウザからの Enterprise Manager の起動.....	6-3
管理者アカウントの作成.....	6-3
サービスの検出.....	6-4
Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行.....	6-4
Oracle Enterprise Manager Website のインストール.....	6-5
コンソール URL についての注意.....	6-6
Oracle Enterprise Manager コンソールを実行する Web ブラウザの設定.....	6-7
一般設定.....	6-8
ジョブ制御システムの設定.....	6-9
ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成.....	6-9
管理対象サービスの優先接続情報リストの設定.....	6-11
UNIX でのジョブ制御システムの構成.....	6-12

電子メール通知の設定.....	6-12
NT 用ポケットベル・サービスの構成および起動.....	6-13
ポケットベルの設定.....	6-14
ポケットベル・サービスの起動.....	6-15
ポケットベル・サービスの状態の問合せ.....	6-16
ポケットベル・サービスの停止.....	6-16
数値ポケットベルのポケットベル状態コード.....	6-16
管理サーバー接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成.....	6-17
バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成.....	6-17
サーバー側 (NT).....	6-18
サーバー側 (UNIX).....	6-18
クライアント側 (Windows NT).....	6-20
バックアップ・モードの設定.....	6-20
SNMP の構成.....	6-21

7 リリース 1 リポジトリ・データのリリース 2 リポジトリへの移行

重要な注意	7-2
移行の段階.....	7-2
リリース 1 とリリース 2 の違いが移行に与える影響	7-2
リポジトリ移行の準備	7-5
新規のリリース 2.0 管理者の作成.....	7-6
リリース 1 コンソールの全サービスのリフレッシュ.....	7-7
リリース 1 コンソールとリリース 2 管理サーバーの停止.....	7-7
既存のリリース 1.x リポジトリのバックアップ.....	7-7
リリース 1.x リポジトリに現在ある情報の確認.....	7-8
Migration Assistant を使用したリポジトリの移行	7-8
ステップ 1 「イントロダクション」.....	7-9
ステップ 2 「コンポーネントの選択」.....	7-9
ステップ 3 「ソース・リポジトリ・ログイン」.....	7-11
ステップ 4 「ターゲット・リポジトリ・ログイン」.....	7-12
ステップ 5 「管理者データ」.....	7-12
進行中の作業.....	7-13
リリース 1 コンソールからの全アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除	7-14
移行成功の確認	7-14
移行の取消し	7-15
リリース 1 オブジェクト参照	7-16

リリース 2 に移行されるリリース 1 オブジェクト.....	7-16
再作成が必要なリリース 1 オブジェクト.....	7-19
なくなったリリース 1 オブジェクト.....	7-19

8 DBA Management Pack の設定

DBA Management Pack アプリケーションの起動	8-1
アプリケーションを個別に起動.....	8-1
管理サーバーへ接続.....	8-2
単一データベースへ接続.....	8-3
コンソールからのアプリケーションの起動.....	8-3
バックアップ管理およびデータ管理ウィザードへのアクセス.....	8-4
アプリケーションの設定	8-5
リカバリ・カタログの設定と Oracle8 への登録.....	8-5
表領域の作成.....	8-5
ユーザーの作成.....	8-6
catrman スクリプトの実行.....	8-6
リカバリ・カタログの登録.....	8-7
SQL*Plus Worksheet の設定.....	8-8
SQL*Plus 実行ファイル.....	8-8
SQL*Plus Worksheet の制限の解除.....	8-8
dbapps.cfg ファイルの編集.....	8-9

9 Diagnostics Pack の構成

Advanced Events の設定	9-1
Capacity Planner の設定	9-2
データを収集する Data Gatherer の構成.....	9-2
Windows NT での Capacity Planner 用ディスク統計収集の使用可能化.....	9-2
Performance Manager の設定	9-2
データを収集する Data Gatherer の構成.....	9-3
リリース 1.5.0 以前の Performance Manager ユーザー定義グラフの変換.....	9-3
パラレル・サーバー環境での Performance Manager の使用.....	9-4
Windows NT で Performance Manager 用ディスク統計収集を使用可能化.....	9-4
TopSessions の設定	9-5
Trace の設定	9-6
Oracle 8 サーバー収集での Trace の使用.....	9-6

Oracle 7.3.4 サーバー収集での Trace の使用	9-6
Trace リポジトリ表の作成	9-7
Trace フォーマット表の作成	9-7
新規フォーマット表の作成	9-7
既存のフォーマット表の削除	9-8
フォーマット表のアップグレード	9-8
その他の構成情報	9-8

10 Tuning Pack の構成

SQL Analyze の設定	10-1
Tablespace Manager の設定	10-2

11 Oracle Standard Management Pack の構成

Performance Manager の設定	11-1
データを収集する Data Gatherer の構成	11-2
リリース 1.5.0 以前の Performance Manager ユーザー定義グラフの変換	11-2
パラレル・サーバー環境での Performance Manager の使用	11-3
Windows NT で Performance Manager 用ディスク統計収集を使用可能化	11-4
TopSessions の設定	11-4

A ローカル・ディレクトリ構造

Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 のローカル・ディレクトリ構造	A-1
---	-----

B その他の Configuration Assistant 操作

既存リポジトリの削除	B-1
ステップ 1 「構成操作」	B-2
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	B-2
ステップ 3 「リポジトリを選択」	B-3
ステップ 4 「リポジトリの削除オプションを選択」	B-3
ステップ 5 「リポジトリ削除のサマリー」	B-4
ステップ 6 「構成アクションの進行」	B-4
構成パラメータの編集	B-4
ステップ 1 「構成操作」	B-5
ステップ 2 「構成パラメータ」	B-5

ステップ3「構成パラメータを変更」.....	B-6
構成ファイルにアクセス不能.....	B-6

C トラブルシューティング

カスタマ・サポートへの問題の報告.....	C-1
ロギングとトレースの設定.....	C-2
管理サーバーのトレースとロギング.....	C-3
バックアップおよびデータ管理ウィザードのトレースとロギング.....	C-4
クライアントのトレース.....	C-4
Web ブラウザのトレース	C-4
ポケットベルのトレース.....	C-5
管理サーバーのトラブルシューティング.....	C-5
デフォルト以外の Oracle ホームからは正しく実行できない可能性がある管理サーバー	C-6
クライアント・アクセス用の管理サーバーの変更.....	C-6
ポケットベル検出の確認.....	C-7
パスワードの再設定.....	C-7
Configuration Assistant のトラブルシューティング	C-8
Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー	C-8
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない.....	C-10
OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成	C-10
既存の表領域のサイズを拡張.....	C-11
リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ.....	C-11

索引

はじめに

この章では、このマニュアルの目的と構成について説明します。「はじめに」には、次の情報が含まれています。

- [このマニュアルの目的](#)
- [このマニュアルの対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [ドキュメント・セット](#)
- [関連資料](#)
- [このマニュアルの表記規則](#)

このマニュアルの目的

このマニュアルでは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 の構成方法を説明します。

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。グラフィカル・コンソール、エージェント、共通サービスおよびツールの組合せにより、Oracle 製品を管理するための統合された総合システム管理プラットフォームを提供します。

プログラムの更新、Oracle Enterprise Manager 使用上の重要な注意およびオンライン・ドキュメントについては、『Oracle Enterprise Manager リリースノート』を参照してください。

構成完了後は、Oracle Enterprise Manager の使用方法については、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

このマニュアルの対象読者

このマニュアルは、Oracle Enterprise Manager を構成するデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。読者は、Oracle と、実行する管理作業に精通している必要があります。

Oracle Server とその機能の概要は、『Oracle Server 概要』を参照してください。データベース管理の手順の詳細は、Oracle Server ドキュメント・セットを参照してください。Oracle Server ドキュメント・セットには、Oracle Enterprise Manager の各種ツールで実行できるデータベース管理作業について、具体的で詳細な説明が記されています。さらに、Oracle Server ドキュメント・セットでは、データベースの最適な管理方法についてのアドバイスも提供されています。

読者は、使用している特定の Microsoft または Solaris システムの操作についても精通している必要があります。必要に応じて、ご使用の Windows または Solaris システムのマニュアルを参照してください。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章から構成されています。

章	説明
第 1 章「構成の概要」	Oracle Enterprise Manager および付属ツールの構成の概要を説明。
第 2 章「リリース 2 リポジトリの作成」	Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して、新規のリポジトリを作成する方法を説明。
第 3 章「管理サーバーの起動」	Oracle Management Server の起動方法を説明。
第 4 章「管理サーバーの追加」	既存のリポジトリを管理するために、管理サーバーを追加する方法を説明。
第 5 章「エージェントの起動」	Oracle Intelligent Agent の起動方法を説明。
第 6 章「コンソールの設定」	Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 の構成と起動の方法を説明。
第 7 章「リリース 1 リポジトリ・データのリリース 2 リポジトリへの移行」	ユーザーの専用リリース 1.x リポジトリを新規のリリース 2.x リポジトリの特定のユーザーに移行する方法を説明。
第 8 章「DBA Management Pack の設定」	DBA Management Pack のアプリケーションの構成と起動の方法を説明。
第 9 章「Diagnostics Pack の構成」	Oracle Diagnostics Pack のアプリケーションの構成について説明。
第 10 章「Tuning Pack の構成」	Oracle Tuning Pack のアプリケーションの構成について説明。
第 11 章「Oracle Standard Management Pack の構成」	Oracle Standard Management Pack のアプリケーションの構成について説明。

章	説明
付録 A「ローカル・ディレクトリ構造」	Oracle Enterprise Manager のディレクトリ構造について説明。
付録 B「その他の Configuration Assistant 操作」	異なるリポジトリを使用、またはリポジトリ・ユーザーのパスワード変更に対して応答するために、リポジトリを削除し、ローカル管理サーバーをリダイレクトする方法について説明。
付録 C「トラブルシューティング」	考えられるトラブルシューティングの問題について説明。

ドキュメント・セット

Oracle Enterprise Manager リリース 2 のドキュメント・セットには、次のものがあります。

- 『Oracle Enterprise Manager リリースノート リリース 2.0.4』では、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースのほか、製品の実際の動作とマニュアルの説明との違いについても記されている。
- 『Oracle Enterprise Manager インストレーション・ガイド リリース 2.0.4』では、Oracle Enterprise Manager システムのインストールについて情報を提供。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド リリース 2.0.4』では、Oracle Enterprise Manager システムの構成について情報を提供。
- 『Oracle Enterprise Manager 概説 リリース 2.0.4』では、Enterprise Manager システムの概要を説明。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド リリース 2.0.4』では、Oracle Enterprise Manager システムのコンポーネントと機能について説明。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド リリース 8.1.5』では、Oracle Intelligent Agent の管理方法を説明。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル リリース 2.0.4』では、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨処置を説明。

Oracle Enterprise Manager ドキュメント・セットの他にも、Oracle Enterprise Manager では、各種コンポーネントの詳しいオンライン・ヘルプが提供されています。

関連資料

『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』では、関連出版物の重要な情報を参照しています。このマニュアルで参照されている関連書籍は、次のとおりです。

- Oracle Server とその機能の概要は、『Oracle Server 概要』を参照。
- Oracle Server の管理の詳細は、『Oracle Server 管理者ガイド』を参照。
- Oracle の前のバージョンからの移行の手順は、『Oracle Server 移行ガイド』を参照。

- Oracle の SQL コマンドおよび関数の詳細は、『Oracle Server SQL リファレンス』を参照。
- Oracle Server にバンドルされているユーティリティの詳細は、『Oracle Server SQL リファレンス』を参照。
- Oracle メッセージおよびコードの詳細は、『Oracle Server メッセージ』を参照。
- Oracle ネットワーキング・システムの詳細は、ネットワーク固有のマニュアルを参照。
- Windows NT での Oracle Server の詳細は、『Oracle Server for Windows NT インストール・レーションおよびユーザズ・ガイド』と、入手可能なシステム・リリースノートを参照。
- Oracle Parallel Server の詳細は、Oracle8i を Oracle Parallel Server および Oracle Enterprise Manager と一緒に使用するための準備について重要な情報を提供する『Oracle 8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照。「クイック・スタート」の項では、Oracle Parallel Server Management をすぐに使い始めるために実行する必要があるサーバー関連のステップとコンソール関連のステップがすべて列挙されています。
『Oracle Parallel Server Management ユーザーズ・ガイド』では、Oracle Enterprise Manager コンソールで Oracle Parallel Server を監視し、制御するための情報を提供しています。

このマニュアルの表記規則

ここでは、このマニュアルで使われている表記規則を説明します。

例

このマニュアルには、コードの例が記載されています。例のテキストは、このマニュアルの本文とは違う書体で示されていますので注意してください。次に示すのは、SELECT 文の例です。

```
SELECT * FROM emp
```

このマニュアルで示す例は、大文字と小文字を次の表記規則に基づいて使い分けています。

- CREATE、NUMBER などのキーワードは大文字で表記。キーワードには特別な意味があります。キーワードは大文字または小文字のどちらでも指定できますが、それらを使う場合はコード例と同じ表記をする必要があります。
- データベース・オブジェクトとそれらの部分の名前は、emp や empno のように、小文字で表記。ただし、このマニュアルの本文中では、データベース・オブジェクトとその部分の名前は、大文字で示されています。
- 例では、パラメータがプレースホルダの役割を果たす。パラメータは小文字で表記されます。パラメータは、通常、スキーマ・オブジェクトの名前、Oracle データ型または式

です。構文図でパラメータを参照する場合、該当する型のオブジェクトまたは式を代入してください。このマニュアルの本文では、パラメータ名はイタリック体で表記されますので注意してください。

コマンド構文

- イタリック体は、*application_name* など、変数に使用。適切な値を代入してください。
- | は、選択肢を示す。
- {*param1* | *param2* | ...} は、{} 内のパラメータの 1 つを指定する必要があることを示す。カッコは入力しないでください。
- [] は、オプション・パラメータを示す。カッコは入力しないでください。

構成の概要

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を集中管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。Oracle Enterprise Manager では、グラフィカル・コンソール、Oracle Management Server、Oracle Intelligent Agent、共通サービス、および Oracle 製品管理用の統合された包括的システム管理プラットフォームを提供するツールを組み合わせて使用します。

この概要では、次の内容について説明します。

- [Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ](#)
- [基本用語](#)
- [Oracle Enterprise Manager 構成の概要](#)

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャは、3 層から成っています。第 1 層のクライアントは、Java ベースのコンソールと標準アプリケーションで構成されています。第 2 層は、管理サーバーまたは指定した管理サーバー・グループで、インテリジェント機能の集中化と、クライアントとターゲット間の制御の分散を実現します。第 3 層は、データベース、ノードまたはその他の管理対象サービスなどのターゲットで構成されています。インテリジェント・エージェントはノードごとに 1 つ常駐して、そのノードのサービスに登録イベント（潜在的な問題の発生）がないかどうかを監視し、Oracle Management Server を介してコンソールによって送られたジョブを実行します。

Oracle Enterprise Manager の 3 つの主要コンポーネントは、次のとおりです。

コンポーネント	機能
コンソール	コンソールでは、強力かつ確実なシステム管理を実現する直観的なグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）により、Oracle 環境を一元的に管理できます。

コンポーネント	機能
管理サーバー	Oracle Management Server では、インテリジェント機能の集中化と、コンソールと管理対象ノード間の制御の分散化を実現し、コンソールによって送られるシステム管理タスクの処理と、企業全体にわたるこれらのタスクの分配を管理します。Oracle Management Server には、システム・データ、アプリケーション・データ、リポジトリ（データベース内に格納されている表の集合）に入っている管理対象ノードの状態に関する情報が、すべて格納されています。管理サーバーが複数ある場合は、ワークロードを自動的に分配して、バランスをとるため、高いパフォーマンスと拡張性が保証されます。
エージェント	エージェントは、ネットワーク内の管理対象ノードで稼動するプロセスです。管理サーバーを介してコンソールから送られたジョブやイベントを、実行する役目を果たします。エージェントは、コンソールまたはネットワーク接続の状態に関係なく機能するので、高い可用性が保証されています。

Oracle Enterprise Manager のコンポーネントは、管理環境によって異なるどのような構成でも実行できます。たとえば、コンポーネントをそれぞれ別のマシンで実行することも、1 つのマシンですべてのコンポーネントを実行することもできます。

リリース 2 のアーキテクチャの概要は、『Oracle Enterprise Manager 概説』の第 1 章を参照してください。

基本用語

次の用語の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概説』と『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

リポジトリとは

リポジトリは、管理する環境の状態に関する情報が格納された、データベース内の表の集合です。リポジトリは、Oracle Management Server によって、バックエンド記憶として使用されます。リポジトリは、Oracle Management Server の設定時に作成されます。リポジトリの表は、Oracle Management Server でアクセス可能などのデータベースにもインストールできます。

管理者がコンソールにログインすると、Oracle Management Server に直接接続され、コンソール上の表示は、管理者の持つ許可によって決まります。

管理ユーザーとは

Enterprise Manager では、管理者ごとに、個別の Enterprise Manager クライアント・アカウントを持ちます。Oracle Enterprise Manager の管理者は、Oracle Enterprise Manager スーパー管理者によって作成されます。管理者全員で、1 つの Oracle Enterprise Manager リリー

ス 2.0 リポジトリを共有します。リポジトリに格納されている管理データは、管理者の持つ許可に基づいてフィルタ処理されます。

優先接続情報リストなどの作業環境、ログイン・パスワードおよび通知スケジュールは、管理者ごとに設定する必要があります。

コンソールとは

コンソールは、管理者用のグラフィカル・インタフェースで、‘シン’または‘ファット’のいずれのクライアントとしても実行できる Java ベースのアプリケーションです。シン・クライアントでは、ブラウザを使用してコンソール・ファイルがインストールされているサーバーに接続するのに対し、ファット・クライアントでは、コンソール・ファイルをローカルにインストールする必要があります。

コンソールをどのように実行しても、システム管理タスクは Oracle Management Server がなければ実行できません。

Oracle Management Server とは

管理サーバーは、インテリジェント機能の集中化と、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散化を実現し、システム管理タスクを処理します。

管理対象ノードの増加にしたがい、Oracle Management Server を追加してワークロードを分散させ、バランスをとることができます。

同じノード群を管理する管理サーバーは、すべて 1 つのリポジトリを共有します。リポジトリには、その環境全体のシステム・データ、アプリケーション・データ、管理対象ノードの状態が全部格納されています。

管理サーバーを追加すれば、別の管理サーバーが使用不可能になった場合にも、その影響を受けずに稼働し続けることができます。

インテリジェント・エージェントとは

インテリジェント・エージェントは、各ノードにインストールされ、管理サーバーから送られたジョブの実行と、イベントの監視を行います。インテリジェント・エージェントは、管理サーバーやコンソールのクライアントから独立しているだけでなく、サポートするデータベースやサービスとも無関係に機能します。

Data Gatherer サービスとは

Oracle Data Gatherer は、パフォーマンスおよびその他のデータ収集に使用されます。Data Gatherer は Oracle Intelligent Agent の一部です。

Oracle Data Gatherer は、データ収集が必要なクライアント・アプリケーション（Oracle Capacity Planner や Oracle Performance Manager など）からの要求の処理を受け持ちます。クライアント・アプリケーションごとに、収集するパフォーマンス・データ（ファイル I/O または CPU 使用量のデータなど）と、データをサンプリングする間隔を指定します。その

結果、Oracle Data Gatherer では、指定した間隔で、クライアントのために要求されたデータを収集します。

Oracle Data Gatherer の構成の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

サービス検出とは

コンソールで「ノードの検出」コマンドを選択すると、管理サーバーがそのノードにインストールされているインテリジェント・エージェントに接続し、ノードにインストールされている Oracle サービスを検出します。

検出を行うと、管理サーバーでは、新しい情報をリポジトリに入れ、ノードと検出された個々のサービスをすべて表したビューを表示するコンソールのナビゲータ・ウィンドウを更新します。

サービス検出により、管理者はノードでのジョブの実行と、イベントの監視ができ、情報はコンソールで集中管理されます。

優先接続情報リストとは

各管理者は、ネットワーク内で管理するノード、リスナー、データベース、その他のサービスに対して、特定のユーザー名、パスワードおよびロールを設定できます。

優先接続情報リストを設定しておく、コンソールから管理するターゲットに接続するたびに、接続リストの設定を要求されることはなくなります。優先接続情報リストを設定すると、接続リストが必要なターゲットに対して、ジョブおよびイベント・システムを使用できます。ログイン設定リストは、すべてリポジトリ内で暗号化されます。

Oracle Enterprise Manager 構成の概要

Oracle Enterprise Manager および Oracle Enterprise Management パックを構成するには、次の手順を実行する必要があります。

手順のなかには、使用する製品の機能によってオプションになるものもあります。

手順	必須またはオプション	参照先
Configuration Assistant を実行して、リポジトリを作成。Configuration Assistant は、Oracle Enterprise Manager インストール時に自動的に実行されます。	必須。	2-1 ページの「リリース 2 リポジトリの作成」
Migration Assistant を実行して、リリース 1.x 環境で使用中のデータを、1 つまたは複数のプライベート・リポジトリから、新しいリリース 2.0 リポジトリの特定のユーザーに移行。	オプション。 リリース 1 リポジトリがない場合、このステップは省略してください。	7-1 ページの「リリース 1 リポジトリ・データのリリース 2 リポジトリへの移行」

手順	必須またはオプション	参照先
管理サーバーの追加。	オプション。 追加の管理サーバーの設定または追加が不要な場合、このステップは省略してください。多くの環境では、必要となる管理サーバーは1つだけです。	4-1 ページの「 管理サーバーの追加 」
インテリジェント・エージェントの起動。	必須。	5-1 ページの「 エージェントの起動 」
管理サーバーの起動。	必須。 最低1つの管理サーバーの起動と構成が必要です。	3-1 ページの「 管理サーバーの起動 」
コンソールの起動。	必須。	6-1 ページの「 Enterprise Manager コンソールの起動 」
管理者アカウントの作成。	必須。 アカウントを作成すると、管理者は独自のコンソール・ビューをカスタマイズし、管理者間で管理データを共有および保護できます。	6-3 ページの「 管理者アカウントの作成 」
サービスの検出。	必須。 データベースやリスナーなどのサービスが、Enterprise Manager のコンポーネントで管理されるように、ネットワーク・サービスを識別します。	6-4 ページの「 サービスの検出 」
Web ブラウザの設定。	オプション。 Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager コンソールを実行しない場合、このセクションは省略してください。	6-4 ページの「 Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行 」
ジョブ発行権限のある Windows NT ユーザー・アカウントの作成。	必須。 管理対象ノードでエージェントがジョブを実行するには、適切な NT ユーザー・アカウントが必要です。	6-9 ページの「 ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成 」
ノードでの優先接続情報リストの設定。	必須。 管理対象ノードでエージェントがジョブを実行するには、管理者ごとに、ノードの優先接続情報リストを設定します。	6-11 ページの「 管理対象サービスの優先接続情報リストの設定 」
UNIX でのジョブ制御システムの構成。	必須。 UNIX アカウントを設定すると、そのアカウントから発行されたジョブによって、管理タスクの実行、Oracle ホーム・ディレクトリへの書き込みアクセスの許可、ファイルに対する読み込みまたは実行アクセスが可能になります。	6-12 ページの「 UNIX でのジョブ制御システムの構成 」

手順	必須またはオプション	参照先
電子メール通知の設定。	オプション。 電子メール通知の設定により、電子メールによるジョブまたはイベントの通知を受けることができます。	6-12 ページの「 電子メール通知の設定 」
ポケットベル・サービスの設定。	オプション。 ポケットベルによるジョブまたはイベント通知を受ける場合は、ネットワークごとに1つのポケットベル・サービスのインストールが必要です。	6-13 ページの「 NT 用ポケットベル・サービスの構成および起動 」
バックアップまたは SYSDBA 管理のために、リモート・データベースを構成。	必須。 バックアップ管理ウィザードの1つを使用、または Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムによって、データベースの停止や起動などの管理タスクを発行する前に、データベースをリモート SYSDBA 管理用に設定する必要があります。	6-17 ページの「 バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成 」
SNMP トラップの構成。	オプション。 SNMP トラップ使用の予定がない場合、SNMP の構成は不要です。	6-21 ページの「 SNMP の構成 」
リカバリ・カタログの設定と登録。	オプション。 リカバリ・カタログで Oracle8 Recovery Manager を使用しない場合、このセクションは省略してください。	8-5 ページの「 リカバリ・カタログの設定と Oracle8 への登録 」
SQL*Plus Worksheet の設定。	オプション。 SQL*Plus 8i を使用すれば、SQL*Plus Worksheet のパフォーマンスを改善できます。	8-8 ページの「 SQL*Plus Worksheet の設定 」このセクションには、dbapps.cfg ファイル編集に関する情報があります。
Diagnostic Pack の設定。	オプション。 注意： Data Gatherer をインストールして起動し、Oracle Capacity Planner と Oracle Performance Manager が機能するように構成します。	9-1 ページの「 Diagnostics Pack の構成 」
Tuning Pack の設定。	オプション。	10-1 ページの「 Tuning Pack の構成 」
Change Management Pack の設定。	設定は不要。	
Oracle Standard Management Pack の設定。	オプション。 注意： Data Gatherer をインストールして起動し、Oracle Performance Manager が機能するように構成します。	11-1 ページの「 Oracle Standard Management Pack の構成 」

リリース 2 リポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager リリース 2.x では、リポジトリに管理する環境の状態の情報が入っており、管理サーバーによってバックエンド記憶として使用されます。管理サーバーは、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散を実現します。管理サーバーを追加すれば、管理能力を拡大し、耐障害性を高めることができます。

Enterprise Manager Configuration Assistant は、データベース管理者によるリポジトリ作成、削除、および構成パラメータのメンテナンスを支援します。

注意： Configuration Assistant は、Oracle Enterprise Manager のインストール時に、自動的に起動します。

最初は、Configuration Assistant の「リポジトリを作成」オプションを使用して、リリース 2 リポジトリを作成、ロードし、ローカルの Oracle Management Server の構成パラメータを設定します。

将来参照するために、付録 B では、リポジトリの削除や構成パラメータの編集に Configuration Assistant を使用するための情報を提供しています。

既存リポジトリを管理する管理サーバーの設定または追加の詳細は、4-2 ページの「[その他の管理サーバーの設定](#)」を参照してください。管理サーバーを実行するマシンごとに、Configuration Assistant を実行してください。

リポジトリの作成後、使用中の前の Enterprise Manager リリース 1.x から自分のリポジトリを移行する場合は、さらに別の手順を実行する必要があります。共有リリース 2.x リポジトリ・スキーマへのリリース 1 リポジトリの移行については、[第 7 章「リリース 1 リポジトリ・データのリリース 2 リポジトリへの移行」](#)を参照してください。

この章では、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して、新規のリポジトリを作成する方法を説明します。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant により、リリース 2 リポジトリが作成され、情報がロードされます。また、ローカルの Oracle Management Server の構成パラメータも設定されます。

注意： Oracle Enterprise Manager リポジトリ・スキーマを作成する前に、必ずデータベースをインストールし、実行しておいてください。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のタスクを自動的に完了します。

- Oracle Enterprise Manager リポジトリが含まれるスキーマの所有者であるデータベース・ユーザーに、適切な属性を作成し、割り当てる。
- リポジトリにリポジトリ・オブジェクトを移入する。
- Oracle Enterprise Manager の実行に必要な情報を、リポジトリにロードする。
- ローカルの Oracle Management Server の構成ファイル、`ORACLE_HOME\sysman\config\omsconfig.properties` の作成または更新（あるいはその両方）を行う。
- Oracle Enterprise Manager クライアントに情報をロードする。これにより、Oracle Enterprise Manager コンソールに、アクセス可能なすべての Oracle Management Server ノードが表示されます。
- Oracle Enterprise Manager インストールから Oracle Configuration Assistant を起動した場合、管理サーバーのサービスを開始する（Windows NT のみ）

注意： Oracle Enterprise Manager リリース 2 リポジトリは、リリース 1 リポジトリと同じではありません。Enterprise Manager 1.x では、各管理者が独自のリポジトリ・スキーマを持ち、そこにはネットワークの現在のビューと、ユーザー固有の情報が入っています。Enterprise Manager 2.0 では、管理者たちは、1 つの“共有”リポジトリ・スキーマ内に各自のアカウントと作業環境を持ちます。リリース 2.x の共有リポジトリ・スキーマへのリリース 1 リポジトリの移行の詳細は、[第 7 章「リリース 1 リポジトリ・データのリリース 2 リポジトリへの移行」](#)を参照してください。

新規リリース 2 リポジトリの作成

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant により、Oracle Management Server をインストールした同じノードで、ネットワーク内の任意の Enterprise リポジトリを作成または構成できます。ただし、構成の設定や変更は、Configuration Assistant が実行されているマシンにある構成ファイルにしか格納されません。

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニューから Oracle Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合

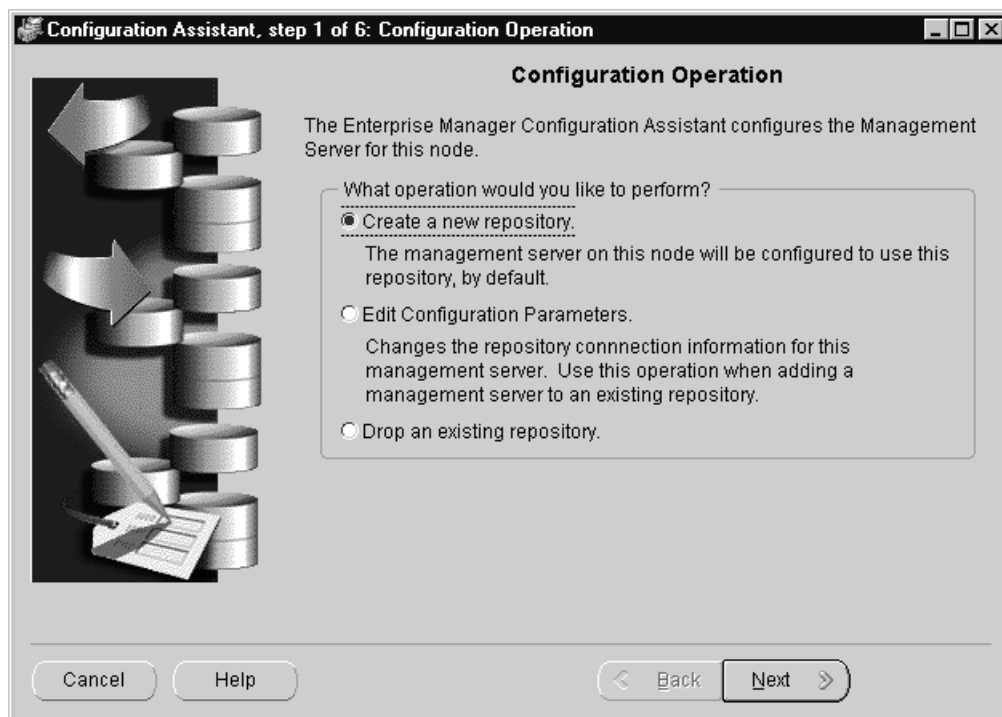
コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、Oracle Configuration Assistant を起動します。

```
emrepmgr
```

注意： Oracle Enterprise Manager インストールから Configuration Assistant を実行している場合、最初のページは「リポジトリのデータベースを選択」になります。この場合、2-5 ページのステップ 2 に進んでください。

ステップ1「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロン・アプリケーションとして起動すると、「構成操作」ページが表示されます。



リポジトリ操作のリストから、「新規リポジトリの作成」を選択し、「次」を押します。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。

ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」

リポジトリを置くデータベースにログインします。



ユーザー名とパスワード： データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。これは個人のデータベース・ユーザー・アカウントで、Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントではありません。

サービス： Net8 サービスがこの Oracle ホーム用に構成されていない場合、サービスが次の形式で指定されている可能性があります。

<host>:<port>:<sid>

ここで

host は、データベースがあるマシン名

port は、データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526

SID は、データベース・システム ID

例：

pjlee-pc:1521:orcl

「次」を押して、操作を続けます。

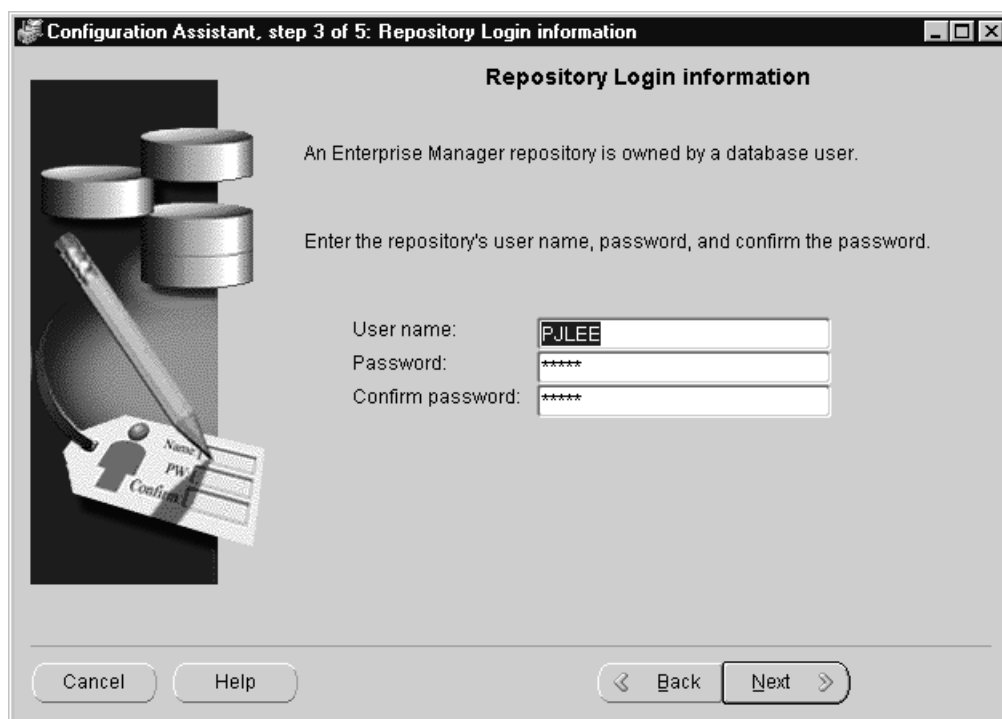
エラー・メッセージの詳細は、C-8 ページの「[Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

ログインに成功した場合は、2-6 ページの「[ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」](#)」に進んでください。

ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。

データベース・ユーザーの作成に使われるリポジトリ・ユーザー名と、そのユーザーのパスワードを入力し、パスワードをもう一度入力して確認します。



Configuration Assistant, step 3 of 5: Repository Login information

Repository Login information

An Enterprise Manager repository is owned by a database user.

Enter the repository's user name, password, and confirm the password.

User name:

Password:

Confirm password:

Cancel Help Back Next

注意： リポジトリ・ユーザー名は、ネットワーク全体で一意的な名前にしてください。マシンの TCP/IP ホスト名は一意的であると考えられるため、これがデフォルトとして使われます。別の名前を選択する場合は、それが一意であることを確認してください。インターネットでリポジトリのユーザー名を使用する場合には、会社名を含めることをお勧めします。

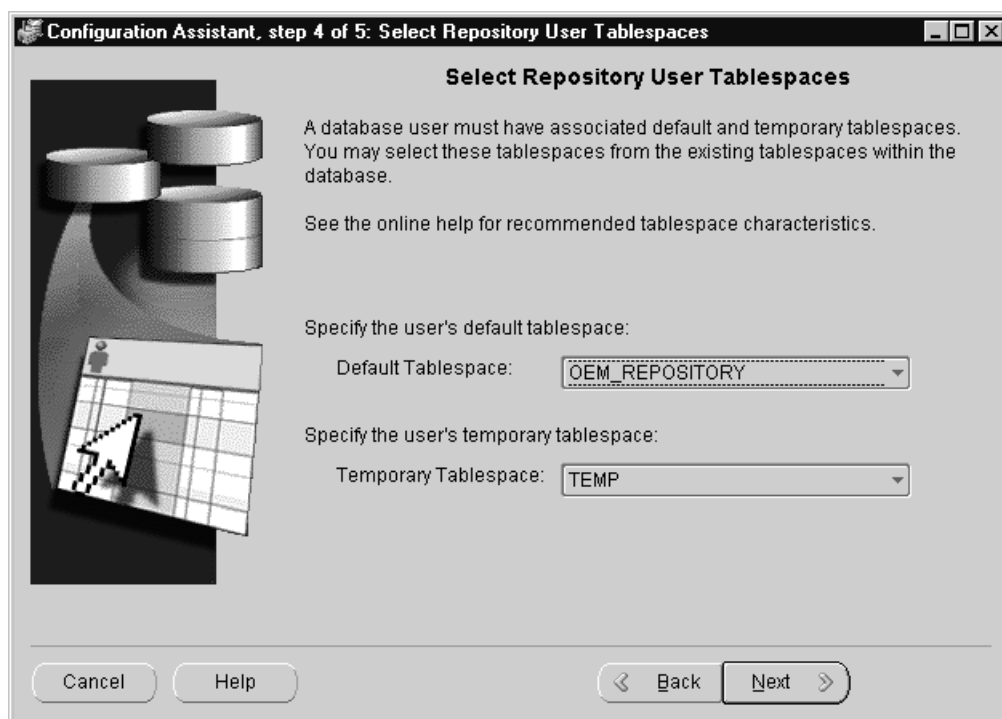
「次」を押して、操作を続けます。有効なリポジトリ名とパスワードを入力したら、2-7 ページの「[ステップ 4「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」](#)」に進んでください。

ステップ 4「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」

注意： 選択したデータベースに OEM_REPOSITORY 表領域が存在し、サイズ属性が適切な場合、または一般的なインストールから Configuration Assistant が実行されている場合、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページは表示されません。一般的なインストールの詳細は、『Oracle Enterprise Manager インストール・ガイド』を参照してください。

データベースにすでに存在するリポジトリ・スキーマを選択した場合にも、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページは表示されません。

「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページでは、デフォルトおよび一時表領域を指定します。推奨される表領域特性については、オンライン・ヘルプを参照してください。

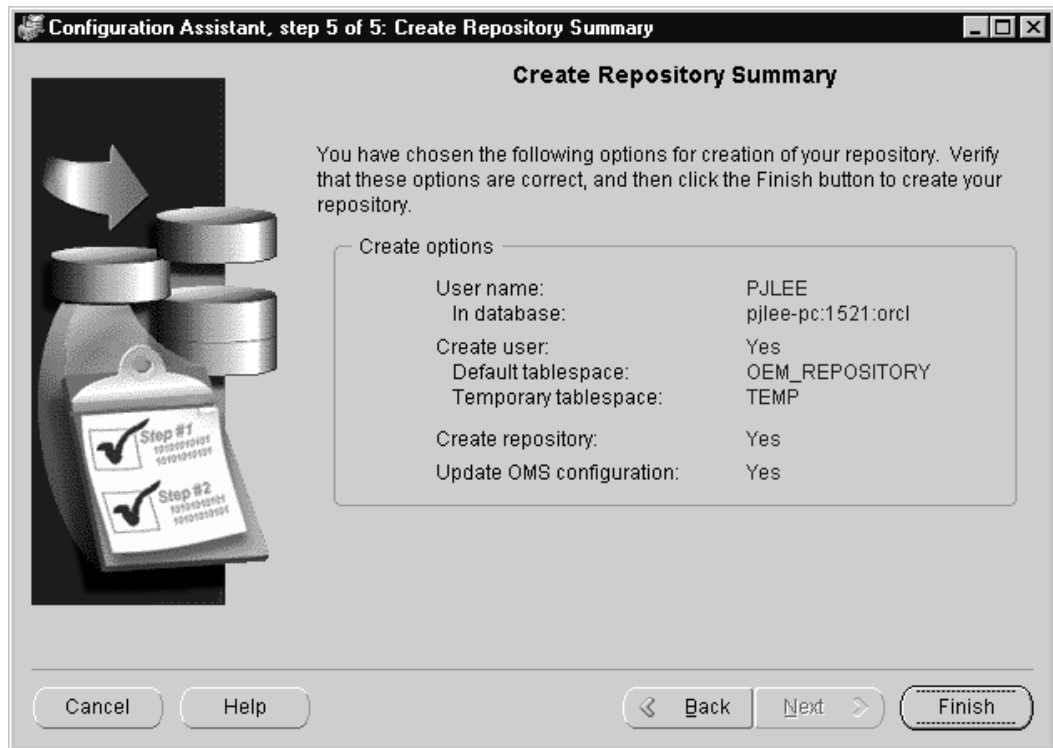


「次」を押して、操作を継続します。

Enterprise Manager Configuration Assistant によって、リポジトリ用のデフォルト表領域に最低限の空き領域しかないことが検知された場合、「リポジトリ作成のサマリー」ページが現れます。

ステップ5「リポジトリ作成のサマリー」

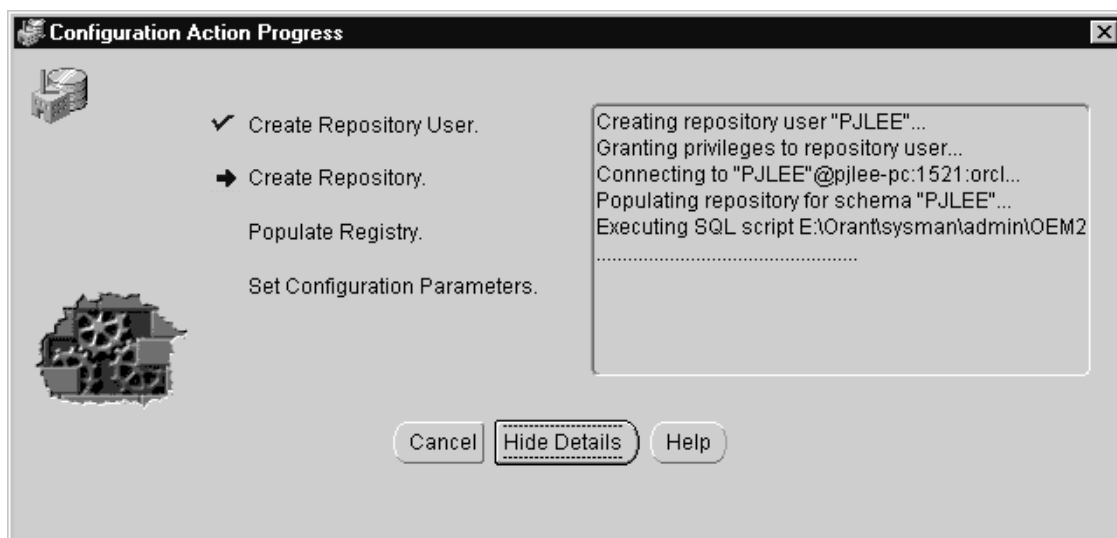
「リポジトリ作成のサマリー」ページには、リポジトリ作成ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックしてリポジトリ作成を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。



ステップ6「構成アクションの進行」ウィンドウ

「終了」ボタンをクリックすると、「構成アクションの進行」ウィンドウが現れ、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域には、発生した可能性のあるエラーを始め、処理中に起こっていることの詳細が表示されます。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。



結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「クローズ」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

注意： 処理の進行中にリポジトリの作成を取り消すと、リポジトリは不正な状態になります。リポジトリがどのような状態で残っているのかわからないので、Configuration Assistant を使って、リポジトリを削除する必要があります。

管理サーバーの起動

管理サーバーは、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散を実現します。通知の中央エンジンである管理サーバーでは、すべてのシステム管理作業の処理と、これらの作業の企業全体での分配管理が行われます。

管理サーバーを追加すれば、別の管理サーバーが使用不可能になった場合にも、その影響を受けずに稼働し続けることができます。管理サーバーが複数ある場合は、ワークロードを分配し、バランスがとられるため、高いパフォーマンスと拡張性が保証されます。

DBA Management Pack アプリケーションを別々のスタンドアロン・アプリケーションとして起動する場合は、管理サーバーは不要です。アプリケーション起動の詳細は、8-1 ページの「[DBA Management Pack アプリケーションの起動](#)」を参照してください。

注意： Oracle Enterprise Manager インストールから Configuration Assistant を起動した場合、管理サーバーのサービスは、リポジトリ作成中に Windows NT で自動的に開始されます。

管理サーバーの起動

管理サーバーの起動

- Windows NT の場合

Oracle Management Server NT サービスから、「コントロールパネル」>「サービス」によって管理サーバーを起動します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインに次のように入力して、管理サーバーを起動します。

```
oemctrl start oms
```

Solaris のバックグラウンドで管理サーバーを起動するには、次のように入力します。

```
% oemctrl start oms&
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

管理サーバーのリポジトリ接続情報を変更する必要がある場合は、B-4 ページの「[構成パラメータの編集](#)」を参照してください。

管理サーバーの状態のチェック

管理サーバーの状態をチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで、次のように入力します。

```
oemctrl status oms <EMAdministratorName>/<EmPassword>[@<hostname>]
```

UNIX では、コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。*EmPassword* でも大文字・小文字が区別されるので、最初に入力したとおりに入力してください。

EMAdministratorName は、Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者名です。

EmPassword は、Oracle Enterprise Manager スーパー管理者のパスワードです。

hostname は、管理サーバーが稼動しているマシンです。自分の管理サーバーがローカルに稼動している場合、@<hostname> は不要です。

指定する管理者名とパスワードは、自分の Oracle Enterprise Manager リリース 2 設定リストです。この設定リストを、個人のデータベース・ユーザー・アカウント（Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントやリポジトリ設定リストと異なる）のユーザー名およびパスワードと混同しないでください。

Oracle Enterprise Manager は、最初のログインに使用するデフォルトのスーパー管理者アカウントでインストールされます。スーパー管理者アカウントは *sysman*、初期パスワードは *oem_temp* です。パスワードは、最初のログインの後で変更してください。このアカウントを使用すると、必要に応じて他のスーパー管理者を作成できます。

状態情報には、次のものがあります。

- 管理サーバー全体の状態
- 管理サーバーが稼動中で、使用可能な期間
- 管理サーバーのパフォーマンスに関する統計

管理サーバーの停止

管理サーバーは、スーパー管理者でなければ停止できません。

- Windows NT の場合

Oracle Management Server NT サービスから、「コントロール パネル」>「サービス」によって管理サーバーを停止します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインに次のように入力して、管理サーバーを停止します。

```
oemctrl stop oms <EMAdministratorName>/<EmPassword>
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

EMAdministratorName は、Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者名です。

EmPassword は、Oracle Enterprise Manager スーパー管理者のパスワードです。

EmPassword でも大文字・小文字が区別されるので、最初に入力したとおりに入力してください。

指定する管理者名とパスワードは、自分の Oracle Enterprise Manager リリース 2 設定リストです。この設定リストを、個人のデータベース・ユーザー・アカウント (Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントやリポジトリ設定リストと異なる) のユーザー名およびパスワードと混同しないでください。

Oracle Enterprise Manager は、最初のログインに使用するデフォルトのスーパー管理者アカウントでインストールされます。スーパー管理者アカウントは *sysman*、初期パスワードは *oem_temp* です。パスワードは、最初のログインの後で変更してください。このアカウントを使用すると、必要に応じて他のスーパー管理者を作成できます。

管理サーバーの追加

3 層アーキテクチャの Oracle Enterprise Manager は、急速に規模が拡大する分散環境でのパフォーマンスのメンテナンスと、日常的な作業の自動化において、これまでにない拡張性があります。

ネットワーク内のノードと管理対象サービスが増加するにしたがい、中間層に Oracle Management Server を追加して、ワークロードを分担させ、バランスをとることができます。複数の Oracle Management Server がある環境では、複数の管理サーバーで同じリポジトリを共有します。

Oracle Management Server を複数使用することにより、互いの耐障害性が確保されます。1 つの Oracle Management Server に障害が発生しても、他のサーバーが稼動し続けます。障害が発生した管理サーバーに登録されているクライアントは、ただちにログインし直し、同じリポジトリを管理している他の管理サーバーのいずれかに登録すれば、残っている使用可能な Oracle Management Server で作業を継続できます。障害が発生したサーバー以外の Oracle Management Server に登録するように構成されているクライアントは、障害の影響を受けません。

この章では、既存のリポジトリを管理するために、管理サーバーを設定、または追加する方法を説明します。

注意： 既存のリポジトリを管理するために、管理サーバーを設定、または追加する必要がない場合は、この章を省略して先に進んでください。

追加管理サーバーのインストール

他に管理サーバーがインストールされていないマシンに、Oracle Enterprise Manager CD-ROM から追加の Oracle Management Server をインストールしてください。詳細は、『Oracle Enterprise Manager インストレーション・ガイド』を参照してください。

1. インストール時に、「使用可能な製品」パネルが表示されたら、インストールする製品として「管理サーバーと Enterprise Manager クライアント 2.0.4.0.0」を選択します。

2. インストール中に、Configuration Assistant が自動的に起動した場合は、停止してください。
3. Oracle Enterprise Manager インストールを終了します。
4. Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロン・アプリケーションとして再起動します。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって設定または変更されるのは、それが実行されているマシンの構成パラメータのみです。

Configuration Assistant では、それが実行されているマシンの構成パラメータ (omsconfig.properties ファイル) のみ設定できます。別のマシンの構成パラメータを変更することはできません。

- Windows NT の場合

Windows NT の「スタート」メニューから、Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインから emrepmgr を使って、Configuration Assistant を起動します。

その他の管理サーバーの設定

新規の管理サーバーを追加するときには、Configuration Assistant を実行して、そのノードの構成ファイルを更新してください。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「構成パラメータの編集」を選択し、「次」を押して操作を続けます。「構成パラメータ」ページが表示されます。

ステップ 2 「構成パラメータ」

「構成パラメータ」ページが表示されます。必要に応じてパラメータを変更します。

ユーザー名

このマシンの管理サーバーで管理する、既存のリポジトリのユーザー名を入力します。

パスワード

上のユーザー名のパスワードを入力します。この情報は、管理サーバーが次回起動するときに使用されます。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれに合わせて変更してください。

サービス

リポジトリが常駐するサービスを入力します。

この情報は、このマシンの管理サーバーが次回起動するときに使用されます。無効な情報があると、管理サーバーは起動しません。

注意： 次のページに進むには、このページのパラメータを少なくとも1つ変更する必要があります。何も変更せずに「次」ボタンを押すと、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistantでは、次のページに移動できません。

ステップ3「構成パラメータを変更」

「構成パラメータを変更」ページには、構成パラメータ変更ウィザード操作時に提供した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックして変更を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

エージェントの起動

Oracle Enterprise Manager では、ネットワーク内のリモート・ノードで実行されるプロセスであるインテリジェント・エージェントを使用して、ジョブの実行、イベントの監視、リモート・サイトでのデータ収集、およびそのエージェントが常駐するノードのサービスの検出を行います。エージェントのトラブルシューティングの詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

管理サーバーのローカル・エージェントを起動すると、管理サーバーの起動時に、サービスの自動検出が行われます。分散したサービスを検出するには、そのサービスが常駐するノードのエージェントを起動してください。

この章の内容は、次のとおりです。

- [Windows NT での Oracle Intelligent Agent の起動および停止](#)
- [UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止](#)

Enterprise Manager をインストールまたはご使用の前に、『Oracle Enterprise Manager リリースノート』にある互換性マトリックスをチェックしてください。

Windows NT での Oracle Intelligent Agent の起動および停止

インテリジェント・エージェントは、データベースに同梱されており、管理の必要があるサービスが常駐するマシンごとにインストールします。インテリジェント・エージェントは、Net8 通信ソフトウェアと同じ ORACLE_HOME にインストールしてください。エージェントは、データベースとは無関係にインストールできます。

インストール時に、エージェントを起動する NT サービスが作成されます。エージェントが最初の Oracle ディレクトリ・ツリー (DEFAULT_HOME) にインストールされると、サービス名は OracleAgent または OracleAgentXX (XX はリリース番号) となります。

エージェントがその他のディレクトリ構造にインストールされると、サービス名は Oracle<Oracle ホーム名>Agent または Oracle<Oracle ホーム名>AgentXX (XX はリリース番号) となります。

複数のリリースのインテリジェント・エージェントを、1 台のマシンにインストールできます。ただし、1 台のマシンで一度に稼動可能なエージェントは 1 つだけです。

この項には、Windows NT によるエージェントの制御とコマンド・プロンプトに関する情報があります。また、エージェントのトラブルシューティングに関する項もあります。

注意： Oracle Enterprise Manager とエージェントでは、Net8 を使用して当該データベースと通信します。エージェントの使用を試す前に、Net8 がすべての当該 SID と接続できることを確認してください。

Windows NT でのインテリジェント・エージェントの起動

Windows NT でエージェントを起動するには、次の手順を実行します。

1. 「コントロール パネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「OracleAgent」サービスを選択します。
3. 「起動」ボタンをクリックして、エージェントを起動します。

エージェントの「スタートアップの種類」は「手動」に設定されており、ユーザーがエージェントを起動できます。システムの起動時にエージェントを自動的に起動するには、「スタートアップの種類」を「自動」に設定します。

1. 「コントロール パネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「OracleAgent」サービスを選択します。
3. 「スタートアップ」ボタンをクリックします。「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「スタートアップの種類」で「自動」を選択します。
5. 「サービス」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

Windows NT でのインテリジェント・エージェントの停止

Windows NT でエージェントを停止するには、次の手順を実行します。

1. 「コントロール パネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「OracleAgent」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、エージェントを停止します。

エージェント稼働の確認

エージェントが稼働中であることを確認するには、コントロール・パネルのサービスでその状態を探るか、コマンド・プロンプトで `net start` を入力します。OracleAgent が、サービスのリストに表示されるはずです。

また、NT タスク・マネージャを表示して、`dbnmp` プロセスの情報を参照することもできます。

コマンド・プロンプトからの起動、停止および状態の確認

コマンド・プロンプトからエージェントを起動または停止するには、適切なコマンドを入力します。コマンド・プロンプトからは、サービスが稼働中であることも確認できます。

目的	入力するコマンド
プロンプトからエージェントを起動	<code>net start oracleagent</code>
プロンプトからエージェントを停止	<code>net stop oracleagent</code>
プロンプトからエージェントの状態を確認	<code>net start</code>

注意： Window NT のエージェントの起動に、`lsnrctl` コマンドは使用しないでください。

UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止

『Oracle Enterprise Manager インストレーション・ガイド』に従って、Oracle CD-ROM から Oracle Intelligent Agent をインストールします。インストール時に、インテリジェント・エージェントを別にインストールするように選択できます。

インテリジェント・エージェントは、データベースに同梱されており、管理の必要があるサービスが常駐するマシンごとにインストールします。インテリジェント・エージェントは、Net8 通信ソフトウェアと同じ `ORACLE_HOME` にインストールしてください。エージェントは、データベースとは無関係にインストールできます。

複数のリリースのインテリジェント・エージェントを、1 台のマシンにインストールできます。ただし、1 台のマシンで一度に稼働可能なエージェントは 1 つだけです。

UNIX の場合、Oracle Enterprise Manager では、lsnrctl を使用してエージェントが起動および停止されます。UNIX エージェントを制御する関連の lsnrctl コマンドは、次のとおりです。

目的	入力するコマンド
UNIX プラットフォームでエージェントを起動	lsnrctl dbsnmp_start
UNIX プラットフォームでエージェントを停止	lsnrctl dbsnmp_stop
エージェントの状態を確認	lsnrctl dbsnmp_status

ご使用のプラットフォームの追加情報または制限については、ORACLE_HOME/network/doc/README.oemagent にある「Intelligent Agent Readme」を参照してください。

コンソールの設定

Oracle Enterprise Manager コンソールは、管理者用のグラフィカル・インタフェースです。コンソールからは、次のタスクを実行できます。

- 複数のデータベースの集中的な管理、診断およびチューニング
- Oracle のデータベース以外の製品やサービスの管理
- 使用している Oracle 製品ファミリおよびサードパーティ・サービスの状態の、1 日 24 時間にわたる効率的な監視と対応
- 複数のノードで実行されるジョブの、さまざまな間隔によるスケジュール
- ネットワーク・サービスでのイベントの監視
- データベースやその他のサービスを論理的な管理グループごとにまとめて、表示をカスタマイズ

この章の内容は、次のとおりです。

- [Enterprise Manager コンソールの起動](#)
- [管理者アカウントの作成](#)
- [サービスの検出](#)
- [Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行](#)
- [一般設定](#)

Enterprise Manager コンソールの起動

コンソールでは、強力かつ確実なシステム管理を実現する直観的なグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) により、Oracle 環境を一元的に制御できます。

Enterprise Manager の初期操作を完了すると、Enterprise Manager コンソールの起動の準備が整います。

Oracle Enterprise Manager は、次の 3 つの方法で実行できます。

- Windows の「スタート」メニュー（Windows プラットフォーム）から
- コマンド・ラインから（UNIX）
- Web ブラウザから

Enterprise Manager の起動

1. Enterprise Manager コンソールを起動します。

- Windows プラットフォームの場合

Windows の「スタート」メニューから、該当する Oracle ホームの下にあるコンソールを起動します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインに次のように入力して、コンソールを起動します。

```
oemapp console
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

2. コンソールに初めてログインする場合、最初のログイン・ダイアログ・ボックスが表示されたら、スーパー管理者アカウントのデフォルトの設定リストを入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem_temp

3. 管理サーバーのプルダウン・リストから、アクセスするリポジトリで構成されている管理サーバーを選択します。

使用する管理サーバーの名前が表示されない場合は、次の指示に従ってください。

- a. 「管理サーバー」ボタンをクリックします。「管理サーバー」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- b. 「追加」ボタンをクリックします。「管理サーバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- c. 管理サーバー名を入力して、「OK」をクリックします。
- d. プルダウン・リストから管理サーバーを選択します。

4. 最初のログイン後、パスワードを変更するセキュリティ・ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ただちにパスワードを変更してください。

注意： パスワードは、半角英数字 8 文字までです。

Enterprise Manager コンソールを初めて起動する場合は、スーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して他の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、管理者としてログインできます。

『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 1 章の「管理サーバーへの接続」を参照してください。

Web ブラウザからの Enterprise Manager の起動

Oracle Enterprise Manager を使用すれば、データベース管理者は、一定のマシンや 1 種類のマシンに限定されずに、どこからでも管理作業を行えます。管理者はコンソールを“シン”または“ファット”クライアントとして実行できます。

シン・クライアントの場合、Web ブラウザを使用して、コンソール・ファイルがインストールされているサーバーに接続するのに対して、ファット・クライアントの場合は、コンソール・ファイルがローカルにインストールされています。コンソールを Web ブラウザから実行すると、DBA Management Pack アプリケーションへのアクセスをはじめ、通常コンソール・アプリケーションから実行するのと同まったく同じ管理タスクを実行できます。サポートされている Web ブラウザを実行し、サポートされている Web サーバーを使用するマシンならば、どのマシンでもこれらのタスクを実行できます。

Oracle Enterprise Manager コンソールを実行するための、Web サイトのインストールと Web ブラウザの設定の詳細は、6-4 ページの「[Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行](#)」を参照してください。

注意： オプション製品である Management Pack は、Web ブラウザでは実行できません。

管理者アカウントの作成

Enterprise Manager 2.0 は、複数管理者システムです。つまり、Enterprise Manager を使用してシステムを管理する人は、各自がコンソールやスタンドアロン・アプリケーションへのログインに使う管理者アカウントを持ちます。

Enterprise Manager をインストールすると、1 つのスーパー管理者が作成されます。このスーパー管理者アカウント名は sysman、初期パスワードは oem_temp です。

スーパー管理者 sysman は、「システム」メニューの「管理者の管理」項目を使用して管理者を作成できます。ユーザー名とパスワードの他に、各アカウントを“super administrator”アカウントまたは“regular”アカウントとして作成できるかどうかを指定できます。

スーパー管理者は、システムのセキュリティをすべてバイパスして、全オブジェクトに対するすべての権限を自動的に持つことができます。大部分のスーパー管理者は、日常の操作用に別のアカウントも持っていますが、管理サーバーの起動や停止、または新規の Enterprise Manager 管理者の作成など、スーパー管理者にしかできない特殊な操作には、スーパー管理

者アカウントを使用します。日常の管理作業に sysman アカウントを使用することは、お薦めできません。

レギュラー管理者は、コンソールの他のすべての操作に完全にアクセスできますが、参照し、変更できるのは、アクセス権のあるジョブ、イベントまたはグループに限られます。

管理者全員で、1つの Enterprise Manager リリース 2.0 リポジトリを共有します。リポジトリに格納されている管理データは、管理者の持つ許可に基づいてフィルタ処理されます。

管理ユーザー・アカウントごとに、優先接続情報リストを設定してください。管理者がデータベースまたはノードにログインするときには、優先接続情報リストが使用されます。

コンソールの「システム」メニューの「管理者の管理」項目で、Enterprise Manager の管理者がどのように作成、編集および削除されるかの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第2章の「Oracle Enterprise Manager 管理者の管理」を参照してください。

サービスの検出

コンソールのナビゲータには、ネットワーク・サービスを識別し、ナビゲータ・ツリーに移入するためのサービス検出機能があります。データベースやリスナーなどのサービスは、Enterprise Manager のコンポーネントによって管理できます。

管理サーバーの起動時に、管理サーバーが稼動しているマシンにあるエージェントや管理可能なサービスが、自動的に検出されます。コンソールのナビゲータには、管理サーバー・マシンのサービスがすべて表示されます。

ノードを検出するには、コンソールの「ナビゲータ」メニューから「ノードの検出」項目を選択します。次に、「ノードの検出」ダイアログ・ボックスのテキスト・ウィンドウに、ノード名を入力します。テキスト・ウィンドウで、検出するノードを1行ごとに入力すれば、複数のサービスを一度に検出できます。「OK」をクリックして、操作を続けます。

ノードが検出できない場合は、そのノードが停止しているか、またはノードでエージェントが稼動していない可能性があります。また、TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用していないかもしれませんので、注意してください。

『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第3章の「サービスの検出」を参照してください。

Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行

Oracle Enterprise Manager を使用すれば、データベース管理者は、一定のマシンや1種類のマシンに限定されずに、どこからでも管理作業を行えます。管理者はコンソールを“シン”または“ファット”クライアントとして実行できます。

シン・クライアントの場合、Web ブラウザを使用して、コンソール・ファイルがインストールされているサーバーに接続するのに対して、ファット・クライアントの場合は、コンソール・ファイルがローカルにインストールされています。コンソールを Web ブラウザから実行すると、DBA Management Pack アプリケーションへのアクセスをはじめ、通常インス

ツールしたコンソールから実行するのとまったく同じ管理タスクを実行できます。これらのタスクは、Web ブラウザをサポートしているどのマシンからでも実行できます。

Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager コンソールを実行するには、次の準備が必要です。

- 使用する Web サーバーへの Oracle Enterprise Manager Website のインストール
- Web ブラウザの設定

シン・コンソール実行用にサポートされているオペレーティング・プラットフォームは、次のとおりです。

- Windows NT
- Windows 95
- Windows 98

サポートされているブラウザは、次のとおりです。

- NT および Win95 上の Netscape Navigator 4.0.5+
- NT および Win95 上の Microsoft Internet Explorer 4+

サポートされている Web サーバーは、次のとおりです。

- Solaris 上の Apache 1.3.x
- NT および Solaris 上の Oracle Application Server 4.0.7+
- NT 上の Internet Information Server (IIS) 4.0
- NT および Solaris 上の Xitami 2.3+

Oracle Enterprise Manager Website のインストール

Web ブラウザから実行すると、Oracle Enterprise Manager では、他の Web サイトと同様の Web サイトのファイルにアクセスします。ご使用の Web サーバー固有のドキュメントに従って、Oracle Enterprise Website を設定してください。

Web サイト（コンテンツ）をインストールするには、次の作業を完了してください。

1. Web サイトの配置
2. cgi スクリプトの設定
3. 別名の構成

別名および cgi スクリプトの構成の詳細は、ご使用の Web サーバー固有のドキュメントを必ず参照してください。

ご使用の Web サーバーに Oracle Enterprise Manager Website をインストールするには、次の手順に従ってください。

1. oem_webstage アーカイブを検索します。

- 使用マシンに Enterprise Manager がインストールされている場合は、`$ORACLE_HOME/oem_webstage` ディレクトリの oem_webstage アーカイブを検索する。

Windows NT の場合、アーカイブは oem_webstage.zip となります。

Solaris の場合、アーカイブは oem_webstage.tar となります。

- Enterprise Manager リリース 2 がインストールされていないマシンに Web ステージを設定する場合、Oracle Enterprise Manager リリース 2 CD から oem_webstage.zip または oem_webstage.tar ファイルを、Web サーバーが稼動しているマシンにコピーする。

2. 次のいずれかの方法により、選択した位置でアーカイブを解凍します。選択した位置とは、ご使用の Web サイトの位置です。たとえば、`c:\oem` です。

- Windows NT の場合、WinZip を使用し、アーカイブからファイルを抽出する。PKUNZIP ユーティリティを使って、ファイルを抽出してもかまいません。
- Solaris の場合、次のコマンドを入力して、アーカイブからファイルを抽出する。

```
% tar -xvf oem_webstage.tar
% chmod +x oem_webstage/cgi-bin/oemconsole_cgi
```

その位置に oem_webstage ディレクトリが生成されます。たとえば、`c:\oem\oem_webstage` のようになります。

注意： Web サーバーの WWW ルート（`'/'` にマップされるディレクトリ）でアーカイブを解凍した場合は、ステップ 3 を省略してください。

3. ご使用の Web サーバーで、oem_webstage ディレクトリに、/oem_webstage 別名（ディレクトリ・マッピング）を構成します。別名設定の詳細は、ご使用の Web サーバー固有のドキュメントを参照してください。

たとえば、oem_webstage が `c:\oem` ディレクトリにインストールされている場合、パス `c:\oem\oem_webstage` を示すために、別名として /oem_webstage を設定できます。

コンソール URL についての注意

これで Web サイトがインストールされました。同じ Web サーバーを使用して、どの管理サーバーにも接続できます。

コンソール URL は、次のとおりです。

```
http://<webserver hostname>
/oem_webstage/cgi-bin/oemconsole_cgi.exe?<hostname>
```

hostname は、管理サーバーが稼動しているノード名です。

Web サーバー固有の指示

Web サーバー	別名の構成	URL の設定	その他
Apache 1.3.x	なし。	なし。	なし。
NT 上の Oracle Application Server 4.0.7+	次の 2 つの仮想ディレクトリを設定する。 <ul style="list-style-type: none"> ■ /oem_webstage/ (flag NR) ■ /oem_webstage/cgi-bin/ (flag CR) 	コンソール URL には、拡張子 (.exe) を付ける。 コンソール URL は、 http://<webserver hostname>/oem_webstage/cgi-bin/oemconsole_cgi.exe?<hostname> です。	なし。
Solaris 上の Oracle Application Server 4.0.7+	次の 2 つの仮想ディレクトリを設定する。 <ul style="list-style-type: none"> ■ /oem_webstage/ (flag NR) ■ /oem_webstage/cgi-bin/ (flag CR) 	なし。	なし。
Internet Information Server (IIS) 4.0	なし。	コンソール URL には、拡張子 (.exe) を付ける。 コンソール URL は、 http://<webserver hostname>/oem_webstage/cgi-bin/oemconsole_cgi.exe?<hostname> です。	Java プラグインのプロパティ・シートで、「アクセス」および「アプリケーションの設定」許可を設定する。 IIS 管理コンソールでは、「oem_webstage」ディレクトリの下にある「java-plugin」フォルダをマウスの右ボタンでクリックし、ポップアップ・メニューの「プロパティ」項目を選択します。 プロパティ・ページで、「アクセス許可」が「読み取り」に設定されていることを確認し、「アプリケーションの設定」許可を「なし」に変更します。
Xitami 2.3+	なし。	なし。	なし。

Oracle Enterprise Manager コンソールを実行する Web ブラウザの設定

Oracle Enterprise Manager コンソールを実行するために Web ブラウザを設定するには、この項の手順に従ってください。

注意： Netscape 4.0.5+ または Microsoft Internet Explorer 4+ のいずれかが、ご使用のクライアント・マシンに正しくインストールされていることを確認してください。

1. コンソール URL を入力します。

ご使用のコンソール URL の詳細は、6-6 ページの「[コンソール URL についての注意](#)」を参照してください。

2. 初めて URL を入力する場合は、最初にプラグインをインストールしてください。
 - Netscape では、プラグインのインストールを自動的に要求されます。

注意： プラグインのインストールを要求され、終了するか取り消すと、今後インストールは要求されなくなります。再びプラグインを取得するには、次の URL を入力してください。

```
http://<webserver  
hostname>/oem_webstage/java-plugin/install_win32.html
```

- Microsoft Internet Explorer では、次の URL を入力して、プラグインをインストールします。

```
http://<webserver hostname>/oem_webstage/java-plugin/install_win32.html
```

3. プラグイン Web サイトの指示に従って、プラグインをインストールします。
4. Web ブラウザを起動し、コンソールの URL を入力します。Oracle Enterprise Manager の画面が表示されます。

予想されるダウンロード時間は、『Oracle Enterprise Manager リリースノート』を参照してください。

5. URL のブックマークを作成します。

一般設定

この項では、ジョブ、電子メールとポケットベルによる通知、およびリモート SYSDBA 管理用のコンソールの設定に関する次の情報を提供します。

- [ジョブ制御システムの設定](#)
- [電子メール通知の設定](#)

- NT 用ポケットベル・サービスの構成および起動
- 管理サーバー接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの 構成
- バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

ジョブ制御システムの設定

この項の項目は、次のとおりです。

- ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成
- 管理対象サービスの優先接続情報リストの設定
- UNIX でのジョブ制御システムの構成

ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成

エージェントによって、管理対象ノードでジョブを実行するには、次の要件を満たす必要があります。

- 拡張ユーザー権限“バッチ ジョブとしてログオン”を持つ NT ユーザー・アカウントがある。権限は、既存のローカル・ユーザーまたはドメイン・ユーザー、または新規 NT ユーザーに割り当てられます。
- Oracle Enterprise Manager コンソールで、そのユーザーにノードの優先接続情報リストが設定されている。6-11 ページの「[管理対象サービスの優先接続情報リストの設定](#)」を参照してください。
- ユーザーには、ORACLE_HOME\NET80 ディレクトリに対する読み込み / 書き込み許可と、TEMP ディレクトリまたは ORACLE_HOME ディレクトリに対する書き込み許可が必要。

多くのコンポーネントで、エージェント・ノードからサーバー・ノードに対してジョブを発行できるようにするには、Windows NT のユーザー・アカウントを作成する必要があります。

注意：“バッチ ジョブとしてログオン”権限を設定しない場合、ノードでジョブを実行すると、「ユーザー認証に失敗しました。」というメッセージが表示されます。

管理対象ノードごとに、Windows NT ユーザー・アカウントを作成する必要があります。次の 3 つの手順のいずれかに従ってください。

新規 NT ユーザー・アカウントの作成

インテリジェント・エージェントがインストールされている NT マシン上に新規の NT ユーザー・アカウントを作成し、このユーザーに“バッチ ジョブとしてログオン”権限を付与するには、次の手順を実行してください。

1. Windows NT の「スタート」メニューで、「管理ツール」から「ユーザー マネージャ」を選択します。このツールの詳細は、Windows NT のドキュメンテーションを参照してください。
2. 「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択して、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていない。
 - ユーザー名として“SYSTEM”または“system”が使われていない。
3. 「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
4. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
5. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
6. 選択したユーザーにこの権限を付与します。

既存の NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を割り当てるには、次の手順を実行してください。

1. 「ユーザー マネージャ」パネルでユーザーを選択し、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていない。
 - ユーザー名として“SYSTEM”または“system”が使われていない。
2. 「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
3. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
4. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
5. 「追加」ボタンをクリックします。
6. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します（自分のドメインを選択）。
7. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
8. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
9. 「追加」をクリックします。

10. 「OK」をクリックします。
11. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

エージェント・ユーザーとしての NT ドメイン・ユーザーの構成

エージェント・ユーザーとしてドメイン・ユーザーを構成するには、次の手順を実行してください。

1. 「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
2. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
3. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
4. 「追加」ボタンをクリックします。
5. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します（自分のドメインを選択）。
6. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
7. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
8. 「追加」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。
10. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

注意： ローカル・ユーザーとドメイン・ユーザーの名前が同じである場合、ローカル・ユーザーが優先されます。

管理対象サービスの優先接続情報リストの設定

管理対象ノードでエージェントによってジョブの実行またはイベントの監視を行うには、そのノードで実行されているサービスに対して、各管理者が有効な設定リストを指定する必要があります。優先接続情報リストは、管理対象サービスごとにコンソールから設定されます。

コンソールで優先接続情報リストを設定するには、次の手順に従ってください。

1. 「システム」メニューの「作業環境」を選択して、インテリジェント・エージェントによる管理が可能なサービスを表示します。
2. 認証が必要な管理対象サービスには、ユーザー名、パスワードおよびロールなど、そのサービスに該当する設定リストを入力します。

3. あるタイプの複数のサービスに同じ設定リストが必要な場合、そのサービス・タイプに <DEFAULT> の設定リスト選択を使用して、同じタイプのすべてのサービスにその設定リストが使用されるようにします。

たとえば、Administrator_1 が管理するすべてのデータベースで foo/bar というユーザー名 / パスワードを持っているとすると、<DEFAULT> データベースの入力には、設定リストとして foo/bar を入力するだけで済みます。データベース管理作業では、すべてこの <DEFAULT> の設定リストが使用されます。

さらに、foo/bar 以外の設定リストが必要なデータベースが 1 つしかない場合は、その特定のデータベースを選択して、異なる設定リストを入力できます。

エージェントでは、実行するすべてのジョブと多くのイベントに対して、ユーザー名とパスワードの認証が行われます。優先接続情報リストを正しく設定しないと、ジョブやイベントは失敗する可能性があります。

NT ユーザーの場合、(NT エージェントが常駐する) ノードの優先接続情報リストを、「バッチ ジョブとしてログオン」に設定されたユーザーと同じに設定する必要があります。

UNIX でのジョブ制御システムの構成

1. DBA グループのメンバーである UNIX ユーザー・アカウントが設定されている必要があります。
2. DBA グループのメンバーである UNIX ユーザーには、UNIX 管理対象ホストの優先接続情報リストを設定する必要があります。

UNIX 上でジョブ制御システムを構成するには、管理対象ノードの優先接続情報リストを、DBA グループのメンバーである UNIX ユーザー・アカウントに設定してください。この結果、そのアカウントから発行されたジョブによって、管理タスクの実行、Oracle ホーム・ディレクトリへの書き込みアクセスの許可、およびファイルに対する読み込みまたは実行アクセスが可能になります。

電子メール通知の設定

Oracle Enterprise Manager では、SMTP を使用した電子メール通知の送信がサポートされています。管理者が電子メール通知を使用できるようにするには、SMTP 電子メール・システムで使われる SMTP メール・ゲートウェイを指定する必要があります。

Enterprise Manager コンソールの実行後、コンソールの「システム」メニューから「SMTP 構成」オプションを選択し、SMTP 情報を入力します。

フィールド	説明
SMTP メール・ゲートウェイ	SMTP メール・ゲートウェイが常駐するマシン名 (mailserver.company.com など) を入力する。

フィールド	説明
SMTP メール・アドレス	ユーザーが Enterprise Manager からメールを受信するときに表示される、送信者名を入力する。その名前は、Enterprise Manager Mail のように、Enterprise Manager システムからの電子メール送信に使用されます。一部の SMTP サーバーでは空白を処理できないので、“Enterprise Manager Mail” のように引用符を使用します。SMTP は TCP/IP ベースのメール・プロトコルで、コンソール・マシンに TCP/IP サービスが設定されている必要があります。

SMTP ゲートウェイを指定していない場合、どの管理者が電子メールを設定しようとしても、エラー・メッセージが表示されます。

管理者は、それぞれ特定の電子メールまたはポケットベル・アカウントの作業環境を定義する必要があります。作業環境を設定するには、コンソールの「システム」メニューから「作業環境」を選択します。「編集 管理者作業環境」プロパティ・シートが表示されます。「通知」ページで、管理者の SMTP メール・アドレスを入力します。

フィールド	説明
SMTP メール	管理者の SMTP メール・アドレス (jays@smp.com など) を入力する。
テスト	「テスト」ボタンをクリックして、メール情報が正しいことをチェックする。「電子メールのテスト」ダイアログ・ボックスで、電子メールの題とメッセージのテキストを入力します。「テスト」ボタンをクリックして、指定したメール ID にテスト・メールを送信します。テスト・メールの状態を知らせるメッセージが表示されます。

NT 用ポケットベル・サービスの構成および起動

Oracle Enterprise Manager でポケットベルによる通知を利用する場合は、Agent Extensions を明示的にインストールしてください。ポケットベルは、Oracle Enterprise Manager の基本インストールには含まれていません。ポケットベル・サービスのインストールの詳細は、『Oracle Enterprise Manager インストレーション・ガイド』を参照してください。

ポケットベル・サービスは、ネットワーク内の任意の Windows NT マシンにインストールできます。Oracle Enterprise Manager 内の通知用にポケットベルを利用する場合、インストールが必要なポケットベル・サービスは 1 つだけです。

ポケットベル・サービスは、インテリジェント・エージェントがインストールされている Oracle ホームにインストールしてください。ポケットベル・サービスのインストールには、paging.cfg というテンプレート構成ファイルが提供されており、ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリにあります。

ポケットベル・サービスを使用可能にするには、管理サーバーが稼動している必要があります。

注意： ポケットベル・サービスをインストールする NT マシンには、Enterprise Manager または Oracle Management Server がインストールされている必要はありません。

ただし、エージェントとエージェント拡張機能は必要です。

ポケットベル・サービスは、FLEX-TD 方式のポケットベルをサポートしております。詳細は、『Oracle Enterprise Manager リリースノート』を参照してください。

ポケットベルの設定

ポケットベルを設定するには、次のようにします。

1. ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリにある paging.cfg ファイルを編集します。
 - a. ご利用のキャリア・サービスの情報を入力します。paging.cfg ファイルには、ご利用のキャリアおよびサービス・プロバイダ固有の構成プロパティの定義方法に関する詳細な指示と例が含まれています。
 - b. ローカル管理サーバーを実行していない場合、ご使用の管理サーバーが実行されているマシン名を入力します。

```
OEM.MANAGEMENT_SERVER=<oms-hostname>
```

ローカル・マシンで管理サーバーを実行している場合は、名前を入力する必要はありません。

2. Oracle Intelligent Agent を再起動します。

注意： ポケットベルの構成を変更（追加または削除）したときには、必ずインテリジェント・エージェントを再起動してください。

構成の変更を有効にするには、エージェントを停止し再起動する必要があります。

3. 「コントロールパネル」>「モデム」を使用して、モデムの設定を指定します。

注意： ポケットベル・サービスを実行する Windows NT マシンには、モデムをインストールしてください。

- a. 「コントロール パネル」フォルダ内の「モデム」アイコンをダブルクリックします。
- b. モデム設定で、外線を利用するためにダイヤルする番号を指定します。
- c. ボー・レートを選択します。モデムの推奨ボー・レート設定は 9600 です。

注意： ボー・レートを 9600 より大きな値に設定すると、ポケットベル・サービス・キャリアでデータが失われる可能性があります。9600 というモデムのボー・レートは、推奨値にすぎません。ご使用のシステムに最適のボー・レート設定を見つけてください。

ポケットベル・サービスの起動

ポケットベル・サービスを起動するには、次のようにします。

1. 管理サーバーがまだ起動していない場合は、NT サービスの「コントロール パネル」から起動します。

ポケットベル・サービスを使用可能にするには、管理サーバーが稼動している必要があります。

注意： ポケットベル・サービスの構成は、管理サーバーとは関係ありません。管理サーバーが起動され、稼動していなければならないのは、ポケットベル・サービスを起動するときのみです。

2. NT サービスの「コントロール パネル」から、ポケットベル・サービスを起動します。
ポケットベル・サービスは、次のコマンドを入力しても起動できます。

```
oemctrl start paging
```

Enterprise Manager コンソールが実行されたら、次の手順を実行してください。

1. ポケットベル・サービスのあるノードを検出するか、コンソールから検出情報をリフレッシュします。

検出実行方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 3 章の「サービスの検出」を参照してください。検出後、ナビゲータ・ツリーに「ポケットベル・サービス」が表示されます。

2. 管理者のポケットベルの「作業環境」を指定します。

ポケットベルを使用する管理者ごとに、通知作業環境と通知スケジュールを設定する必要があります。

通知作業環境および通知スケジュールの設定方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 2 章の「Oracle Enterprise Manager 管理者の管理」を参照してください。

ポケットベル・サービスの状態の問合せ

ポケットベルの状態をチェックするには、キャリア名をマウスの右ボタンでクリックし、ポップアップ・メニューの「ポケットベル・サービスへの Ping」項目にアクセスします。

ポケットベル・サービスの停止

NT サービスの「コントロール パネル」から、ポケットベル・サービスを停止します。

ポケットベル・サービスは、次のコマンドを入力しても停止できます。

```
oemctrl stop paging
```

数値ポケットベルのポケットベル状態コード

数値ポケットベルは、次のように解釈されます。

ジョブ通知の場合、6 桁の数値を受信します。最初の 3 桁がジョブ ID、後の 3 桁がジョブの状態を示します。イベント通知の場合、イベント ID と状態コード 500 を受信します。

状態コードは、次のとおりです。

100 = ジョブ実行中

200 = ジョブ完了

300 = ジョブ失敗

400 = ジョブ削除

500 = イベント状態変化

たとえば、次のようになります。

ジョブ ID が JJJ の場合、

JJJ100	ジョブ # JJJ のジョブ実行中
JJJ200	ジョブ # JJJ のジョブ完了
JJJ300	ジョブ # JJJ のジョブ失敗

イベント ID が EE の場合、

EE500 イベント # EE のイベント状態変化

管理サーバー接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成

コンソールの接続にダイヤルアップ回線を使用する場合、コンソールが常駐するマシンでは、その都度、動的な IP アドレスが取得されます。この動的 IP アドレスは、オペレーティング・システム（Windows NT）によってアプリケーション（コンソール）に送られます。

オペレーティング・システムが正しい IP アドレスを返すには、ネットワーク通信プロトコル（TCP-IP）を、Dynamic Host 構成プロトコル（DHCP）を使用して、IP アドレスが取得されるように構成する必要があります。この設定は、次のように指定します。

1. 「コントロール パネル」>「ネットワーク」を選択します。
2. 「プロトコル」を選択します。
3. 「TCP-IP プロトコル」>「プロパティ」を選択します。

重要： イーサネットを介して同じマシンをネットワークに接続するときに、設定を元に戻せるように、前の設定を控えておいてください。「IP アドレス」、「サブネットマスク」および「デフォルト ゲートウェイ」で指定した設定は、ファイルにコピーしてください。

1. 「DHCP サーバーから IP アドレスを取得する」を選択します。
2. 変更を適用します。

ダイヤルアップ回線を介して、ネットワークに接続します。これで、コンソールを起動できるようになりました。

注意： Web ブラウザから実行していない場合には、変更後、システムを再起動する必要があります。

バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

バックアップ管理ウィザードの 1 つを使用、または Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムによって、データベースの停止や起動などの管理タスクを発行する前に、データベースをリモート SYSDBA 管理用に設定する必要があります。

次の手順は、サーバーおよびクライアントの両方で実行の必要がある操作の概略です。

追加情報： システムのパスワード・ファイル作成ユーティリティの正確な名前は、ご使用の Oracle データベースのオペレーティング・システム固有のマニュアルを参照してください。

サーバー側 (NT)

1. コマンド・プロンプトから、ORAPWD 実行ファイルを実行して、新規パスワード・ファイルを作成します。

```
$ORACLE_HOME\bin\orapwd file=orapw<SID> password=<SID_password> entries=10
```

ファイル名は orapw<SID> とします。entries=10 は、異なる DBA および OPER の最大数です。

orapw<SID> は、Oracle_Home\Database ディレクトリに作成されます。

2. Oracle_Home\Admin\Orcl\pfile ディレクトリにある init<SID>.ora ファイルを編集します。init<SID>.ora ファイルで、remote_login_passwordfile=exclusive という文を追加または変更します。
3. データベースを停止し、「コントロールパネル」>「サービス」で再起動します。
4. リモート SYSDBA 権限を持つユーザーがいない場合、1 つ作成します。次の例で、remote は、SYSDBA 権限を持つユーザー名です。
 - a. Security Manager を起動します。
 - b. SYSDBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
 - c. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。
 - d. 「一般」ページで、次の情報を入力します。

「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。たとえば、remote と入力します。

「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。たとえば、remote と入力します。
 - e. 「ロール」ページで、ユーザーに RESOURCE ロールを付与します。
 - f. 「システム権限」ページで、ユーザーに SYSDBA 権限を付与します。
 - g. 必要なパラメータを指定した後、「作成」ボタンをクリックします。

サーバー側 (UNIX)

1. ORACLE でログインし、ご使用の環境変数を設定します。

```
setenv ORACLE_HOME your_oracle_home
setenv ORACLE_SID your_oracle_sid
```

注意： この例では、データベースを ORACLE として設定したものと想定しています。

2. Oracle ホームの dbs ディレクトリに移ります。

```
cd $ORACLE_HOME/dbs
```

3. ORAPWD 実行ファイルを実行して、新規パスワード・ファイルを作成します。

```
$ORACLE_HOME/bin/orapwd file=orapw<SID> password=your_password entries=10
```

ファイル名は、*orapw<SID>* とします。entries=10 は、異なる DBA および OPER の最大数です。

\$ORACLE_HOME/dbs で *orapw<SID>* を作成する必要があります。

4. *init<SID>.ora* ファイルを編集します。*init<SID>.ora* ファイルで、remote_login_passwordfile=exclusive という文を追加または変更します。

5. データベースをいったん停止してから再起動します。

- a. SQL*Plus Worksheet を起動します。
- b. SYSDBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
- c. 次のコマンドを入力します。

```
shutdown immediate  
startup
```

6. リモート SYSDBA 権限を持つユーザーがまだいない場合、1 つ作成します。次の例で、remote は、SYSDBA 権限を持つユーザー名です。

- a. Security Manager を起動します。
- b. SYSDBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
- c. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。
- d. 「一般」ページで、次の情報を入力します。
「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。たとえば、remote と入力します。
「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。たとえば、remote と入力します。
- e. 「ロール」ページで、ユーザーに RESOURCE ロールを付与します。
- f. 「システム権限」ページで、ユーザーに SYSDBA 権限を付与します。
- g. 必要なパラメータを指定した後、「作成」ボタンをクリックします。

クライアント側 (Windows NT)

ターゲット・データベースの起動および停止をリモートから行う場合は、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールのナビゲータから、ターゲット・データベースを選択するか、Instance Manager を起動します。
2. SYSDBA 権限を持ったユーザーとしてログインします。
3. 「初期化パラメータ」をダブルクリックします。「初期化パラメータ」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「保存」をクリックします。「構成の保存」プロパティ・シートが表示されます。
5. 構成名を入力します。
6. 「格納パラメータ」一覧の「コメント」列に表示するコメントを入力します。
7. 「OK」をクリックします。
8. リモート SYSDBA ログインをテストします。Instance Manager を起動して、SYSDBA 権限で作成したばかりのユーザーでログインします。作成して格納した構成を使って、データベースを起動または停止できなければなりません。

バックアップ・モードの設定

オンライン・バックアップ (ホット・バックアップ) を実行する場合は、データベースを ARCHIVELOG モードにする必要があります。それ以外の場合は、データベースを停止してから、バックアップを実行してください。デフォルトでは、データベースは NOARCHIVELOG モードになります。

データベースを ARCHIVELOG モードにするには、次のようにします。

1. init.ora データベース初期化ファイルの次のセクションを、指示に従って編集します。

```
# Uncommenting the line below will cause automatic archiving if archiving has
# been enabled using ALTER DATABASE ARCHIVELOG.
# log_archive_start = true
# log_archive_dest = %ORACLE_HOME%\database\archive
# log_archive_format = "%%ORACLE_SID%%T%TS%S.ARC"
```

2. Instance Manager の「データベース」メニューから、「アーカイブ・ログ」にチェックマークを付けます。

バックアップおよびリカバリ方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

SNMP の構成

注意： SNMP トラップ使用の予定がない場合、SNMP の構成は不要です。デフォルトの Oracle Enterprise Manager アーキテクチャには、SNMP は不要です。SNMP は、サードパーティのツールとのインタフェースをとる場合にのみ必要です。

SNMP によって、ネットワーク自体のアクティビティの監視に従来使われてきたのと同様と同じ方法とツールで、中央のノードで稼働中の管理ステーションにより、企業のネットワーク上の任意の場所で稼働している主要な Oracle 製品を検索、識別および監視できます。その結果、データベース管理者およびネットワーク管理者の作業が統合され、両者とも同じツールを使用して、作業の統合を改善できます。従来、SNMP が使われているツールには、ネットワーク・コンポーネントを監視する強力な機能があります。Oracle ではこの機能が拡張され、SNMP により一部の Oracle 製品を監視できるようになりました。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 では、イベントの SNMP トラップ・サポートが使用可能になりました。

1. Oracle Enterprise Manager のコンソールの「イベント」メニューから、「イベントを作成」を選択します。「イベントを作成」パネルが表示されます。
2. 「許可」ページを選択します。
3. 「外部サービス（エージェントによる SNMP トラップ）への通知を使用可能にする」チェックボックスにチェックマークを付け、そのイベントですべてのイベント・テストに SNMP トラップを使用可能にします。

「外部サービス（エージェントによる SNMP トラップ）への通知を使用可能にする」メッセージが表示されます。

Oracle データベースと Oracle Enterprise Manager に SNMP を構成する一般的な手順は、『Oracle SNMP サポート・リファレンス・ガイド』を参照してください。

SNMP の構成はプラットフォームにより異なるので、より包括的な構成情報は、ご使用のプラットフォーム専用サーバーのインストール・ガイドまたは構成ガイドを参照してください。

リリース 1 リポジトリ・データのリリース 2 リポジトリへの移行

Oracle Enterprise Manager Migration Assistant では、Oracle Enterprise Manager と Oracle Enterprise Management Pack 双方のデータの移行をサポートしています。

注意： Migration Assistant は、Windows プラットフォームでしか実行されません。

この章では、リリース 1.x の複数のリポジトリ・スキーマを、リリース 2.x の 1 つの共有リポジトリ・スキーマに移行する方法について説明します。

注意： リリース 1 リポジトリがない場合は、この章を飛ばして、次に進んでください。

Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリ・スキーマは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 の共有リポジトリ・スキーマとは異なります。Enterprise Manager リリース 1.x では、各管理者が、ネットワークの現在のビューとユーザー固有の情報の入った個別のリポジトリ・スキーマを持っていました。Enterprise Manager リリース 2.0 では、管理者が 1 つの共有リポジトリ・スキーマ内にアカウントを持ち、それぞれの作業環境は、すべて各管理者のアカウントに格納されています。

Oracle Enterprise Manager Migration Assistant により、リポジトリの移行が容易になり、現在のリリース 1.x の情報がリリース 2.0 への移行時になくなることはありません。

Migration Assistant では、リリース 2.0 リポジトリへの次の情報の移行がサポートされています。

- 検出情報

- 優先接続情報リスト
- ジョブ情報
- イベント情報
- グループ

重要な注意

移行を開始する前に、データベースとリリース 1.x リポジトリのバックアップを取って、万一失敗した場合に、現在の Oracle Enterprise Manager リリース 1.x 環境とリリース 2.0 環境を確実に回復できるようにしておいてください。

リリース 1.x リポジトリを完全に移行してから、リリース 2.0 でなんらかの作業を実行すると、そのリポジトリを再びリリース 1.x では使用できなくなります。リリース 2.0 へのリポジトリ移行中に問題が発生し、ロール・バックできるのは、移行前の手順を完全に実行し、リリース 2.0 の環境でまだ作業を開始していない場合に限られます。

移行の段階

リリース 1.x リポジトリの移行の段階は、次のとおりです。

1. [リポジトリ移行の準備](#)
 - a. [新規のリリース 2.0 管理者の作成](#)
 - b. [リリース 1 コンソールの全サービスのリフレッシュ](#)
 - c. [既存のリリース 1.x リポジトリのバックアップ](#)
 - d. [リリース 1.x リポジトリに現在ある情報の確認](#)
2. [Migration Assistant を使用したリポジトリの移行](#)
3. [リリース 1 コンソールからの全アクティブ・ジョブおよび イベントの削除と登録解除](#)
4. [移行成功の確認](#)

リリース 1 とリリース 2 の違いが移行に与える影響

リポジトリの移行操作により、既存のリリース 1.x リポジトリはいくつかの点で変わります。

リリース 1 オブジェクトの総合的なリストと、それらのリリース 2 移行の可否は、7-16 ページの「[リリース 1 オブジェクト参照](#)」を参照してください。

リポジトリ

Migration Assistant では、複数の Oracle Enterprise Manager リリース 1.6.0 リポジトリを 1 つのリリース 2.0 リポジトリに移行します。Oracle Enterprise Manager のそれより前のリリースのリポジトリは、移行が開始される前にリリース 1.6.0 に自動的にアップグレードさ

れます。移行が可能な Oracle Enterprise Manager の最も古いリリースは 1.2 です。これは、リリース 1.6.0 への自動アップグレードがサポートされている最も古いリリースです。Oracle Enterprise Manager リリース 1.2 のリポジトリは、自動的にリリース 1.6 にアップグレードされ、リリース 2.0 のターゲットに移行されます。既存の Oracle Enterprise Manager のソフトウェアが 1.6.0 より前のリリースの場合、移行後のリポジトリに対して実行されることはありません。

優先接続情報リスト

ユーザー名、パスワードおよびロールが移行されます。複数のリリース 1 リポジトリが、管理者 1 人の 1 つのリリース 2 リポジトリに移行されると、複数のリリース 1 リポジトリにあったサービスに対して移行される最初の優先接続情報リストは、移行される最初のリリース 1 リポジトリの優先接続情報リストです。

グループ

リリース 1 では、複数のジョブやイベントは 1 つのグループに登録でき、コンソールでは 1 つのジョブまたはイベントとして表示されます。リリース 2 では、1 つのジョブまたはイベントを 1 つのグループに登録すると、コンソールには、そのジョブまたはイベントに登録したサービスごとに、個別のジョブまたはイベント・オブジェクトが表示されます。リリース 1 で 1 つのグループに登録されたジョブまたはイベントをリリース 2 に移行すると、リリース 2 のコンソールでは、そのジョブまたはイベントに登録したグループ内のサービスごとに、個別のジョブまたはイベント・オブジェクトが表示されます。

ジョブ

- 修正ジョブ以外のアクティブ・ジョブと、リリース 2 の頻度制限内のアクティブ・ジョブのみが、自動的に Oracle Enterprise Manager のジョブ制御システムに発行されます。
- すでに NAME と名付けられたジョブがあるターゲット・データベースに同じ名前のジョブを移行すると、そのジョブは移行時に NAME(1) と名前が変更されます。すでに NAME(1) がある場合は NAME(2) というように、順次名前が変更されます。

バックアップ・ジョブ

リリース 1 でバックアップ・ジョブの実行中に、そのデータを移行する場合、そのジョブはリリース 2 では tcl ジョブとして表示されます。**注意：**ジョブ・ライブラリ内のバックアップ・ジョブは、移行されません。Oracle Enterprise Manager コンソールでは、マネージャのバックアップ・ジョブと表領域のバックアップ・ジョブは異なります。

修正ジョブ

リリース 1 の修正ジョブは、リリース 2 のジョブ・ライブラリに移行されますが、自動的に発行されません。リリース 2 の修正ジョブは、移行後にリリース 2 のジョブ・ライブラリから手動で再発行する必要があります。リリース 1 のイベントとそれに関連付けられたリリース 1 の修正ジョブは分離され、リリース 2 のイベント・ライブラリとジョブ・ライブラリに（発行されずに）別々に置かれます。移行後に、リリース 2 のイベント・ライブラリでリリース 2 のイベントを編集し、リリース 2 から手動で再発行した修正ジョブと改めて関連付けてください。

イベント

- 修正ジョブと関連付けられていない登録イベントと、リリース 2 の頻度制限内のイベントのみが、自動的に発行されます。

- すでに NAME と名付けられたイベントがあるターゲット・データベースに同じ名前のイベントを移行すると、そのイベントは移行時に NAME(1) と名前が変更されます。すでに NAME(1) がある場合は NAME(2) というように、順次名前が変更されます。
- 修正ジョブをイベントに関連付けるには、宛先のタイプをリリース 2 内の同じものにします。たとえば、サービス・タイプの“データベース”でリリース 1 のイベントを作成し、それをサービス・タイプの“ノード”の“メッセージの配布”など、リリース 1 の修正ジョブに関連付けていたとします。サービス・タイプの異なるリリース 1 のイベントとリリース 1 の修正ジョブは、関連付けて一緒に登録できます。リリース 2 では、宛先タイプは、関連付けて一緒に登録する修正ジョブの宛先タイプと同じでなければなりません。

上の例のように、イベントと修正ジョブを移行する場合、リリース 1 の修正ジョブに「類似作成」を実行し、このジョブのリリース 2 の宛先タイプを、リリース 2 のイベントと同じになるように変更してください。

イベント・セット

- リリース 1 のアーキテクチャでは、イベント・セットは、検出した 1 つのサービスに登録された個々のイベントの集合です。リリース 2 のアーキテクチャでは、イベントは個々のテストの集合です。リリース 2 のイベントは、リリース 1 のイベント・セットと似ています。リリース 2 では、リリース 1 の個々のイベントを、テストと呼ぶようになりました。各テストにはリリース 1 のイベントから機能や設定が引き継がれており、イベントはリリース 1 のイベント・セットと同じように定義できます。リリース 1 のイベント・セットを移行する場合、そのイベント・セット内の各イベントは、個別のイベントとしてリリース 2 に移行されます。
- リリース 2 のイベントの場合、頻度、頻度の単位および修正ジョブが「イベント」(最上位)レベルに割り当てられます。これらの項目は、リリース 1 では「イベント」(下位)レベルに割り当てられていました。リリース 1 のイベント・セットで、全イベントについてこれらの項目が異なる場合、各イベントは、リリース 2 の個別のイベントに移行されます。これらの項目が、リリース 1 のイベント・セットの全イベントで同じ場合、イベント・セット全体が、リリース 2 の 1 つのイベントに移行されます。

頻度

リリース 2 のジョブとイベントに対する頻度のオプションは、リリース 1 と異なります。リリース 1 でサポートされていて、リリース 2 ではサポートされていない頻度のジョブまたはイベントは、リリース 2.0 の環境でもう一度発行またはスケジュールしてください。たとえば、次のようになります。リリース 2.0 のイベントでは、24 時間未満のポーリング間隔がサポートされています。リリース 1 では、ポーリング間隔は 24 時間以上でも未満でもかまいません。

Performance Manager/Capacity Planner

リリース 1 の Performance Manager と Capacity Planner のリポジトリは、いくつでもリリース 2 のリポジトリに移行できますが、それぞれ独自のリリース 2 の管理者に関連付けられている必要があります。

Oracle Change Management Pack

- **注意：** Change Manager のリリース 1.5.5 リポジトリを移行する場合、移行プロセスでは、移行前にまずリポジトリがリリース 1.6 にアップグレードされます。このアップグレードは元に戻すことはできず、このリポジトリで Change Manager リリース 1.5.5 は使用できなくなります。したがって、移行後に Change Manager リリース 1.5.5 でリリース 1.5.5 リポジトリを引き続き使用するには、リポジトリのバックアップを取り、復元する必要があります。
- Oracle Change Management Pack のリリース 1.x の各リポジトリは、どの管理者についても変更計画や基準がないリリース 2.0 のリポジトリに移行します。管理者に変更計画または基準がある場合、Change Management Pack リリース 1.x リポジトリの移行を開始する前に、その計画または基準を削除してください。削除しないと、Change Management Pack の移行は失敗します。この場合、`sysman\temp\vobmgr.log` ファイルに、削除すべき計画または基準を持つリリース 2.0 リポジトリ内の管理者を識別するメッセージが含まれます。変更計画の削除には Plan Manager を、基準の削除には DB Capture を使用します。

Expert

Oracle Expert リリース 1.x リポジトリの表は、Oracle Expert チューニング・セッションのエクスポートとインポートの方法を使って、リリース 2.0 リポジトリに移行します。リリース 1.x リポジトリ内の全データベース下のチューニング・セッションは、すべて .xdl ファイル（データベースごとに 1 つ）にエクスポートされ、選択した Oracle Enterprise Manager ユーザーの下にあるリリース 2.0 のリポジトリにインポートされます。

ポケットベル・サービス

- リリース 1 ユーザーのスケジュール情報は、リリース 2.0 の管理者に移行されません。各ユーザーは、リリース 2.0 環境で、新しいポケットベルのスケジュールを定義する必要があります。
- ポケットベル構成情報は、リリース 2.0 に移行されません。各ユーザーは、リリース 2.0 環境で新しいポケットベル構成情報を定義する必要があります。

電子メール・サービス

- リリース 1 ユーザーのスケジュール情報は、リリース 2.0 の管理者に移行されません。各ユーザーは、リリース 2.0 環境で、新しい電子メール・スケジュールを定義する必要があります。
- 電子メール構成情報は、リリース 2.0 に移行されません。各ユーザーは、リリース 2.0 環境で新しい電子メール構成情報を定義する必要があります。

リポジトリ移行の準備

移行を成功させるためには、次の手順を完了してください。

- [新規のリリース 2.0 管理者の作成](#)
- [リリース 1 コンソールの全サービスのリフレッシュ](#)

- リリース 1 コンソールとリリース 2 管理サーバーの停止
- 既存のリリース 1.x リポジトリのバックアップ
- リリース 1.x リポジトリに現在ある情報の確認

新規のリリース 2.0 管理者の作成

Migration Assistant を使用して、1 つのリリース 1 リポジトリを 1 つのリリース 2.0 リポジトリへ、または複数のリリース 1 リポジトリを 1 つのリリース 2.0 リポジトリへ移行できます。

いずれの場合も、まず、新規の管理者を作成し、リリース 1 のリポジトリ情報が各管理者のリリース 2.0 アカウントに移行されるようにします。

各 Enterprise Manager 管理者は、そのリポジトリ・データベース・アカウントでは、個別のユーザーです。

注意： 新規のリリース 2.0 管理者を作成しないと、移行オブジェクトはすべて SYSMAN アカウントに移行されます。SYSMAN アカウントは、Oracle Enterprise Manager リリース 2 のインストール時に提供される、デフォルトのスーパー管理者アカウントです。

新規管理者を作成するには、次の手順に従ってください。

1. 管理サーバーを起動します。

- Windows NT の場合

Oracle Management Server NT サービスから、「コントロール パネル」>「サービス」によって管理サーバーを起動します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインに次のように入力して、管理サーバーを起動します。

```
oemctrl start oms
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

管理サーバー起動の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。

2. SYSMAN アカウントを使用して、Enterprise Manager リリース 2.0 にログインします。Enterprise Manager コンソール起動の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。
3. コンソールの「システム」メニューから、「管理者の管理」を選択します。「管理者の管理」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. 「管理者の管理」ダイアログ・ボックスの「追加」ボタンをクリックします。「管理者アカウントの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. Enterprise Manager 管理者の一意のユーザー名とパスワードを入力し、その管理者に使用可能なアクセス権を確認します。

Enterprise Manager 管理者の管理の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第2章を参照してください。

リリース1 コンソールの全サービスのリフレッシュ

移行前に、移行の必要なサービスが、すべてリリース1 コンソールによってリフレッシュされていることを確認してください。

リフレッシュされなかったサービスは、移行できません。

リリース1 コンソールとリリース2 管理サーバーの停止

リリース1 コンソールと管理サーバーが実行されている場合は、停止してください。リモート・エージェントは実行されたまま、既存の待ち行列ファイルはそのまま残ります。

既存のリリース 1.x リポジトリのバックアップ

移行中に予期せぬエラーが発生した場合、Migration Assistant では自動リカバリはサポートされていません。予期せぬ失敗が発生した場合に、現行のリリース 1.x Oracle Enterprise Manager 環境とリリース 2.0 環境を確実に回復できるようにするには、リリース 1.x リポジトリとリリース 2.0 リポジトリの両方のバックアップを取っておいてください。

注意： SYS ユーザーで作成したリポジトリは、エクスポートできません。

リポジトリのバックアップには、Enterprise Manager のエクスポート・ウィザード、または Oracle データベース・サーバーに同梱されている基本ユーティリティ、EXPORT ユーティリティのどちらを使用してもかまいません。データ管理の各種ウィザード使用の詳細は、「Oracle Enterprise Manager オンライン・ヘルプ」を参照してください。

次の例は、Oracle 8.0 サーバーが1つ稼動している NT 環境のものです。

```
exp user/password@service owner=oemv1schema file=oemv1.dmp
```

ここで、USER は移行する Oracle Enterprise Manager リポジトリのユーザー名、PASSWORD はそのユーザーのパスワードです。

この例では、保存されたりポジトリは、oemv1.dmp に書き込まれます。

エクスポートの終了時には、エクスポートが無事完了したかどうかを知らせる次のメッセージが表示されます。

エクスポートは警告なしで終了しました。

エクスポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8 Server ユーティリティ』を参照してください。

リリース 1.x リポジトリに現在ある情報の確認

移行中に情報がなくなることのないようにするには、現在リリース 1.x リポジトリにある情報を確認します。この情報は、リリース 2.x への移行後に情報があるかどうかを確認するための指針として、後で使います。

リリース 1.x リポジトリでは、次の情報を確認してください。

1. 検出情報については、リリース 1.x 環境で検出されたホストとサービスの数を数えます。
2. 最低 1 つのノードの設定リスト情報を参照します。
3. ジョブ情報については、注意すべき関連情報として次のものがあります。
 - ジョブ数
 - ジョブのタイプ
 - ジョブの状態
 - ジョブの履歴情報
4. イベント情報については、次のような関連情報に注意してください。
 - イベント・グループ数
 - 各グループ内のイベント数
 - 各グループが登録されているノード
 - イベントの現在の状態

Migration Assistant を使用したリポジトリの移行

移行するリリース 1.x Oracle Enterprise Manager 環境内の各データベースの指示に従ってください。

Windows NT の「スタート」メニューから、Enterprise Manager Migration Assistant を起動します。

ステップ1「イントロダクション」

Migration Assistant を起動すると、「イントロダクション」ページが現れ、Migration Assistant の目的と、移行を成功させるために必要な前提条件についての重要情報が表示されます。



イントロダクションを読み、「次」を押して操作を続けます。

1 つ以上のシステム管理パックがインストールされている場合は、7-9 ページの「[ステップ 2「コンポーネントの選択」](#)」に進んでください。

システム管理パックがインストールされていない場合は、7-11 ページの「[ステップ 3「ソース・リポジトリ・ログイン」](#)」に進んでください。

ステップ2「コンポーネントの選択」

注意： 1 つ以上のシステム管理パックがインストールされている場合にのみ、「コンポーネントの選択」ページが現れます。

移行するリポジトリ・コンポーネントを選択します。

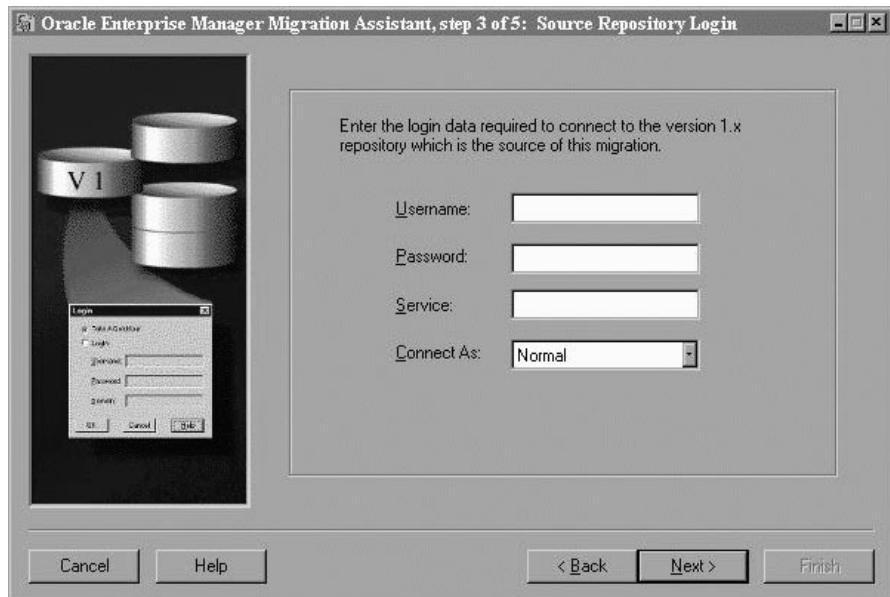
選択できるのはインストールされているコンポーネントのみです。コンポーネントに有効なターゲット・リポジトリがない場合は、1 つ作成されます。



選択が終了したら、「次」を押して操作を続けます。

ステップ3「ソース・リポジトリ・ログイン」

リリース 1.x リポジトリのあるデータベースへログインします。



ユーザー名とパスワード： リリース 1.x リポジトリがあるデータベースの有効なユーザー名を入力してください。

サービス： 標準の SQL*Net リリース 2 または Net8 の構文を使用します。サービス名は、tnsnames.ora ファイルで表示されたとおりのデータベースの名前です。

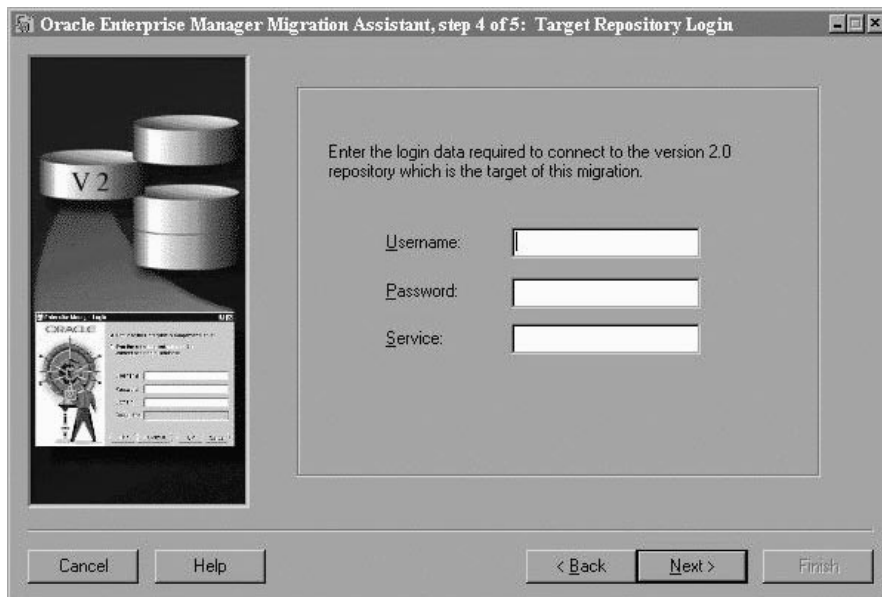
接続モード：「標準」として接続します。

「次」を押して、操作を続けます。

入力した情報が有効で、有効なリリース 1.x リポジトリが存在する場合は、7-12 ページの「[ステップ4「ターゲット・リポジトリ・ログイン」](#)」へ進んでください。

ステップ4「ターゲット・リポジトリ・ログイン」

既存のリリース 2.0 リポジトリのユーザー名、パスワードおよびサービス名を入力します。



ユーザー名とパスワード： Oracle Enterprise Manager のユーザー名は、リリース 2.0 リポジトリが作成されたものと同じユーザー名にしてください。Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 リポジトリは、Oracle データベース・スキーマです。ユーザー名とパスワードは、Oracle Enterprise Manager のユーザー・ログイン時のものではありません。

サービス： 標準の SQL*Net リリース 2 または Net8 の構文を使用します。サービス名は、tnsnames.ora ファイルで表示されるとおりのデータベースの名前です。

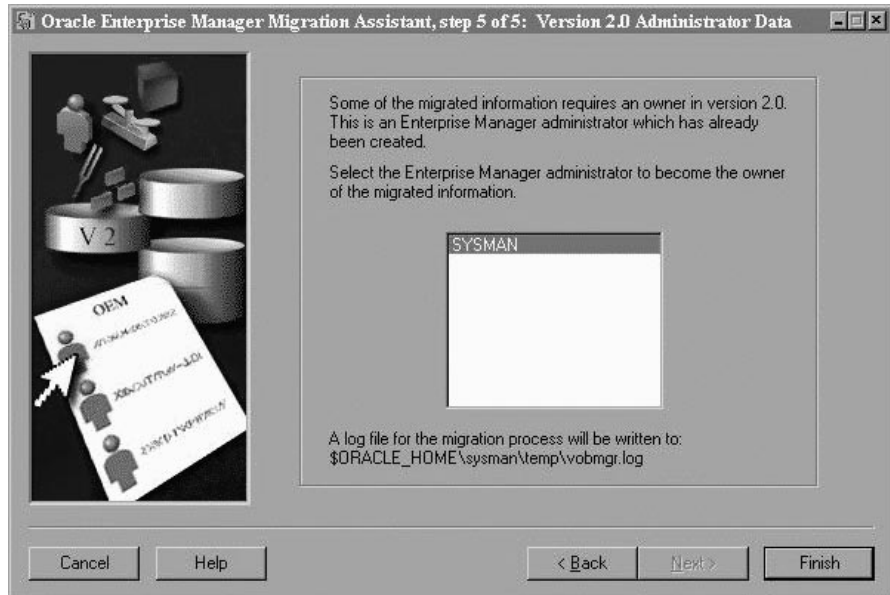
「次」を押して、操作を続けます。

有効なリリース 2.0 リポジトリに、有効なリポジトリ名、パスワードおよびサービスを入力した場合、7-12 ページの「[ステップ 5「管理者データ」](#)」へ進んでください。Oracle Enterprise Manager Migration Assistant では、移行する情報がリリース 2.0 リポジトリにすでにあるかどうか、情報の書式がリリース 1.x 情報の書式と異なるかどうか、この情報がどのように変換されているかも、ダイアログ・ボックスによって知らされます。

ステップ5「管理者データ」

情報の移行先のリリース 2.0 管理者を指定します。

注意： 追加のリリース 2.0 管理者アカウントを作成していない場合、移行するオブジェクトは、すべて SYSMAN 管理者アカウントに移行されます。



「終了」をクリックして移行プロセスを開始するか、「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

進行中の作業

「進行中の作業」ウィンドウが現れ、作業の進捗状況が知らされます。「進行中の作業」ウィンドウの情報は、%oracle_home%\sysman\temp ディレクトリにある vobmgr.log ファイルにすべて記録されます。

注意： Change Manager リポジトリを移行する場合、Change Manager を実行して Change Manager のリポジトリ・オブジェクトをまだ作成していないと、移行プロセスで作成されます。

リリース 1 コンソールからの全アクティブ・ジョブおよび イベントの削除と登録解除

リリース 1.x からリリース 2.0 環境へのリポジトリの移行には調整が必要です。移行プロセスには、リリース 1 のアクティブなジョブとイベントをすべて手動で削除および登録解除するプロセスが含まれます。

リリース 1.x リポジトリで定義したジョブおよびイベント情報は、リリース 2.0 のリポジトリにコピーされます。Oracle Enterprise Manager 環境では、同じエージェントに対して、リリース 1.x とリリース 2.0 の両方のコンソールを実行することはできません。リリース 1.x リポジトリからジョブおよびイベント情報を削除すると、ユーザーによってこの構成が不用意に作成されることを防止できます。

リポジトリの移行を実行したら、次の手順に従ってください。

1. リリース 1 コンソールを起動し、移行されたばかりのリリース 1 リポジトリに接続します。
2. 手動で、すべてのアクティブ・ジョブおよびイベントを、削除または登録解除します。アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除を行わないと、そのエージェントで実行されるジョブに重複が生じる可能性があります。イベントは「not unique」エラーのために、登録に失敗します。

注意： 管理サーバーを起動する前に、情報を移行し、リリース 1 コンソールを起動せずに、ジョブおよびイベントを削除すると、最初の起動時に、イベントの登録とジョブの発行が試行されます。ジョブは登録されますが、イベントは、リリース 1 コンソールからエージェントにすでに登録されているので、失敗する可能性があります（インテリジェント・エージェントのイベントの一意性に対する制限）。

コンソールでは失敗したことが表示されます。リリース 1 イベントの登録を解除し、リリース 2 コンソールで、失敗したイベント登録から「類似作成」により再登録を試みます。

3. リリース 1 コンソールを停止します。
4. 管理サーバーを起動します。

移行成功の確認

Migration Assistant でリリース 1.x リポジトリ情報を指定のリリース 2.0 ユーザーに移したら、そのユーザーでリリース 2.0 コンソールにログインし、移行を確認します。

検出、優先接続情報リスト、ジョブおよびイベント情報の移行成功をチェックして、リポジトリの移行後にすべての情報があることを確認してください。

1. 検出情報については、移行後にホストとサービスが表示されていることをチェックします。
2. 移行した設定リストを使ってデータベースにアクセスするため、最低 1 つのノードの設定リスト情報が、リリース 2.x コンソールのナビゲータで表示されるようにしてください。

注意： リリース 2 コンソールで、移行したサービス名と、リリース 1 コンソールで使用された設定リストの表に格納されているサービス名が一致しない場合、影響を受けるサービスに対して、移行後にリリース 2 コンソールを介して、優先接続情報リストを再入力してください。

3. ジョブ情報については、チェックすべき関連情報として、ジョブ数、ジョブのタイプ、ジョブの状態、および関連のジョブ履歴情報があります。リリース 1.x ジョブには、リリース 2.x には移行されないタスクを含むものがあります。これらも考慮に入れてください。
4. イベント情報については、注意すべき関連情報として、イベント数、各イベント内のテスト数、各グループが登録されているノード、およびイベントの現在の状態があります。
5. 移行に成功した Performance Manager の記録とユーザー定義のグラフの数は、移行ログ・ファイル、sysman¥temp¥vobmgr.log を調べます。
6. Oracle Expert 移行プロセスの情報は、sysman¥temp¥vobmgr.log ファイルと、さらに詳細な sysman¥temp¥xpomigr.log ファイルを調べます。
7. Change Management Pack については、リリース 1 の Plan Manager と DB Capture のベースラインと変更計画の数を数え、それをリリース 2 に移行された数と比較する必要があります。

移行の取消し

移行中に予期せぬ問題が発生した場合、Oracle Enterprise Manager 環境を前の状態に復元しななければならないことがあります。Oracle Enterprise Manager 環境を復元するには、次のようにします。

1. Security Manager を使って、古いリリース 1.x リポジトリ・ユーザーを削除します。Security Manager の詳細は、「Oracle Enterprise Manager オンライン・ヘルプ」を参照してください。

2. インポート・ウィザード、または Oracle データベース・サーバーに同梱されている基本ユーティリティ、IMPORT ユーティリティを使用して、保存されているリリース 1.x リポジトリ・ユーザーをインポートします。ユーザーは、インポート時に再作成されます。インポート・ウィザード使用の詳細は、「Oracle Enterprise Manager オンライン・ヘルプ」を参照してください。次の例では、IMPORT ユーティリティを使用します。

```
imp user/password@service file=oemv1.dmp
```

スキーマをインポートすると、リリース 1 リポジトリが移行前の状態で再作成されます。

インポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8 Server ユーティリティ』を参照してください。

リリース 1 オブジェクト参照

リリース 1 オブジェクトの総合的なリストと、それらのリリース 2 移行の可否は、この後の各項を参照してください。

リリース 2 に移行されるリリース 1 オブジェクト

次のリリース 1 オブジェクトは、リリース 2 に移行できます。

優先接続情報リスト

ユーザー名、パスワードおよびロールが移行されます。複数のリリース 1 リポジトリが、管理者 1 人の 1 つのリリース 2 リポジトリに移行されるとき、複数のリリース 1 リポジトリにあったサービスに対して移行される最初の優先接続情報リストは、移行される最初のリリース 1 リポジトリの優先接続情報リストです。

サービス

データベース、ノードおよびリスナーは、最後の検出およびリフレッシュの状態が成功であれば、移行されています。

グループ： リリース 1 では、ジョブとイベントは、1 つのオブジェクトとして複数のグループに登録されます。1 つのジョブまたはイベントがリリース 1 の 1 つのグループに登録されている場合、そのジョブまたはイベントは、それが登録されているサービスごとに個別のジョブまたはイベントを作成して、リリース 2 に移行されます。

グループは論理エンティティとして移行されないため、ジョブまたはイベントはグループには移行されません。リリース 2 の側にはグループはありません。リリース 1 のグループのメンバーは、すべて個別にリリース 2 に移行します。グループはリリース 2 で再作成し、移行メンバーを改めて追加する必要があります。

ジョブ

- DBA スクリプトの実行
- SQL*Plus の実行

- データベースの停止
- データベースの起動
- メッセージの配布
- OS コマンドの実行
- TCL の実行
- リスナーの停止
- リスナーの起動

修正ジョブ

- すべてのスケジュール情報
- 従属ジョブ
- 優先接続情報リストの上書き
- ジョブ・ライブラリ
- ジョブ履歴
- アクティブ・ジョブ

イベント

- 警告
- プローブ
- 動作・停止（データベース）
- バッファ・キャッシュ
- データ・ディクショナリ・キャッシュ
- ディスク I/O
- ライブラリ・キャッシュ
- ネット I/O
- SysStat 表
- SysStat 表デルタ
- データファイル制限
- ロック制限
- プロセス制限
- セッション制限
- ユーザー制限

- アーカイブ満杯
- 小容量
- ダンプ満杯
- 最大エクステント
- ユーザー・ブロック
- 連鎖行
- 動作・停止（リスナー /SQL*Net）
- 動作・停止（ノード）
- CPU ページング率
- CPU 使用率
- ディスク満杯
- スワップ満杯
- アーカイバの停止
- 中断したジョブ
- データ・ブロック破壊
- 遅延トランザクション
- エラー・トランザクション
- 失敗したジョブ
- セッション終了
- スケジュール解除されたジョブ
- 空きバッファ
- メモリー・ソート
- 索引再作成
- REDO ログ割当て
- ロールバック競合
- 警告ファイル過大
- セグメントの高速拡張
- 複数エクステント
- スナップショット・ログ満杯

- 表領域満杯
- ユーザー監査
- Data Gatherer 警告
- Data Gatherer 動作・停止

その他

- イベント・セット・ライブラリ
- 登録
- サードパーティ・イベント
- トリガー・イベントに関連付けられた修正ジョブ
- 頻度
- バック・リポジトリ

再作成が必要なリリース 1 オブジェクト

次のオブジェクトは、再作成する必要があります。

ジョブ

- Oracle Enterprise Manager ジョブからの表領域のバックアップ
- エクスポート
- インポート
- ロード

その他

- SNMP トラップ
- ポケットベル・サービス
- 電子メール・サービス
- 管理者リスト

なくなったリリース 1 オブジェクト

リリース 2 ではなくなったリリース 1 オブジェクトは、次のとおりです。

イベント

- Rdb データベース・イベント
- Rdb サービス・イベント
- イベント履歴

- 未処理のイベント

その他

- マップ

DBA Management Pack の設定

Oracle Enterprise Manager の主要管理コンポーネントは、Oracle Enterprise Manager にバンドルされているアプリケーションとウィザードのセットである DBA Management Pack に含まれています。DBA Management Pack は、大部分のデータベース管理作業を実行でき、Oracle データベースのすべてのバージョンをサポートしています。

DBA Management Pack アプリケーションの起動

DBA Management Pack のアプリケーションは、Oracle Enterprise Manager コンソールを介して起動することも、スタンドアロン・アプリケーションとして個別に起動することもできます。コンソールを介して起動すると、アプリケーションは Oracle Management Server に接続され、Oracle Enterprise Manager リポジトリで使用されます。

アプリケーションを個別に起動する場合、ユーザーは接続先として、特定のデータベースまたは管理サーバーのいずれかを選択します。

Oracle Management Server に接続すると、DBA Management Pack アプリケーションでは、その Oracle Enterprise Manager リポジトリ内のすべてのデータベースにアクセスできます。

アプリケーションを個別に起動

Windows プラットフォームでは、データベース・アプリケーションは、すべて Windows の「スタート」メニューから起動できます。

UNIX では、オペレーティング・システムのコマンド・ライン・プロンプトで、次の構文を使用できます。

```
oemapp <application_name>
```

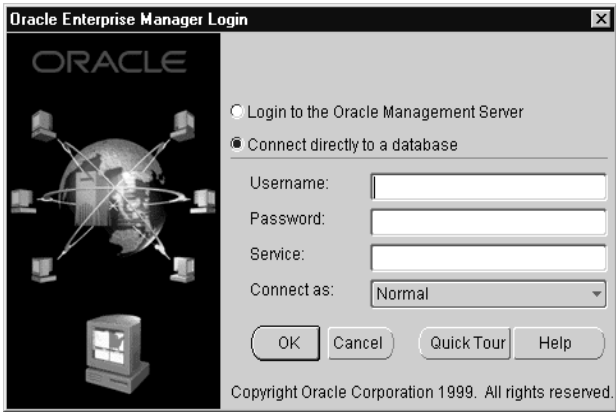
コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

application_name の値は、次のとおりです。

使用アプリケーション	入力する application_name
Instance Manager	instance
Security Manager	security
Storage Manager	storage
Schema Manager	schema
SQL*Plus Worksheet	worksheet

The DBA Management Pack アプリケーションは、Oracle Enterprise Manager とともにインストールされる Oracle Launch Pad からでも起動できます。Oracle Launch Pad は、Windows の「スタート」メニューから、またはオペレーティング・システムのコマンド・ライン・プロンプトで olp を入力して起動します。

オペレーティング・システムまたは Oracle Launch Pad から DBA アプリケーションを起動すると、「Oracle Enterprise Manager ログイン」ダイアログ・ボックスが現れ、Oracle Management Server に接続するか、1 つのデータベースに直接接続するかを選択します。



管理サーバーへ接続

Oracle Management Server に接続すると、DBA アプリケーションでは、そのリポジトリの検出ノードにあるすべてのデータベースにアクセスでき、これらのデータベースは、クライアント側の管理対象オブジェクトのツリー・リストに表示されます。DBA アプリケーションを Oracle Management Server に接続するには、そのサーバーが稼動している必要があります。『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 1 章の「管理サーバーへの接続」を参照してください。

単一データベースへ接続

単一のデータベースに接続する場合、Oracle Management Server が稼動している必要はなく、そのデータベースだけがクライアント側のツリー・リストに表示されます。**注意：** ご使用の tnsnames.ora ファイルには、そのデータベースのエントリが必要です。サービスのホスト : ポート : sid 接続文字列を入力することもできます。Oracle データベースへの接続の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 1 章の「データベース・インスタンスへの接続」を参照してください。

コンソールからのアプリケーションの起動

DBA Management Pack アプリケーションは、Oracle Enterprise Manager コンソールから、次の 3 通りの方法で起動できます。

- 「ツール」メニューから
- データベース・アプリケーション・ランチ・パレットから
- コンソールのナビゲータでデータベースを右クリックし、「関連ツール」オプションからアプリケーションを選択

コンソールからデータベースを起動すると、アプリケーションではコンソールの Oracle Management Server への接続が使われ、ナビゲータには検出されたデータベースが表示されます。接続情報は、DBA アプリケーションのウィンドウのタイトルバーに表示されます。データベース・アプリケーションの起動前に、コンソールのナビゲータ・ツリーでデータベースを選択すると、優先接続情報リストを使用して、デフォルトでそのデータベースに接続され、ツリー内のデータベース名の横には接続ユーザーが示されます。また、データベース・アイコンの横には、接続していることを示す接続アイコンが表示されます。

別のデータベースに接続するには、ツリー内の別のデータベース・アイコンをオープンまたは選択します。選択したデータベースに優先接続情報リストが定義されている場合、そのリストが接続に使用されます。

優先接続情報リストがないためにデータベースに接続できない場合、「ログイン情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。そこに接続情報を入力してください。Oracle データベースへの接続の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 1 章の「データベース・インスタンスへの接続」を参照してください。優先接続情報リストの設定の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第 2 章の「管理者優先接続情報リスト」を参照してください。

異なるユーザーとしてデータベースに接続するには、データベース上でマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから「接続」機能にアクセスします。「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが現れます。

注意： コンソールからデータベース・アプリケーションを起動すると、Enterprise Manager では、現在データベースに接続されているセッションの設定リストではなく、優先接続情報リストが使用されます。なんらかの理由でデータベースへの接続に失敗すると、「データベース接続」ダイアログ・ボックスが表示されます。

バックアップ管理およびデータ管理ウィザードへのアクセス

バックアップ管理ウィザードを使用すると、自分のデータベースのバックアップおよびリカバリ環境を管理できます。

データ管理ウィザードは、データのインポート、エクスポート、ロードなどの作業に役立ちます。

ウィザードを使用する前に、Oracle Enterprise Manager コンソールが稼動中で、ジョブ制御およびイベント管理システムが完全に機能していることを確認してください。

ウィザードは、管理サーバーに接続しているときしか使用できません。

バックアップ管理ウィザードには、次のいずれかの方法でアクセスできます。

- コンソールまたは Storage Manager から、ナビゲータ・ツリーで管理するデータベース、表領域またはデータファイルを選択し、ポップアップ・メニューの「バックアップ管理」メニューからアプリケーションを選択する。
- Storage Manager > 「ツール」メニュー > 「バックアップ管理」。

バックアップ管理ウィザードを使用するには、ターゲット・データベースの tnsnames.ora ファイルに、そのターゲット・データベースのエントリがあることを確認してください。

リカバリ・カタログを使用中の場合は、ターゲット・データベースの tnsnames.ora ファイルに、リカバリ・カタログ・データベースのエントリがあることを確認してください。

データ管理ウィザードには、次のいずれかの方法でアクセスできます。

- コンソールまたは Schema Manager から、ナビゲータ・ツリーで管理するデータベース、表領域またはデータファイルを選択し、ポップアップ・メニューの「データ管理」メニューからアプリケーションを選択する。
- Storage Manager または Schema Manager > 「ツール」メニュー > 「データ管理」。
- ポップアップ・メニューの「データ管理」は、Storage Manager で選択したデータベースでも使用可能。

データ管理ウィザードを使用するには、ターゲット・データベースの tnsnames.ora ファイルに、そのターゲット・データベースのエントリがあることを確認してください。

アプリケーションの設定

DBA Management Pack のアプリケーションには、構成が必要なものがあります。この章では、次の 2 つについて説明します。

- [リカバリ・カタログの設定と Oracle8 への登録](#)
- [SQL*Plus Worksheet の設定](#)

リカバリ・カタログの設定と Oracle8 への登録

リカバリ・カタログは、Recovery Manager によって使用され、メンテナンスされる情報のリポジトリです。Recovery Manager では、リカバリ・カタログの情報を使って、要求されたバックアップおよびリストア・アクションの実行方法が判断されます。

リカバリ・カタログで Oracle8 Recovery Manager を使用するには、最初にリカバリ・カタログをインストールし、次にデータベースを登録します。制御ファイルを使用している場合には、設定の必要はありません。リカバリ・カタログを作成するかわりに、制御ファイルを使用することもできます。リカバリ・カタログは、ターゲット・データベースとは異なる位置にインストールすることをお勧めします。

リカバリ・カタログのメンテナンス、Recovery Manager、バックアップおよびリカバリ計画の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

重要： リカバリ・カタログをインストールする前には、Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムが正しく機能している必要があります。ターゲット・データベースをリカバリ・カタログに登録するには、ジョブ制御システムが必要です。

リカバリ・カタログを設定するには、次の手順を完了してください。

- 表領域の作成
- ユーザーの作成
- catrman スクリプトの実行

表領域の作成

1. Storage Manager を起動します。
2. DBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
3. 「表領域」メニューから「作成」を選択します。「表領域作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「名前」フィールドに、新規の表領域名を入力します。たとえば、rcvcat と入力します。
5. 「データファイル」セクションの「追加」ボタンをクリックします。「データファイル作成」プロパティ・シートが表示され、新規の表領域に属する新規のデータファイルを指定できます。

6. 「名前」フィールドに、データファイルの完全なパスと名前を入力します。たとえば、次のようになります。c:\orant\oradata\rcvcat01.dbf
7. 「サイズ」セクションに、新規データファイルのサイズを入力します。たとえば、10M と入力します。
8. 「データファイル作成」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
9. 「表領域作成」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

ユーザーの作成

1. Security Manager を起動します。
2. DBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
3. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「一般」ページで、次の情報を入力します。

「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。たとえば、rman と入力します。

「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。たとえば、rman と入力します。

デフォルト表領域を選択します。たとえば、RCVCAT を選択します。

一時表領域を選択します。たとえば、TEMPORARY_DATA または TEMP を選択します。
5. 「ロール」ページで、ユーザーに RECOVERY_CATALOG_OWNER ロールを付与します。
6. 「割当て制限」ページで、デフォルト表領域に割当て制限なしを指定します。この例では、デフォルト表領域は RCVCAT です。
7. 必要なパラメータを指定した後、「作成」ボタンをクリックします。

catrman スクリプトの実行

1. データベースが常駐するマシンで、SQL*Plus を起動します。
2. 作成したリカバリ・カタログ・ユーザーとしてログインします。たとえば、ユーザーは rman、パスワードは rman とします。
3. create_rman.log のスプールを実行すると、エラーがログ・ファイルに書き込まれます。
4. Oracle_Home/rdbms/admin または Oracle_Home\rdbms\admin ディレクトリにある catrman スクリプトを実行します。

SQL*Plus Worksheet を使用中ならば、SQL*Plus Worksheet の入力パネルに @<フル・パス名とスクリプト名> を入力し、「実行」ボタンを押します。たとえば、@<Oracle_Home>/rdbms/admin/catrman と入力し、「実行」ボタンを押します。

リカバリ・カタログの登録

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. ナビゲータ・ツリー内のデータベース上で、マウスの右ボタンをクリックします。ポップアップの「バックアップ管理」メニューが表示されます。
3. すでに使用中のバックアップ構成を変更するか、または「バックアップ管理」メニューから「バックアップ構成を作成」を選択して、リカバリ・カタログを使用するバックアップ構成を作成します。「バックアップ構成を作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「一般」および「チャネル」プロパティ・ページに必要事項を入力します。
5. 「リカバリ・カタログ」ページで、次の情報を入力します。

バックアップ情報の格納場所として、「リカバリ・カタログ内」を選択します。

「ユーザー名」フィールドに、ユーザー名を入力します。たとえば、rman と入力します。

「パスワード」フィールドに、パスワードを入力します。たとえば、rman と入力します。

「サービス」フィールドに、リカバリ・カタログが常駐するデータベースを入力します。
6. 「優先接続情報リスト」ページに必要事項を入力します。
7. 「作成」ボタンを押します。
8. ナビゲータ・ツリー内のデータベース上で、マウスの右ボタンをクリックします。ポップアップの「バックアップ管理」メニューが表示されます。
9. 「バックアップ管理」メニューから「カタログ・メンテナンス」を選択し、リカバリ・カタログにターゲット・データベースを登録します。「カタログ・メンテナンス」が表示されます。
10. 「操作選択」ページで、「データベースを登録」を選択します。
11. 「構成」ページで、作成または変更したバックアップ構成を使用していることを確認します。
12. 「複数の宛先」ページで、ジョブを発行する宛先データベースを選択します。
13. 「終了」ボタンをクリックします。この時点で、データベース登録がジョブとして、Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムに送られます。
14. コンソールの「アクティブ・ジョブ」リストで登録ジョブをクリックし、ジョブの現在の状態を参照します。

15. ジョブが完了したら、「ジョブ」プロパティ・シートでジョブの履歴をチェックして、ジョブが正常に完了したことを確認します。

ジョブが正常に完了すると、バックアップおよびリカバリ環境が構成されます。リカバリ・カタログ・メンテナンス、Recovery Manager、バックアップおよびリカバリ計画の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

SQL*Plus Worksheet の設定

SQL*Plus Worksheet では、SQL*Plus 実行ファイルとのユーザー・インタフェースを提供します。SQL*Plus Worksheet を機能させるには、SQL*Plus 実行ファイルをインストールしてください。

実行できるコマンドの詳細は、『SQL*Plus ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

SQL*Plus 実行ファイル

8.0.4 SQL*Plus 実行ファイルは、Oracle Enterprise Manager リリース 2 のインストール時にインストールされます。

Oracle Enterprise Manager のインストール前に Oracle8i がマシンにインストールされている場合、SQL*Plus Worksheet では、8.0.4 SQL*Plus 実行ファイルのかわりに、8i に同梱されている SQL*Plus 実行ファイルが使用されます。

Oracle Enterprise Manager のインストール後に Oracle8i をインストールする場合、SQL*Plus Worksheet では 8.0.4 SQL*Plus 実行ファイルが使用されます。

8.0.4 SQL*Plus 実行ファイルを使用する SQL*Plus Worksheet には、次の制限があります。

- DBA (SVRMGRL) コマンドは使用不可。
- コマンドは必ずセミコロンで終わる。
- SQL*Plus は「標準」でしかデータベースに接続できない。

SQL*Plus Worksheet の制限の解除

これらの制限を解除するには、次のオプションがあります。

- 8i 同梱の SQL*Plus 実行ファイルをインストールし、dbapps.cfg ファイルを編集する。

注意： Oracle Enterprise Manager のインストール前に Oracle8i がマシンにインストールされている場合、dbapps.cfg ファイルの編集は不要です。

- SQL*Plus Worksheet を削除し、再インストールする。

dbapps.cfg ファイルの編集

SQL*Plus Worksheet を管理サーバーに接続する場合、管理サーバー・マシンに SQL*Plus 実行ファイルをインストールし、管理サーバー・マシン上の dbapps.cfg ファイルが正しく更新されていることを確認してください。

SQL*Plus Worksheet をデータベースに直接接続する場合、クライアント・マシンに SQL*Plus 実行ファイルをインストールし、クライアント・マシン上の dbapps.cfg ファイルが正しく更新されていることを確認してください。

Windows NT では、SQL*Plus を設定するには、ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリにある dbapps.cfg ファイルを編集します。

1. SQLPLUS_EXE_DIR パスを、SQL*Plus 実行ファイルがあるディレクトリを指すように設定します。たとえば、次のようになります。
SQLPLUS_EXE_DIR=c:¥¥oracle¥¥Ora81¥¥bin
2. 8.1 データベースを使用している場合、SQLPLUS_EXE_FILENAME を sqlplus に設定します。8.0.x データベースを使用している場合、SQLPLUS_EXE_FILENAME を plus80 に設定します。たとえば、次のようにします。SQLPLUS_EXE_FILENAME=sqlplus

UNIX の場合は、SQL*Plus Worksheet が機能するように、SQLPLUS_ORACLE_HOME と SQLPLUS_LD_LIBRARY_PATH 構成パラメータを、次のように設定してください。

- SQLPLUS_ORACLE_HOME=/oracle

SQLPLUS_ORACLE_HOME は、SQL*Plus 実行ファイルのある Oracle ホームです。SQL*Plus 実行ファイルは、Oracle Enterprise Manager 以外の Oracle ホームにインストールされている場合があります。SQL*Plus 実行ファイルを機能させるには、SQLPLUS_ORACLE_HOME を正しく設定する必要があります。UNIX では、シングル・フォワード・スラッシュを記述します。

- SQLPLUS_LD_LIBRARY_PATH=/oracle/lib

環境変数 LD_LIBRARY_PATH は、実際のオペレーティング・システム環境に基づいて設定しなければならない場合があります。SQLPLUS_LD_LIBRARY_PATH は、通常 SQLPLUS_ORACLE_HOME/lib です。

注意： NT では SQLPLUS_ORACLE_HOME と SQLPLUS_LD_LIBRARY_PATH パラメータを指定しないでください。

Diagnostics Pack の構成

Oracle Diagnostics Pack は、システムの状態の監視、問題の診断、問題の自動検出、および将来の計画のための使いやすいツールです。

Oracle Diagnostics Pack のアプリケーションには、構成が必要なものがあります。

アプリケーション	構成の必要の有無
Advanced Events	「Advanced Events の設定」 の項を参照
Capacity Planner	「Capacity Planner の設定」 の項を参照
Lock Manager	構成不要
Performance Manager	「Performance Manager の設定」 の項を参照
TopSessions	「TopSessions の設定」 の項を参照
Trace Manager	「Trace の設定」 の項を参照
Trace Data Viewer	構成不要

これらアプリケーションは、Oracle Diagnostics Pack のインストール後に設定します。

注意： Oracle Diagnostics Pack は、ライセンスが別の別売製品です。

Advanced Events の設定

Oracle Advanced Events を使用する前に、追加の表、ビューおよびパブリック・シノニムを作成してください。実行するスクリプトの詳細は、9-5 ページの「[TopSessions の設定](#)」を参照してください。

Capacity Planner の設定

この項の項目は、次のとおりです。

- [データを収集する Data Gatherer の構成](#)
- [Windows NT での Capacity Planner 用ディスク統計収集の使用可能化](#)

データを収集する Data Gatherer の構成

Capacity Planner を使用するには、Data Gatherer をインストール、構成し、データを収集する管理対象サービスまたはホストに対して起動する必要があります。Data Gatherer サービスの構成および起動方法の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Windows NT での Capacity Planner 用ディスク統計収集の使用可能化

Windows NT でのディスク統計収集： Windows NT でディスク統計を収集するには、次のように入力してディスク統計を使用可能にする必要があります。

```
diskperf -Y
```

ディスク統計は、次回そのシステムを再起動すると、使用可能になります。

DISKPERF ツールとその使用の詳細は、Microsoft Windows NT のドキュメントを参照してください。

Performance Manager の設定

Performance Manager リリース 2.0 では、それより前のリリースのユーザー定義グラフを変換して使用できます。リリース 1.6.0 ユーザー定義グラフは、自動的にリリース 2.0 に変換されます。

リリース 1.5.0 以前の Performance Manager を実行していて、自分のユーザー定義グラフを変換する場合、まずグラフをリリース 1.6.0 に変換してください。すると、自動的にリリース 2.0 に変換されます。

Performance Manager のリリース 1.5.5 には、ユーザー定義のグラフの機能はありませんでした。

この項の項目は、次のとおりです。

- [データを収集する Data Gatherer の構成](#)
- [リリース 1.5.0 以前の Performance Manager ユーザー定義グラフの変換](#)
- [パラレル・サーバー環境での Performance Manager の使用](#)

データを収集する Data Gatherer の構成

Performance Manager を使用するには、Data Gatherer をインストール、構成し、データを収集する管理対象サービスまたはホストに対して起動する必要があります。Data Gatherer サービスの構成および起動方法の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

リリース 1.5.0 以前の Performance Manager ユーザー定義グラフの変換

Performance Manager 1.5.0 以前（Performance Manager の Windows バージョン）を使用して、ユーザー定義グラフを作成し、それらを Performance Manager 2.0 で使用するように変換する場合、まず 1.6.0 に変換する必要があります。すると、自動的に 2.0 に変換されます。ユーザー定義のグラフの変換は、次のようにします。

1. vmmmig.exe を実行し、\$ORACLE_HOME\SYSTEM\ADMIN に vtmsr.txt という名前のテキスト・ファイルを作成します。このテキスト・ファイルには、1.5.0 以前の Performance Manager を使用して作成したユーザー定義のグラフに関するデータが含まれています。vmmmig.exe の実行時に、変換するユーザー定義のグラフが含まれている Enterprise Manager リポジトリに対するユーザー名、パスワードおよびサービスを指定します。たとえば、次のように指定します。

```
vmmmig joseph/password@my_rep
```

上のコマンド・ラインの my_rep は、Enterprise Manager リポジトリのサービス名です。

2. vmm2vtm.exe を実行し、vtmsr.txt のデータを使用して、Performance Manager 1.6.0 で使えるユーザー定義グラフをリポジトリに作成します。vmm2vtm.exe を実行し、Enterprise Manager リリース 2.x リポジトリのユーザー名、パスワードおよびサービスと、ユーザー定義のグラフを Performance Manager 1.6.0 用に格納するサービス名を指定します。たとえば、次のように指定します。

```
vmm2vtm.exe joseph/password@my_rep my_db
```

上のコマンド・ラインで、my_rep は Enterprise Manager リリース 2.x リポジトリのサービス名、my_db は、ユーザー定義グラフを格納するターゲット・サービス名です。つまり、上のコマンドを実行すると、ユーザー定義グラフはすべて変換され、Performance Manager 1.6.0 ツリー・ビューの my_db サービスの下に格納されます。

vmm2vtm.exe の実行時にエラー・メッセージが表示された場合、そのメッセージに基づいて vtmsr.txt を編集します。たとえば、グラフに問題がある、またはグラフが存在しない、というエラー・メッセージが出るとします。vtmsr.txt にはグラフのリストが含まれているので、このファイルを編集して、問題のグラフを削除します。

再度、vmm2vtm.exe を実行します。

パラレル・サーバー環境での Performance Manager の使用

パラレル・サーバー環境で Performance Manager を使用するには、2 つのデータベース・インスタンスを起動してください。起動しないと、Performance Manager では、そのサーバーはパラレル・サーバーとして扱われません。

Oracle Parallel Server 環境で Performance Manager を使うには 2 つの方法があり、それぞれの構成手順が異なります。

2 つの方法とそれぞれの構成手順は、次のとおりです。

1. Oracle7 Parallel Server 環境を監視するために Performance Manager 2.0 を使用している場合、次の指示に従ってください。
 - a. すべてのインスタンスが実行中であることを確認します。
 - b. ops_gdl.sql を実行し、実際の ops_dbl.sql を作成します。同梱されているものは例にすぎません。ops_dbl.sql の実際の内容は、データベース名、インスタンス名、存在するインスタンスの数によって異なります。
 - c. ops_mon.sql を実行し、それによって ops_ctab.sql、ops_dbl.sql、ops_pack.sql を実行して、PM の表とビューを作成し、Oracle7 Parallel Server データをフェッチしてグラフに表示します。

Oracle7 にはグローバル VS (GV\$) 表がありません。これらのファイルにより、一連の PL/SQL プロシージャ、データベース・リンク、および GV\$ 表がない場合に Performance Manager で使われる OS 表がインストールされます。
2. Oracle8 Parallel Server 環境の監視に Performance Manager 2.0 を使用している場合は、パラレル・サーバー・スクリプトを実行する必要はありません。たとえば、GV\$ 表を持つリリースの Oracle (Oracle 8.0 以降) を使用していれば、これらのスクリプトを実行する必要はありません。

パラレル・サーバー・スクリプトの詳細は、パラレル・サーバーのドキュメント・セットの『Oracle Parallel Server Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Windows NT で Performance Manager 用ディスク統計収集を使用可能化

Windows NT でのディスク統計収集： Windows NT でディスク統計を収集するには、次のように入力してディスク統計を使用可能にする必要があります。

```
diskperf -Y
```

ディスク統計は、次回そのシステムを再起動すると、使用可能になります。

DISKPERF ツールとその使用の詳細は、Microsoft Windows NT のドキュメントを参照してください。

TopSessions の設定

TopSessions の機能をインストールするには、次の条件が必要です。

- TopSessions から接続する各データベースに、表およびビューを追加作成する。
- 特定の SELECT 権限を付与されている。

smptsixx.sql スクリプトは、このプロセスを自動化するためのものです。

ファイル名の中の xx は、スクリプトを実行する必要があるデータベースのリリースを示します。データベースのリリースごとのスクリプトは、\$ORACLE_HOME¥SYSMAN¥ADMIN ディレクトリにあります。

データベースのリリース	実行するスクリプト
Oracle 7.3.4	smptsi73.sql スクリプト
Oracle 8.0	smptsi80.sql スクリプト
Oracle 8.1	smptsi81.sql スクリプト

smptsixx.sql を実行すると、次の 2 つのスクリプトも自動的に実行されます。

- catbloxx.sql
- utlxlplx.sql

これらの 2 つのスクリプトによって、Oracle Advabced Events で必要ないくつかの追加の表、ビュー、およびパブリック・シノニムが、管理対象のデータベースに作成されます。

データベースに TopSessions を設定するには、次のようにします。

1. 「DBA Management Pack」プログラム・グループから、「SQLPLUS Worksheet」アイコンをダブルクリックし、ツールを起動します。
2. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスを使用して、管理対象のデータベースに SYS として接続します。

オンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

3. 各管理者アカウントに、SELECT ANY TABLE 権限を付与します。SYSTEM と同等の権限がすでにアカウントに付与されている場合は、このステップは省略してもかまいません。

管理対象データベースで smptsixx.sql スクリプトを実行するには、前述のように、各データベースに SYS としてログインする必要があります。

Security Manager を使用して、アカウントに権限を付与します。Security Manager の使用方法の詳細は、「Oracle Enterprise Manager オンライン・ヘルプ」を参照してください。

4. 管理対象データベースに対して、smptsixx.sql スクリプトを実行します。

管理対象データベースに対して smptsixx.sql スクリプトを実行しない場合、TopSessions を使おうとすると、「表またはビューが存在しません。」というメッセージが表示されます。

5. 管理対象データベースに ALL_CATALOG ビューがない場合、SYS アカウントからデータベース上で catalog.sql を実行します。catalog.sql スクリプトは、`$ORACLE_HOME\RDBMSxx\ADMIN` ディレクトリにあります。
6. 管理対象データベースに AUDIT_ACTIONS ビューがない場合、SYS アカウントからデータベース上で cataudit.sql を実行します。cataudit.sql スクリプトは、`$ORACLE_HOME\RDBMSxx\ADMIN` ディレクトリにあります。
7. SQL*Plus Worksheet を終了します。

Trace の設定

Trace では、次の条件が必要です。

- Oracle 7.3.4 以降の Oracle Intelligent Agent が、Trace 収集のターゲットとなるノードにインストールされ、実行されている。
- Enterprise Manager コンソールが実行されており、Trace を使用するノードが、コンソールのナビゲータにリスト表示されている。Trace では、Enterprise Manager のジョブ・サブシステムを使用してタスクを実行します。

この項の項目は、次のとおりです。

- [Oracle 8 サーバー収集での Trace の使用](#)
- [Oracle 7.3.4 サーバー収集での Trace の使用](#)
- [Trace リポジトリ表の作成](#)
- [Trace フォーマット表の作成](#)
- [その他の構成情報](#)

Oracle 8 サーバー収集での Trace の使用

Oracle 8 サーバー収集で Trace を使用する場合、INITsid.ORA ファイルの ORACLE_TRACE_ENABLE パラメータの値を TRUE に設定してください。

Oracle 7.3.4 サーバー収集での Trace の使用

Oracle 7.3.4 サーバー収集からのデータの収集に Trace を使用している場合、Trace ユーザー・アカウント、TRACESVR、および Trace ストアド・プロシージャ・パッケージ、DBMS_ORACLE_TRACE_AGENT および DBMS_ORACLE_TRACE_USER があることを確

認します。ない場合は、SYS として otrcsvr.sql スクリプトを実行して、作成してください。otrcsvr.sql スクリプトは UNIX システムでは \$ORACLE_HOME/otrace/admin に、Windows NT システムでは \$ORACLE_HOME\otrace\admin にあります。

otrcsvr.sql スクリプトは、大部分のプラットフォームで、データベースのインストール時に自動的に実行されます。ただし、サーバーのプラットフォームが Windows NT の場合は、このスクリプトを手動で実行してください。

Trace リポジトリ表の作成

Trace に必要な表は、Oracle Diagnostics Pack 製品のどれかを初めて起動したときに、すべて自動的に作成またはアップグレードされます。

Trace フォーマット表の作成

Trace Collection Services リリース 8.0.4 以降を使用している場合、専用のフォーマット表が作成されます。

Trace フォーマット表は、管理対象データベースで Trace を使用するのに必要な表です。Trace では、Trace バイナリ・ファイル (*collection_name.dat*) を変換し、Oracle 表にロードしてアクセスします。

Oracle 7.3.4 以降のデータベースから収集された Trace データは、最新の Trace フォーマット表が使用されているデータベースにのみ格納できます。vobsh コマンド (Windows プラットフォーム上でのみ使用可能) を使用して、データベースに新規のフォーマット表を作成、既存のフォーマット表を削除、または古いバージョンのフォーマット表を最新のバージョンにアップグレードします。

これらの操作を実行するフォーマット表の操作と vobsh コマンドについては、この後の項で説明します。

指定ユーザーに指定サービスのアカウントがない場合、これらの vobsh コマンドは失敗します。この場合、指定サービスでユーザーのアカウントを作成してから、vobsh コマンドを再度入力します。

新規フォーマット表の作成

現在フォーマット表のないデータベースに新規のフォーマット表を作成するには、次の vobsh コマンドを使用します。

```
vobsh -c "user/password@service" -o CREATE -p "EPCFMT"
```

フォーマット表に格納されるフォーマット済みデータは、規模が非常に大きくなる可能性があります。フォーマット表が作成されるデータベースには、大量のデータを格納できる十分な領域が必要なので注意してください。

既存のフォーマット表の削除

表から既存のフォーマット表を削除するには、次の vobsh コマンドを使用します。

```
vobsh -c "user/password@service" -o DROP -p "EPCFMT"
```

このコマンドにより、指定のデータベースからすべてのバージョンのフォーマット表が削除されます。vobsh では、既存のフォーマット表が削除されるだけでなく、表に格納されているフォーマット済みデータも削除されるので注意してください。

フォーマット表のアップグレード

フォーマット表の古いバージョンの有効性検査（アップグレード）を行う（必要に応じて、フォーマット表の作成、削除またはアップグレードを行う）には、次の vobsh コマンドを使用します。

```
vobsh -c "user/password@service" -o VALIDATE -p "EPCFMT"
```

このコマンドにより、データベースのフォーマット表のバージョンが判断され、必要に応じて、それらを新バージョンにアップグレードできます。

その他の構成情報

この章の指示に従って構成したにもかかわらず、Trace の実行に問題が生じた場合は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace ユーザーズ・ガイド』の付録「Oracle Trace のトラブルシューティング」を参照してください。

Tuning Pack の構成

Oracle Tuning Pack では、特定のチューニングの必要性や動作に対応して、データベースとアプリケーションが最も効率よく稼動することを保証します。

Oracle Tuning Pack のアプリケーションには、構成の必要なものがあります。

アプリケーション	構成の必要の有無
Expert	構成不要
Index Tuning Wizard	構成不要
SQL Analyze	「SQL Analyze の設定」の項を参照
Tablespace Manager	「Tablespace Manager の設定」の項を参照

これらのアプリケーションは、Oracle Tuning Pack のインストール後に設定します。

注意： Oracle Tuning Pack は、ライセンスが別の別売製品です。

SQL Analyze の設定

SQL Analyze を実行するには、DBA ロールを付与されたユーザーに使用可能な特定のオブジェクト権限が必要です。必要最低限の権限を割り当てる場合は、オプションの SQLADMIN ロールを使用すると、ユーザーに必要なオブジェクト権限の基本セットを割り当てることができます。

SQLADMIN ロール作成のプロセスを自動化できるよう、VMQROLE.SQL スクリプトが提供されています。これは、`$ORACLE_HOME\SYSMAN\ADMIN` ディレクトリにあります。

1. 「Oracle Enterprise Manager」>「DBA Management Pack」プログラム・グループから、「SQLPLUS Worksheet」アイコンをダブルクリックして、アプリケーションを起動します。

2. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスを使用して、SQL Analyze を SYS として実行するデータベースに接続します。
3. 「ワークシート」メニューから、VMQROLE.SQL スクリプトを実行して、管理対象データベースに SQLADMIN ロールを作成します。
4. SQL*Plus Worksheet では、次のように入力して、ユーザーに SQLADMIN ロールを割り当てます。

```
Grant SQLADMIN to <user>;
```

5. SQL*Plus Worksheet を終了します。

Tablespace Manager の設定

データベースに対して Tablespace Manager Analyze Wizard を使用するには、そのデータベースに CHAINED_ROWS 表を作成する必要があります。CHAINED_ROWS 表を作成するには、次のようにします。

1. データベースに SYS としてログインします。
 2. \$ORACLE_HOME/RDBMS/ADMIN ディレクトリにある utlchain.sql を実行します。
- CHAINED_ROWS 表は、Oracle Advanced Events の連鎖行イベントでも使用されます。

Oracle Standard Management Pack の構成

Oracle 8i 用の Oracle Standard Management Pack は、オプションのアプリケーション・セットで、Oracle 8i 環境での問題の監視と診断、影響の大きな索引のチューニング、変更の追跡と比較を可能にする拡張ツールを提供します。

Oracle Standard Management Pack のアプリケーションには、構成の必要なものがあります。

アプリケーション	構成の必要の有無
DB Capture	構成不要
DB Diff	構成不要
Index Tuning Wizard	構成不要
Performance Manager	「Performance Manager の設定」 の項を参照
TopSessions	「TopSessions の設定」 の項を参照

これらのアプリケーションは、Oracle Standard Management Pack のインストール後に設定します。

注意： Oracle Standard Management Pack は、ライセンスが別の別売製品です。

Performance Manager の設定

Performance Manager リリース 2.0 では、それより前のリリースのユーザー定義グラフを変換して使用できます。リリース 1.6.0 ユーザー定義グラフは、自動的にリリース 2.0 に変換されます。

リリース 1.5.0 以前の Performance Manager を実行していて、自分のユーザー定義グラフを変換する場合、まずグラフをリリース 1.6.0 に変換してください。すると、自動的にリリース 2.0 に変換されます。

Performance Manager のリリース 1.5.5 には、ユーザー定義のグラフの機能はありませんでした。

この項の項目は、次のとおりです。

- [データを収集する Data Gatherer の構成](#)
- [リリース 1.5.0 以前の Performance Manager ユーザー定義グラフの変換](#)
- [パラレル・サーバー環境での Performance Manager の使用](#)

データを収集する Data Gatherer の構成

Performance Manager を使用するには、Data Gatherer をインストール、構成し、データを収集する管理対象サービスまたはホストに対して起動する必要があります。Data Gatherer サービスの構成および起動方法の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

リリース 1.5.0 以前の Performance Manager ユーザー定義グラフの変換

Performance Manager 1.5.0 以前（Performance Manager の Windows バージョン）を使用して、ユーザー定義グラフを作成し、それらを Performance Manager 2.0 で使用するように変換する場合、まず 1.6.0 に変換する必要があります。すると、自動的に 2.0 に変換されます。ユーザー定義のグラフの変換は、次のようにします。

1. vmmmig.exe を実行し、\$ORACLE_HOME\SYSTEM\ADMIN に vtmusr.txt という名前のテキスト・ファイルを作成します。このテキスト・ファイルには、1.5.0 以前の Performance Manager を使用して作成したユーザー定義のグラフに関するデータが含まれています。vmmmig.exe の実行時に、変換するユーザー定義のグラフが含まれている Enterprise Manager リポジトリに対するユーザー名、パスワードおよびサービスを指定します。たとえば、次のように指定します。

```
vmmmig joseph/password@my_rep
```

上のコマンド・ラインの my_rep は、Enterprise Manager リポジトリのサービス名です。

2. vmm2vtm.exe を実行し、vtmusr.txt のデータを使用して、Performance Manager 1.6.0 で使えるユーザー定義グラフをリポジトリに作成します。vmm2vtm.exe を実行し、Enterprise Manager リリース 2.x リポジトリのユーザー名、パスワードおよびサービスと、ユーザー定義のグラフを Performance Manager 1.6.0 用に格納するサービス名を指定します。たとえば、次のように指定します。

```
vmm2vtm.exe joseph/password@my_rep my_db
```

上のコマンド・ラインで、my_rep は Enterprise Manager リリース 2.x リポジトリのサービス名、my_db は、ユーザー定義グラフを格納するターゲット・サービス名です。つまり、上のコマンドを実行すると、ユーザー定義グラフはすべて変換され、Performance Manager 1.6.0 ツリー・ビューの my_db サービスの下に格納されます。

vmm2vtm.exe の実行時にエラー・メッセージが表示された場合、そのメッセージに基づいて vtmusr.txt を編集します。たとえば、グラフに問題がある、またはグラフが存在しない、というエラー・メッセージが出るとします。vtmusr.txt にはグラフのリストが含まれているので、このファイルを編集して、問題のグラフを削除します。

再度、vmm2vtm.exe を実行します。

パラレル・サーバー環境での Performance Manager の使用

パラレル・サーバー環境で Performance Manager を使用するには、2 つのデータベース・インスタンスを起動してください。起動しないと、Performance Manager では、そのサーバーはパラレル・サーバーとして扱われません。

Oracle Parallel Server 環境で Performance Manager を使うには 2 つの方法があり、それぞれの構成手順が異なります。

2 つの方法とそれぞれの構成手順は、次のとおりです。

1. Oracle7 Parallel Server 環境を監視するために Performance Manager 2.0 を使用している場合、次の指示に従ってください。
 - a. すべてのインスタンスが実行中であることを確認します。
 - b. ops_gdl.sql を実行し、実際の ops_dbl.sql を作成します。同梱されているものは例にすぎません。ops_dbl.sql の実際の内容は、データベース名、インスタンス名、存在するインスタンスの数によって異なります。
 - c. ops_mon.sql を実行し、それによって ops_ctab.sql、ops_dbl.sql、ops_pack.sql を実行して、PM の表とビューを作成し、Oracle7 Parallel Server データをフェッチしてグラフに表示します。

Oracle7 にはグローバル VS (GV\$) 表がありません。これらのファイルにより、一連の PL/SQL プロシージャ、データベース・リンク、および GV\$ 表がない場合に Performance Manager で使われる OS 表がインストールされます。
2. Oracle8 Parallel Server 環境の監視に Performance Manager 2.0 を使用している場合は、パラレル・サーバー・スクリプトを実行する必要はありません。たとえば、GV\$ 表を持つリリースの Oracle (Oracle 8.0 以降) を使用していれば、これらのスクリプトを実行する必要はありません。

パラレル・サーバー・スクリプトの詳細は、パラレル・サーバーのドキュメント・セットの『Oracle Parallel Server Management ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Windows NT で Performance Manager 用ディスク統計収集を使用可能化

Windows NT でのディスク統計収集： Windows NT でディスク統計を収集するには、次のように入力してディスク統計を使用可能にする必要があります。

```
diskperf -Y
```

ディスク統計は、次回そのシステムを再起動すると、使用可能になります。

DISKPERF ツールとその使用の詳細は、Microsoft Windows NT のドキュメントを参照してください。

TopSessions の設定

TopSessions の機能をインストールするには、次の条件が必要です。

- TopSessions から接続する各データベースに、表およびビューを追加作成する。
- 特定の SELECT 権限を付与されている。

smptsixx.sql スクリプトは、このプロセスを自動化するためのものです。

ファイル名の中の xx は、スクリプトを実行する必要があるデータベースのリリースを示します。データベースのリリースごとのスクリプトは、\$ORACLE_HOME¥SYSMAN¥ADMIN ディレクトリにあります。

データベースのリリース	実行するスクリプト
Oracle 7.3.4	smptsi73.sql スクリプト
Oracle 8.0	smptsi80.sql スクリプト
Oracle 8.1	smptsi81.sql スクリプト

smptsixx.sql を実行すると、次の 2 つのスクリプトも自動的に実行されます。

- catbloxx.sql
- utlxplxx.sql

これらの 2 つのスクリプトによって、Oracle Advanced Events で必要ないくつかの追加の表、ビュー、およびパブリック・シノニムが、管理対象のデータベースに作成されます。

データベースに TopSessions を設定するには、次のようにします。

1. 「DBA Management Pack」プログラム・グループから、「SQLPLUS Worksheet」アイコンをダブルクリックし、ツールを起動します。
2. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスを使用して、管理対象のデータベースに SYS として接続します。

オンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

3. 各管理者アカウントに、SELECT ANY TABLE 権限を付与します。SYSTEM と同等の権限がすでにアカウントに付与されている場合は、このステップは省略してもかまいません。

管理対象データベースで smptsixx.sql スクリプトを実行するには、前述のように、各データベースに SYS としてログインする必要があります。

Security Manager を使用して、アカウントに権限を付与します。Security Manager の使用方法の詳細は、「Oracle Enterprise Manager オンライン・ヘルプ」を参照してください。

4. 管理対象データベースに対して、smptsixx.sql スクリプトを実行します。

管理対象データベースに対して smptsixx.sql スクリプトを実行しない場合、TopSessions を使おうとすると、「表またはビューが存在しません。」というメッセージが表示されます。

5. 管理対象データベースに ALL_CATALOG ビューがない場合、SYS アカウントからデータベース上で catalog.sql を実行します。catalog.sql スクリプトは、\$ORACLE_HOME¥RDBMSxx¥ADMIN ディレクトリにあります。
6. 管理対象データベースに AUDIT_ACTIONS ビューがない場合、SYS アカウントからデータベース上で cataudit.sql を実行します。cataudit.sql スクリプトは、\$ORACLE_HOME¥RDBMSxx¥ADMIN ディレクトリにあります。
7. SQL*Plus Worksheet を終了します。

ローカル・ディレクトリ構造

この付録では、Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 のローカル・ディレクトリ構造について説明します。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 のローカル・ディレクトリ構造

次のディレクトリが、Oracle Enterprise Manager コンポーネントで使用されます。ソフトウェアおよびスクリプト・ファイルは、Enterprise Manager がインストールされているマシンの ORACLE_HOME ディレクトリにインストールされます。

\$ORACLE_HOME¥sysman のディレクトリ構造は、次のとおりです。

- \$ORACLE_HOME¥sysman¥system
- \$ORACLE_HOME¥sysman¥admin
- \$ORACLE_HOME¥sysman¥config
- \$ORACLE_HOME¥sysman¥log
- \$ORACLE_HOME¥sysman¥temp

ディレクトリは、インストール時に作成されます。

\$ORACLE_HOME¥sysman¥system

\$ORACLE_HOME¥sysman¥system ディレクトリには、実行時に必要なシステムの重要ファイルが入っています。内容は変更しないでください。

\$ORACLE_HOME¥sysman¥admin

\$ORACLE_HOME¥sysman¥admin ディレクトリは、Oracle Enterprise Manager 用です。内容は変更しないでください。ここには、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で使用される SQL スクリプトと、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant によってロードされるレジストリ・ファイルが入っています。

\$ORACLE_HOME%sysman%config

omsconfig.properties ファイルや oemclient.properties ファイルなどの、ユーザーが変更できるファイルは、\$ORACLE_HOME%sysman%config ディレクトリにあります。Oracle Enterprise Manager リリース 2 のコンポーネントのトレース情報は、omsconfig.properties ファイルと oemclient.properties ファイルに格納されます。

\$ORACLE_HOME%sysman%log

\$ORACLE_HOME%sysman%log ディレクトリには、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。

\$ORACLE_HOME%sysman%temp

\$ORACLE_HOME%sysman%temp ディレクトリには、管理操作の処理中に作成される可能性のある一時ファイルが入っています。

その他の Configuration Assistant 操作

Enterprise Manager Configuration Assistant は、データベース管理者の日常のリポジトリ作成、削除、および構成パラメータのメンテナンスを支援します。

リポジトリ作成については、2-1 ページの「[リリース 2 リポジトリの作成](#)」で説明しています。

この付録では、次のことを説明します。

- リポジトリの削除方法
- 異なるリポジトリを使用、またはリポジトリ・ユーザーのパスワード変更に対して応答するために、ローカル管理サーバーをリダイレクトする方法

このほか、omsconfig.properties ファイルにアクセスできない場合の、リポジトリ作成およびパラメータ構成についての情報も提供しています。

注意： Oracle Enterprise Manager リリース 1 リポジトリは、Oracle Enterprise Manager リリース 2 リポジトリと異なります。リリース 2 のリポジトリは、リリース 1 のリポジトリと同じスキーマに共存させられません。

既存リポジトリの削除

リポジトリを削除するには、DBA 権限を持つユーザーとして、データベースに接続してください。

注意： リポジトリを削除する前に、まず、このリポジトリを使用しているすべての管理サーバーを停止してください。このリポジトリを使用中の管理サーバーがある場合、リポジトリを削除するとサーバー・エラーが生じます。

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

- Windows NT の場合

Windows NT の「スタート」メニューから Oracle Configuration Assistant を起動できます。

- UNIX の場合

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、Oracle Configuration Assistant を起動できます。

```
emrepmgr
```

リポジトリを削除するには、この後の各項で説明する手順に従ってください。

ステップ1「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作リストから「既存のリポジトリの削除」を選択し、「次」を押して操作を続けます。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。

Configuration Assistant で omsconfig.properties ファイルに書き込めない場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。

ステップ2「リポジトリのデータベースを選択」

削除するリポジトリのあるデータベースにログインします。

ユーザー名とパスワード： データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。これは個人のデータベース・ユーザー・アカウントで、Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントではありません。

サービス： Net8 サービスがこの Oracle ホーム用に構成されていない場合、サービスを次の形式で指定することも可能です。

```
<host>:<port>:<sid>
```

ここで

host は、データベースがあるマシン名

port は、データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526

SID は、データベース・システム ID

例：

```
pjlee-pc:1521:orcl
```

「次」を押して、操作を続けます。

ログインに成功すると、「リポジトリを選択」ページが表示されます。

ステップ3「リポジトリを選択」

Enterprise Manager Configuration Assistant で、指定データベースにリリース2のリポジトリが検出された場合、それらが表示されます。該当するリポジトリを選択し、「次」ボタンを押して操作を続けます。

指定データベースにリリース2のリポジトリがない場合、リポジトリ・リストは空でグレー表示になり、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」ボタンをクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「前」ボタンをクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ4「リポジトリの削除オプションを選択」

「リポジトリの削除オプションを選択」ページからは、リポジトリとスキーマ・オブジェクトを削除することも、リポジトリのみを削除することもできます。

リポジトリのみを削除する場合、Oracle Enterprise Manager リリース2のSQL drop スクリプトを呼び出すために、Enterprise Manager Configuration Assistant でリポジトリに接続できるように、リポジトリ・ユーザーのパスワードを指定してください。リポジトリ・オブジェクトのみが削除されます。リポジトリのその他のスキーマ・オブジェクトは残ります。

リポジトリ・ユーザーとそのすべてのスキーマ・オブジェクトを削除する場合、パスワードは不用です。リポジトリを指定するまで、ローカル管理サーバーを起動できません。リポジトリ・ユーザーとそのスキーマ、およびリポジトリのすべてのスキーマ・オブジェクトが削除されます。

注意： このステップを継続する前に、そのスキーマに他に重要なオブジェクトがないか確認してください。これを確認しないと、貴重なデータが失われる可能性があります。

Configuration Assistant で管理対象のリポジトリが omsconfig.properties ファイルで指定されていることがわかり、そのリポジトリを削除しない場合、管理サーバーの構成は変わりません。

管理対象リポジトリを削除する場合、管理サーバーの構成は消去されます。「次」を押して、操作を続けます。「リポジトリ削除のサマリー」ページが表示されます。

ステップ5「リポジトリ削除のサマリー」

「リポジトリ削除のサマリー」ページには、リポジトリ削除ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックしてリポジトリ削除を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ6「構成アクションの進行」

「終了」ボタンをクリックすると、「構成アクションの進行」ウィンドウが現れ、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンをクリックすれば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「クローズ」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

終了したら「クローズ」ボタンをクリックします。Configuration Assistant から、別の操作を実行するかどうか尋ねられます。「はい」と答えると、Configuration Assistant は最初のページに戻ります。「いいえ」と答えると、Configuration Assistant は終了します。

管理対象リポジトリを削除した場合、次の警告が表示されます。「このマシンの管理サーバーは、削除したリポジトリが管理されていました。この管理サーバーにより管理されるリポジトリを変更しないと、管理サーバーを起動できません。ここでリポジトリを変更しますか」

「はい」を選択すると、「構成パラメータ」ページが表示されます。

「いいえ」を選択すると、Configuration Assistant から、別の操作を実行するかどうかを尋ねられます。「はい」と答えると、Configuration Assistant は最初のページに戻ります。

構成パラメータの編集

次の作業を実行する場合、「構成パラメータの編集」を選択します。

- 既存リポジトリを管理するように管理サーバーを設定
- 別のリポジトリを使用するように管理サーバー構成を変更
- 管理サーバーで、起動時にリポジトリへのログインで使用するパスワードの変更
- 別のデータベースでリポジトリを使用するために管理サーバーを変更

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって設定または変更されるのは、それが実行されているマシンの構成パラメータのみです。

Configuration Assistant では、それが稼動しているマシンの構成パラメータ (omsconfig.properties ファイル) のみ設定または変更できます。Configuration Assistant では、別のマシンの構成パラメータを変更できません。同じリポジトリを管理している他のすべての管理サーバー・マシンで、「構成パラメータの編集」オプションを使用して Configuration Assistant を実行し、各マシンの構成パラメータを変更してください。

リポジトリ接続情報（ユーザー名、パスワード、サービス）を設定または変更して、正しいリポジトリを指定してください。同じリポジトリを管理するすべての管理サーバー・マシンでは、構成パラメータが一致している必要があります。

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

- Windows NT の場合

Windows NT の「スタート」メニューから Oracle Configuration Assistant を起動できます。

- UNIX の場合

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、Oracle Configuration Assistant を起動できます。

```
emrepmgr
```

管理サーバー構成パラメータを編集するには、この後の各項で説明する手順に従ってください。

ステップ1「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「構成パラメータの編集」を選択し、「次」を押して操作を続けます。「構成パラメータ」ページが表示されます。

ステップ2「構成パラメータ」

「構成パラメータ」ページが表示されます。希望のパラメータを設定または変更します。この情報は、このマシンの管理サーバーが次回起動するときに使用されます。無効な情報があると、管理サーバーは起動しません。

ユーザー名

リポジトリのユーザー名を入力して、管理サーバーの構成を別のリポジトリを使用するように変更します。

パスワード

リポジトリ・ユーザーのパスワードを入力して、管理サーバーで起動時にリポジトリへのログインに使用されるパスワードを変更します。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれに合わせて変更してください。

サービス

リポジトリが常駐するサービスまたはデータベースを入力し、別のデータベースのリポジトリを使用するように管理サーバーを変更します。

注意： 次のページに進むには、このページのパラメータを少なくとも 1 つ変更する必要があります。なにも変更せずに「次」ボタンをクリックすると、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください」というエラー・メッセージが現れます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページに進めません。

ステップ 3 「構成パラメータを変更」

「構成パラメータを変更」ページには、管理サーバー・パラメータ変更ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックして変更を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

構成ファイルにアクセス不能

リポジトリの作成または削除を選択し、omsconfig.properties ファイルにアクセス不能の場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。omsconfig.properties ファイルは、書き込み不可能な場合があるので、アクセスできない可能性があります。

omsconfig.properties ファイルを変更せずにリポジトリの操作を継続することも、操作を中止することもできます。

「操作を実行します」を選択した場合、「次」ボタンが使用可能になり、通常の順序でリポジトリの作成または削除の操作を継続できます。

リポジトリの作成を実行中の場合、Configuration Assistant によりリポジトリは作成されますが、omsconfig.properties ファイルは作成されません。ファイルに対する書き込みアクセス権がないと、管理サーバーを起動できません。

サマリー・ページには、構成ファイルがアクセス不能であったことが示され、「構成アクションの進行」ウィンドウに、処理ステップとして「構成パラメータの設定」が表示されません。

後ほど omsconfig.properties ファイルへの書込みアクセス権を得たときに、「構成パラメータの編集」オプションを使用して、作成したリポジトリのユーザー名、パスワードおよびサービス情報を入力してください。構成ファイルが更新されると、管理サーバーを起動できるようになります。

「リポジトリ操作を実行しない」を選択した場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが最後のページになります。「次」ボタンは使用不可になります。変更は実行されません。

トラブルシューティング

Oracle Enterprise Manager をインストールまたは使用する前に、『Oracle Enterprise Manager リリースノート』にある互換性マトリックスを確認してください。

この章では、考えられるトラブルシューティングの問題を説明します。

- [カスタマ・サポートへの問題の報告](#)
- [ロギングとトレースの設定](#)
- [管理サーバーのトラブルシューティング](#)
- [パスワードの再設定](#)
- [Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)

カスタマ・サポートへの問題の報告

Oracle Enterprise Manager をご使用の際、役に立つ資料が多数あります。

カスタマ・サポートにお問い合わせになる前に、まず、マニュアルや『Oracle Enterprise Manager リリースノート』を調べてみてください。Oracle Enterprise Manager のマニュアルのリストが、「はじめに」の xi ページの「ドキュメント・セット」に出ています。

特に利用価値の高いマニュアルは、次のとおりです。

- 『Oracle Enterprise Manager リリースノート リリース 2.0.4』では、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースのほか、製品の実際の動作とマニュアルの説明との違いについても記されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』では、Oracle Intelligent Agent の管理方法が説明され、トラブルシューティング情報が提供されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル リリース 2.0.4』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨処置が記載されています。

マニュアルでは問題が解決しない場合には、カスタマ・サポートに次の重要情報をお知らせください。

1. どのような問題か。
2. 問題が発生したときに何をしていたか。
 - 問題が発生した製品またはコンポーネント。
 - 実行していた操作。問題が再現可能か。問題を調べるために取った処置。
3. ご使用の環境。
 - ご使用のオペレーティング・システムとバージョン。
 - ご使用の Oracle Enterprise Manager のリリースとインストール場所。
 - ご使用のインテリジェント・エージェントのリリースとインストール場所。
 - ご使用のサーバーのリリースとインストール場所。
 - 管理サーバーのインストール場所。
 - オプションの Data Gatherer をインストールしている場合は、そのリリースとインストール場所。
 - ご使用の環境についてスキーマ、データ、スクリプトまたは関連情報を提供。可能ならば、問題の再現に役立つファイルも提供してください。
4. 表示されたエラー・メッセージと番号。
5. トレースを実行し（使用可能な場合）、トレース情報を提供するか。
6. ログ・ファイルを調べ（ある場合）、ログ情報を提供するか。

ロギングとトレースの設定

Oracle Enterprise Manager リリース 2.0 システムでは、トレースとロギングがサポートされています。トレースは、アプリケーションによる情報提供のための画面へのデータ書込みです。ロギングは、トレース情報のファイルへのリダイレクションです。

この付録の内容は、次のとおりです。

- [管理サーバーのトレースとロギング](#)
- [クライアントのトレース](#)
- [Web ブラウザのトレース](#)
- [ポケットベルのトレース](#)

管理サーバーのトレースとロギング

管理サーバーのロギングとトレースは、\$ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリにある omsconfig.properties ファイルで指定します。

ロギングとトレースを使用可能にするには、omsconfig.properties ファイルで指定したオプションを実行します。

プロパティは次のとおりです。

```
OEM.TRACING.ENABLED = <boolean>                # defaults to false
OEM.LOGGING.ENABLED = <boolean>                  # defaults to false
OEM.LOGGING.DIR = <directory_spec>                # defaults to $OH/sysman/log
OEM.TRACING.LEVEL = <oem_trace_levels>
OEM.LOGGING.FILENAME = <filename>                 # defaults to OMS log files
```

ここで

```
<boolean> := true | false
<oem_trace_levels> := <user_trace_level> | <admin_trace_level> |
<developer_trace_level>
<user_trace_level> := 5
<admin_trace_level> := 3
<developer_trace_level> := 2
```

<user_trace_level> では、重大またはエラー・レベルのメッセージのみが表示されます。

<admin_trace_level> では、<user_trace_level> メッセージと警告メッセージが表示されます。

<developer_trace_level> では、<admin_trace_level> のすべてのメッセージが、情報メッセージとデバッグ・メッセージとともに表示されます。

管理サーバーでは、トレース・メッセージはすべて OMS ログ・ファイル (oms.log.0、oms.log.1、oms.log.2 など) に入っています。まず 1 つのログ・ファイルに、それがいっぱいになると次のファイルに書き込み、最後の 2 ファイルがリサイクルされます。

管理サーバーのログ・ファイルにはサイズ制限があります。デフォルトでは、管理サーバーの起動時に、25MB のログ・ファイルしか作成できません。最初のログ・ファイル名は oms.log.0 です。そのファイルが 25MB の上限に達すると、別のログ・ファイルが作成されます。別のログ・ファイル名は oms.log.1 です。そのファイルが 25MB 制限に達すると、oms.log.0 ファイルが削除され、新しいログ・ファイル、oms.log.2 が作成されます。最後の 2 つのログ・ファイルが保存されます。

管理サーバーが起動すると、oms.log.* という名前のそれまでのログ・ファイルは、すべて自動的に削除されます。

OEM.LOGGING.MAX_SIZE プロパティにより、ログ・ファイルの最大合計サイズを制御します。OEM.LOGGING.MAX_SIZE プロパティに指定する値は、MB 単位の記憶領域です。

デフォルト値は 50 で、最大 25MB のログ・ファイルが 2 つになります。パラメータを 0 に設定すると、1 つのログ・ファイルがサイズ制限なしで使用されます。

バックアップおよびデータ管理ウィザードのトレースとロギング

バックアップおよびデータ管理のロギングとトレースは、`$ORACLE_HOME\sysman\config` ディレクトリにある `omsconfig.properties` ファイルで指定します。

ロギングとトレースを使用可能にするには、`omsconfig.properties` ファイルで指定した次のオプションを実行します。

```
OEM.TRACING.ENABLED = TRUE  
OEM.TRACING.LEVEL = 2
```

クライアントのトレース

クライアントのトレースを使用可能にするには、次の環境変数を設定します。

```
ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE
```

すべてのトレース・メッセージが送られるところに、コンソール・ウィンドウが表示されます。

`ORACLE_OEM_CLIENTTRACE` 変数を設定しないと、クライアントのトレースはできません。

クライアント・トレース設定は、`$ORACLE_HOME\sysman\config\oemclient.properties` ファイルで指定します。

有効なトレース設定は、`omsconfig.properties` ファイルの設定と同じです。詳細は、[管理サーバーのトレースとロギング](#)を参照してください。

Web ブラウザのトレース

ブラウザでコンソールの起動時に問題が発生した場合は、問題をカスタマ・サポートに報告する前に、トレース情報を集めてください。

ブラウザのトレースを設定するには、次の手順を実行してください。

1. ブラウザのセッションを終了します。
2. Java プラグインのコンソールを起動します。

Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」>「Oracle JInitiator Control Panel 1.1.7」をクリックします。ウィンドウが表示されます。「Show Java Console」チェックボックスをクリックし、「適用」をクリックします。プラグイン・プロパティ・ウィンドウをクローズします。

3. ブラウザを再起動し、Oracle Enterprise Manager コンソールを再ロードします。

Java コンソール・ウィンドウが現れ、プラグインによってロードされた Java クラスと、発生する可能性のある例外が表示されます。例外が表示されない場合は、画面いっぱいの情報が 3 回か 4 回表示されるごとに画面を消去（「消去」ボタンをクリック）してください。

4. Java コンソール・ウィンドウに例外が表示された場合は、ファイルにカット・アンド・ペーストして、問題の説明と一緒にファイルをカスタマ・サポートにお送りください。

ポケットベルのトレース

ポケットベル・サービスは、管理サーバーとは別にデバッグやトレースができます。トレースが使用可能な場合、サーバーによって、すべての電話回線処理や、成功または失敗についてのトレース情報が書き込まれます。

paging.cfg ファイルでは、次のパラメータがトレースに影響を与えます。

OEM.TRACING.ENABLED

OEM.TRACING.ENABLED は、トレースのアクティブ化または解除に使用されるブール・フラグです。このフラグを使用して、ポケットベルのアクティビティを追跡します。フラグを真に設定した場合、トレース・ファイルを指定してください。設定可能な値は、TRUE と FALSE です。

OEM.TRACING.LEVEL

OEM.TRACING.LEVEL は、トレースが実行された場合に生成される詳細なトレース情報の量を指定するために使用されます。指定可能な値は次のとおりです。

- 2 - dev: すべてのメッセージを表示
- 3 - admin: 重大なエラーおよび警告のみを表示
- 5 - user: 重大なエラーのみを表示

TRACEFILENAME

TRACEFILENAME は、トレース出力を書き込むファイル名です。

管理サーバーのトラブルシューティング

この項の項目は、次のとおりです。

- [デフォルト以外の Oracle ホームからは正しく実行できない可能性がある 管理サーバー](#)
- [クライアント・アクセス用の管理サーバーの変更](#)

デフォルト以外の Oracle ホームからは正しく実行できない可能性がある管理サーバー

UNIX で、管理サーバーが実行されている Oracle ホームに、ORACLE_HOME 環境変数が設定されていない場合、管理サーバーは、正しい Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームでクラス・ファイルを探そうとするため、正しく起動しません。

csh

環境変数は次のように設定します。

```
setenv ORACLE_HOME '/usr/local/oracle'
```

ksh/sh

環境変数は次のように設定します。

```
ORACLE_HOME = '/usr/local/oracle'
export ORACLE_HOME
```

UNIX システムの場合、Oracle 環境は、coraenv (CSH の場合) または oraenv (その他のシェルの場合) をコールして設定することもできます。このシェル・スクリプトにより、任意の識別子の Oracle 環境を設定します。この識別子は特定のデータベースでも、管理サーバー・ソフトウェアが格納されている ORACLE_HOME を指すものでもかまいません。これらのスクリプトは、特定のマシンやサーバー・ベースの設定を含むようにカスタマイズできます。

coraenv および oraenv スクリプトの詳細は、特定のオペレーティング・システムの Oracle 管理ドキュメントを参照してください。

クライアント・アクセス用の管理サーバーの変更

複数管理サーバー環境で 1 つの管理サーバーに障害が発生した場合、影響を受けるのはそのサーバーに接続しているクライアントのみです。各管理サーバーは、同じリポジトリに接続されている他の管理サーバーとは無関係です。

管理サーバー・ノードを、まだ管理サーバーが稼動している別のノードに変更するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager のログインで、管理サーバーのプルダウン・リストから、アクセスするリポジトリで構成されている管理サーバーを選択します。

使用する管理サーバー名がプルダウン・リストに表示されない場合、次の指示に従ってください。

- a. 「管理サーバー」ボタンをクリックします。「管理サーバー」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- b. 「追加」ボタンをクリックします。「管理サーバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- c. アクセスするリポジトリで構成されている管理サーバー名を入力し、「OK」をクリックします。
 - d. プルダウン・リストから管理サーバーを選択します。
2. Web ブラウザを介して Oracle Enterprise Manager が実行されている各マシンで、コンソールの URL を、管理サーバーが稼動しているノードに変更します。

```
http://<node name of Management Server>
/oem_webstage/cgi-bin/oemconsole.cgi?<Management_Server_hostname>
```

ポケットベル検出の確認

ORACLE_HOME/net80/Agent ディレクトリにある services.ora ファイルを調べて、ポケットベル・キャリア・サービスが正しく検出されているかどうか確認します。services.ora ファイルには、paging.cfg ファイルで指定した各ポケットベル・キャリアのエントリが必要です。

パスワードの再設定

自分の SYSMAN パスワードを忘れ、それを oem_temp に再設定する場合、\$ORACLE_HOME¥sysman¥admin ディレクトリにある vduResetSysman.sql スクリプトを使用します。

スクリプトを使用する前に、まず、管理サーバー・リポジトリに（SQL*Plus を介して）接続してください。

1. コマンド・ラインに次のように入力して、SQL*Plus を起動します。

```
sqlplus
```

2. 接続情報を要求されたら、次のように入力して、データベースに接続します。

```
<emrepository> / <emrepository-pwd> @ <em-repository>
```

たとえば、次のように入力します。

```
mynode/mypassword@mynode.world
```

これは、デフォルトのリポジトリ名がホスト名だからです。

3. 次の vduResetSysman スクリプトを実行します。

```
@$ORACLE_HOME/sysman/admin/vduResetSysman.sql;
```

Configuration Assistant のトラブルシューティング

Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー

この項では、Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー・メッセージと、考えられるそれらの原因を説明し、エラー解決の推奨処置を提示します。

omsconfig.properties ファイルに接続できません

omsconfig.properties ファイルが書き込み不可の場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。詳細は、B-6 ページの「[構成ファイルにアクセス不能](#)」を参照してください。omsconfig.properties ファイルはアクセスできなかったため、見つかりませんでした。

このデータベース・スキーマは Oracle Enterprise Manager V2 リポジトリをサポートしません

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant により、リポジトリが正しく動作するにはデータベース・パラメータが不十分であることが検出されると、次の警告が表示されます。

このデータベース・スキーマは Oracle Enterprise Manager V2 リポジトリをサポートしません
初期パラメータ '`<param-name>`' 値 = `<current-value>` が最小値 = `<minimum-value>` より小さくなっています。

続行してよろしいでしょうか。

「いいえ」を選択すると、Enterprise Manager Configuration Assistant では、データベース・パラメータを変更するまで、そのデータベースでリポジトリを作成できません。Instance Manager を使用するか、データベースの init.ora ファイルを直接編集して、パラメータを必要最小限の値に変更し、リポジトリ・データベースを再起動してください。

選択したデータベース・ユーザーは必要な DBA 権限を持っていません

選択したデータベースに DBA ユーザーとしてログインするとき、Configuration Assistant によって、ユーザーに必要な権限があるかどうかチェックされます。ユーザーが必要な DBA 権限を持っていない場合、「選択したデータベース・ユーザーは必要な DBA 権限を持っていません。DBA 権限のあるユーザーとしてデータベースにログインします」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。操作を継続するには、正しいデータを入力してください。データを入力し、再度試みてください。

リポジトリ・ログイン用のデータベースの選択に失敗しました

無効なユーザー名、パスワードまたはサービスを入力すると、失敗を示すエラー・メッセージが表示されます。たとえば、「接続に失敗しました。ORA-01017: ユーザー名 / パスワードが無効です; ログインは拒否されました。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。データを入力し、再度試みてください。

そのユーザーはすでに存在し、V2 リポジトリまたは部分的な V2 リポジトリがすでに含まれています

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、そのユーザーがすでに存在することが検出された場合、次のメッセージが表示されます。「そのユーザーはすでに存在し、V2 リポジトリまたは部分的な V2 リポジトリがすでに含まれています。このリポジトリを上書きすることもでき、別のユーザーを選択することもできます。リポジトリを上書きすると、重要なデータが永久に失われる可能性があります。別のリポジトリを選択しますか。」

「はい」を選択すると、別のリポジトリ名を入力できるように、再び「リポジトリへのログイン情報」ページが表示されます。「いいえ」を選択すると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。

そのユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれています

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名が、データベースにすでに存在するユーザーまたはスキーマの名前で、Oracle Enterprise Manager リリース 1 のリポジトリが含まれていることが検出された場合、次のメッセージが表示されます。「そのユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれています。V2 リポジトリは、V1 リポジトリを同じスキーマ内では共存できません。別のユーザー名を選択してください。」

ユーザーはこのデータベースにすでに存在します

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名が、データベースにすでに存在するユーザーまたはスキーマの名前で、Oracle Enterprise Manager のリリース 2 と 1 のどちらのリポジトリも含まれていない場合、次のメッセージが表示されます。「ユーザーはこのデータベースにすでに存在します。このユーザーのスキーマ内にリポジトリを作成しますか。」

「いいえ」を選択すると、異なるユーザー名を選択できます。

「はい」を選択すると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。詳細は、2-8 ページの「[ステップ 5「リポジトリ作成のサマリー」](#)」を参照してください。

このマシンの管理サーバーにより、現在サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリが管理されています

リポジトリの作成中、Configuration Assistant で、管理対象リポジトリが omsconfig.properties ファイルですでに指定されていて、そのリポジトリと異なるリポジトリを作成している場合、次のメッセージが表示されます。「このマシンの管理サーバーにより、現在サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリが管理されています。ここで、サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」

「はい」を選択すると、構成が更新されます。構成ファイルへの変更を有効にするには、管理サーバーを停止して再起動してください。「いいえ」を選択すると、構成ファイルは更新されません。「リポジトリ作成のサマリー」ページと「構成アクションの進行」ウィンドウのステップに、選択が反映されます。

リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がないことが検出された場合、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」基準を満たす別の表領域を選択するか、表領域のサイズを拡大し、必ず自動拡張されるようにします。表領域の編集の詳細は、C-10 ページの「[リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない](#)」を参照してください。

リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がないことが検出された場合、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」

Configuration Assistant では、選択したデフォルト表領域が、次の基準を満たしているかチェックします。

- リポジトリ作成用の最小空き領域として少なくとも 5MB の領域がある。
- 自動拡張される。

8.1.x の場合、Enterprise Manager と 8.1 スタータ・データベースのデフォルト表領域である、既存の OEM_REPOSITORY 表領域を使用します。次に示すスクリプトを実行して、OEM_REPOSITORY 表領域を作成することも、既存の表領域のサイズを拡大することもできます。

OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成

たとえば、OEM_REPOSITORY 表領域が作成されていない場合、次のスクリプトを実行すれば、OEM_REPOSITORY 表領域が作成できます。**注意：** 必ず '<datafile_specification>' にデータファイルの指定を入力してください。

Enterprise Manager リポジトリに、特定の特性を持つ表領域を作成することをお勧めします。そのような表領域は、Oracle 8.1、8.0 および 7.3 データベース上で次のスクリプトを実行すれば作成できます。この表領域は、最初はデータファイル・サイズが 5MB に設定され、必要に応じて最大 80MB まで自動的に拡張されます。

```
CREATE TABLESPACE "OEM_REPOSITORY"
DATAFILE
    '<datafile_specification>'
    SIZE 5M AUTOEXTEND ON NEXT 25M MAXSIZE 80M
DEFAULT STORAGE
    ( INITIAL 128K
      NEXT 128K
      MINEXTENTS 1
      MAXEXTENTS UNLIMITED
      PCTINCREASE 0 )
MINIMUM EXTENT 128K
```

既存の表領域のサイズを拡張

Storage Manager を使用して、既存の表領域のサイズを拡張するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. Storage Manager を起動します。
2. ログインして、システム (DBA) 権限でデータベースの既存のアカウントに接続します。
3. 「データファイル」フォルダから、既存のデータファイルをダブルクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「一般」ページが表示され、データファイルのファイル・サイズを編集できます。データベースの最小サイズは、5MB 以上に設定してください。
4. 「一般」ページの「適用」ボタンをクリックします。
5. 「自動拡張」タブをクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「自動拡張」ページが表示されます。
6. 「自動拡張可」ボックスをチェックし、「適用」ボタンをクリックします。

リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant により、リポジトリが正しく動作するにはデータベース・パラメータが不十分であることが検出されると、次の警告が表示されます。

このデータベースでは、Oracle Enterprise Manager V2 リポジトリはサポートしていません。
初期パラメータ '`<param-name>`' 値 = `<current-value>` が最小値 = `<minimum-value>` より小さくなっています。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant では、データベース・パラメータを変更するまで、そのデータベースでリポジトリを作成できません。

Instance Manager を使用するか、データベースの `init.ora` ファイルを直接編集し、データベースを再起動します。

Instance Manager を使用して、データベースのパラメータを変更するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. Instance Manager を起動します。
2. SYSDBA 権限を持ったユーザーとしてログインします。
3. 「初期化パラメータ」をダブルクリックします。「初期化パラメータ」プロパティ・シートが表示されます。
4. 該当するプロパティ・ページのタブをクリックし、変更の必要があるデータベース・パラメータを変更します。
5. 「OK」をクリックします。

索引

A

admin_trace_level, C-3
admin ディレクトリ, A-1

C

Capacity Planner, 設定, 9-2
catbloxx.sql, 9-5, 11-4
catrman スクリプト, 8-6
Configuration Assistant
 起動, 2-3
 その他の操作, B-1
 トラブルシューティング, C-8
 リポジトリ作成への使用, 2-1
config ディレクトリ, A-1

D

Data Gatherer
 構成, 9-2, 9-3, 11-2
 定義, 1-3
DBA Management Pack, 8-1
dbapps.cfg ファイル, 8-9
developer_trace_level, C-3
Diagnostics Pack, 9-1

E

EMAdministratorName, 3-2, 3-3
EMpassword, 3-2, 3-3

H

host (マシン名), 2-5, B-2

I

init.ora ファイル, C-11

L

log ディレクトリ, A-1

M

Migration Assistant, 7-1
 起動, 7-8

N

NT 用ポケットベル・サービス
 起動, 6-15
 状態の問合せ, 6-16
 設定, 6-13, 6-14
 停止, 6-16

O

OEM_REPOSITORY 表領域, 2-7, C-10
oem_temp パスワード, 3-2, 3-3
oem_webstage アーカイブ, 6-6
oemapp application_name コマンド, 8-1
oemapp console コマンド, 6-2
oemclient.properties ファイル, C-4
oemctrl start oms コマンド, 3-1
oemctrl status oms コマンド, 3-2
oemctrl stop oms コマンド, 3-3
oem.logging.dir, C-3
oem.logging.enabled, C-3
oem.logging.filename, C-3

oem.tracing.enabled , C-3
oem.tracing.level , C-3
omsconfig.properties ファイル , 2-2 , C-3
Oracle Enterprise Manager
 system ディレクトリ , A-1
 アーキテクチャ , 1-1
 インテリジェント・エージェント , 1-2 , 1-3
 管理サーバー , 1-3 , 3-1 , 3-2 , 4-1
 コンソール , 1-1 , 1-3 , 6-1 , 6-9
 設定リスト , 3-2
 トレースとロギング , C-2
 リポジトリ , 1-2 , 2-1
 ローカル・ディレクトリ構造 , A-1
Oracle Launch Pad
 データベース管理アプリケーションの起動 , 8-2
Oracle Standard Management Pack , 11-1

P

paging.cfg ファイル , C-5
Performance Manager
 設定 , 9-2 , 11-1

R

RECOVERY_CATALOG_OWNER ロール , 8-6

S

SID (データベース・システム ID) , 2-5 , B-2
smptsixx.sql , 9-5 , 11-4
SMTP メール
 アドレス , 6-13
 アドレスでの空白の使用 , 6-13
 ゲートウェイ , 6-12
SMTP メール・ゲートウェイ , 6-12
SNMP トラップ , 構成 , 6-21
SQL Analyze , 設定 , 10-1
sysman アカウント , 3-2
system ディレクトリ , A-1

T

Tablespace Manager , 設定 , 10-2
temp ディレクトリ , A-1
TopSessions
 設定 , 9-5 , 11-4

Trace
 設定 , 9-6
 フォーマット表 , 9-7
 リポジトリ表 , 9-7
Tuning Pack , 10-1

U

user_trace_level , C-3
utlxlplx.sql , 9-5 , 11-4

V

vduResetSysman.sql スクリプト , C-7

W

Web サイト , インストール , 6-5
Web ブラウザ , 6-5
 コンソールを実行するための設定 , 6-7
Windows NT ユーザー・アカウント
 権限の割当て , 6-10
 作成 , 6-9

あ

アーキテクチャ
 Oracle Enterprise Manager , 1-1

い

移行の段階 , 7-2
インテリジェント・エージェント
 UNIX , 5-3
 起動 , 5-4
 状態の確認 , 5-4
 停止 , 5-4
 Windows NT , 5-1
 起動 , 5-2
 状態の確認 , 5-3
 停止 , 5-2
 定義 , 1-2 , 1-3

え

エージェント
 UNIX

- 起動, 5-4
- 状態のチェック, 5-4
- 停止, 5-4
- Windows NT, 5-1
 - 起動, 5-2
 - 状態のチェック, 5-3
 - 停止, 5-2
- 定義, 1-2, 1-3

か

- 拡張イベント
 - 設定, 9-1
- カスタマ・サポート, 問題の報告, C-1
- 管理サーバー
 - Oracle Enterprise Manager インストールからの自動起動, 2-2
 - 起動, 3-1
 - クライアント・アクセス用の変更, C-6
 - 構成パラメータ, 編集, B-4
 - 構成パラメータの設定, 2-1
 - 状態のチェック, 3-2
 - 接続のダイヤルアップ回線, 6-17
 - 追加, 4-1
 - 定義, 1-3
 - 停止, 3-2
 - データベース管理アプリケーションの接続, 8-1, 8-2
 - トラブルシューティング, C-5
 - ロギングとトレース, C-3
 - ログイン・ダイアログ・ボックスから選択, 6-2
- 「管理サーバー」ダイアログ・ボックス, 6-2
- 管理者, スーパー, 1-3, 6-3
- 管理対象サービスの優先接続情報リスト, 設定, 6-11
- 管理ユーザー
 - 定義, 1-2

き

- 起動
 - Configuration Assistant, 2-3
 - DBA Management Pack, 8-1
 - Migration Assistant, 7-8
 - NT 用ポケットベル・サービス, 6-15
 - 管理サーバー, 3-1
 - コンソール, 6-1
 - Windows の「スタート」メニューから, 6-2

- コマンド・ラインから, 6-2
- ブラウザから, 6-4
- データベース管理アプリケーション, 8-1
 - Oracle Launch Pad から, 8-2
 - 管理サーバーへ接続, 8-2
 - コンソールから, 8-3
 - スタンドアロン, 8-1
 - 単一データベースへ接続, 8-3
- ブラウザからの Oracle Enterprise Manager, 6-4
- 基本用語, 1-2

こ

- 構成
 - Oracle Standard Management Pack, 11-1
 - SNMP トラップ, 6-21
 - Tuning Pack, 10-1
 - ダイヤルアップ回線用コンソール, 6-17
 - データを収集する Data Gatherer, 9-2, 9-3, 11-2
 - リモート SYSDBA アクセス, 6-17
- 構成パラメータのメンテナンス, 2-1, B-1
- 「構成ファイルにアクセス不能」ページ, B-2, B-6
- コンソール
 - 起動, 6-1
 - Windows の「スタート」メニューから, 6-2
 - コマンド・ラインから, 6-2
 - ブラウザから, 6-4
 - 設定, 6-9
 - 定義, 1-1, 1-3
- コンソール URL, 6-6

さ

- 作成
 - OEM_REPOSITORY 表領域, C-10
 - Trace フォーマット表, 9-7
 - Trace リポジトリ表, 9-7
 - 表領域, 8-5
 - ユーザー, 8-6
- サービス検出, 6-4
 - 定義, 1-4

し

- 状態のチェック
 - NT 用ポケットベル・サービス, 6-16
 - インテリジェント・エージェント

NT, 5-3
UNIX, 5-4
管理サーバー, 3-2

す

数値ポケットベルのポケットベル状態コード, 6-16
スーパー管理者, 1-3, 3-2, 3-3, 6-3

せ

セキュリティ・ログイン, 6-2
設定

Advanced Events, 9-1
Capacity Planner, 9-2
Diagnostics Pack, 9-1
NT 用ポケットベル・サービス, 6-13, 6-14
Oracle Enterprise Manager を実行するブラウザ,
6-5
ORACLE_HOME 環境変数, C-6
Performance Manager, 9-2, 11-1
SQL Analyze, 10-1
SQL*Plus Worksheet, 8-8
Tablespace Manager, 10-2
TopSessions, 9-5, 11-4
Trace, 9-6
UNIX 管理対象ホストの優先接続情報リスト, 6-12
UNIX ユーザー・アカウント, 6-12
Web ブラウザ, 6-7
Windows NT ドメイン・ユーザー, 6-11
Windows NT ユーザー・アカウント, 6-9
管理サーバーの構成パラメータ, 2-1
管理対象サービスの優先接続情報リスト, 6-11
コンソール, 6-9
データベース・サイズ, C-11
電子メール通知, 6-12
トレースとロギング, C-2
リカバリ・カタログ, 8-5
ローカル管理サーバーの構成パラメータ, 2-1

た

ダイヤルアップ回線, 構成, 6-17

て

停止

NT 用ポケットベル・サービス, 6-16
インテリジェント・エージェント
UNIX, 5-2

Windows NT, 5-2
管理サーバー, 3-2

ディスク統計収集, 使用可能化
Windows NT での Capacity Planner 用, 9-2
Windows NT での Performance Manager 用, 11-4

ディレクトリ構造, A-1
データ管理ウィザード, 8-4
データベース管理アプリケーション

Instance Manager, 8-2
Schema Manager, 8-2
Security Manager, 8-2
SQL*Plus Worksheet, 8-2
起動, 8-1

Oracle Launch Pad から, 8-2
管理サーバへ接続, 8-2
コンソールから, 8-3
スタンドアロン, 8-1
単一データベースへ接続, 8-3

「データベース接続」ダイアログ・ボックス, 8-4
データベース・リスナー・ポート・アドレス, 2-5,
B-2

データベース管理アプリケーション
Storage Manager, 8-2
電子メール通知, 設定, 6-12

と

トラブルシューティング
Configuration Assistant, C-8
管理サーバー, C-5

トレース, C-2
Web ブラウザ, C-4
管理サーバー, C-3
クライアント, C-4

の

ノードの検出, 6-4

は

パスワード, 再設定, C-7
バックアップ管理ウィザード, 8-4
バッチ ジョブとしてログオン, 拡張ユーザー権限, 6-9

ひ

表領域, 作成, 8-5
表領域, 指定, 2-7

ふ

ファイル

dbapps.cfg, 8-9
init.ora, C-11
oemclient.properties, C-4
omsconfig.properties, C-3
paging.cfg, C-5

へ

編集

管理サーバー構成パラメータ, B-4

ゆ

優先接続情報リスト

定義, 1-4

ユーザー, 作成, 8-6

り

リカバリ・カタログ

設定と登録, 8-5

登録, 8-7

リポジトリ

削除, B-1

作成, 2-1

定義, 1-2

リポジトリの移行

アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解
除, 7-14

移行成功の確認, 7-14

既存のリリース 1.x リポジトリのバックアップ, 7-7

重要な注意, 7-2

準備, 7-5

段階, 7-2

取消し, 7-15

リリース 1.x オブジェクト参照, 7-16

リリース 1.x リポジトリ内の情報の確認, 7-8

リリース 1 とリリース 2 の違い, 7-2

リポジトリ表

Trace, 9-7

リモート SYSDBA アクセス, 6-17

ろ

ローカル・ディレクトリ構造, A-1

ロギング, C-2

管理サーバー, C-3

「ログイン」ダイアログ・ボックス, 8-2

